

教会学校教案誌

2014.10.11.12月号

おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる。
ルカによる福音書1章の28節



No.55

日本キリスト改革派教会
中部中会日曜学校委員会

2014年10～12月カリキュラム（第55号）

—『子どもカテキズム』に基づく二年サイクル第2年—

月 日 教会暦・行事	主 題	子どもカテキズム	参照教理問答
		聖 書 箇 所	暗 唱 聖 句
	単 元 の 目 標		
10月5日	アブラハムの召命	—	—
		創世記12:1～9	詩編37:5
	自分たちも、アブラハムを通し神の選びと召命にあずかっていることを悟らせる		
12日	アブラハムへの約束	問30, 31	ウ告白7, 11, 14章、ウ小20等
		創世記15:1～21	創世記15:6
	アブラハムへの約束がキリストによって私たちにも及んでいる事を感謝しよう		
19日	イサクの奉献	問13	ウ小11、ハイデ26, 27, 28
		創世記22:1～19	創世記22:14
	アブラハムの信仰を導かれた神の恵みを語り、感謝と信仰に招こう		
26日	エジプトに売られるヨセフ	問13	ハイデ27, 28、ウ小11、ウ大18
		創世記37:12～36	コリントー10:13b
	ヨセフ物語を通して、神の歴史支配を確信するしたたかな摂理の信仰へと導こう		
11月2日	主が共におられる幸い	問11, 13, 14	ハイデ1、終末の希望の宣言
		創世記39～41章	創世記39:2
	主が共にいてくださることで安心して生きて行ける、救いの恵みを感謝しよう		
9日	悪を善に造りかえる主	問13	—
		創世記45章、50章	ローマ8:28
	いかなる悪さえ神の善へと変える主を信じ、歴史形成の主体者として生きよう		
16日	神の人モーセ	問34, 65	—
		出エジ2:1、10, 3:1～10	出エジプト3:12
	契約に真実な神を仰ぎ、神に応答して教会共同体形成のために生きよう		
23日	主の過ぎ越し	問13, 24	—
		出エジプト12:21～27	出エジプト12:26～27
	贖いのみわざによって罪赦され、神の民とされた恵みを喜ぼう		
30日 待降節	出エジプト	8, 11, 13, 41, 66	ウ大101, 121
		出エジプト14章	ヨハネ16:33
	神の救いの確かさとその力の偉大さを讃美し、語り続けよう		
12月7日 待降節	平和の王イエスさま	問23, 27	ウ告白8:1、ウ大42、ハイデ31
		イザヤ書9:1～8	イザヤ書9:5
	神の国の福音を告げ、実現する主イエスの御業にあずかった喜びを深めよう		
14日 待降節	マリアへの告知	問22	ウ小22
		ルカ1:26～38	ルカ1:38
	神の母とされるマリアの信仰に学び、今も注がれる神の顧みの眼差しを覚えよう		
21日 降誕祭	キリストの降誕	問22	ウ小22
		ルカ2:8～20	ルカ2:11
	羊飼いに知らされたキリスト降誕の福音を感謝し、クリスマスを喜ぼう		
28日	契約のしるし	問24, 65	ウ告白7, 8章
		出エジプト24章	出エジプト24:8b
	契約の恵みに応答することへと招かれていることを改めて確認しよう		

も く じ

2014年10・11・12月カリキュラム

まえがき	三川 栄二	4
巻頭説教	川杉 安美	5
「子供と親のカテキズムについて」(1)	牧田 吉和	9
絵本に心を耕されて—その1	望月 鈴子	13
「からす たろう」		
副読本のご案内		16

聖書黙想・説教展開例・分級展開例

10月5日	18
10月12日	23
10月19日	30
10月26日	35
11月2日	41
11月9日	47
11月16日	53
11月23日	59
11月30日	65
12月7日	70
12月14日	76
12月21日	82
12月28日	88

2015年1・2・3月カリキュラム

2015年度年間カリキュラム	94
自由募金のお願い	95
執筆者よりひとこと・あとがき	97
	98

まえがき

三川栄二（稲毛海岸教会牧師）

本号は『子供と親のカテキズム』の紹介ですので、カテキズムに基づく教育について紹介したいと思います。カテキズムは、通常は「教理問答・信仰問答」と訳されますが、問答形式のものだけがカテキズムであるとは限りません。しかし「問答」と訳されるように、そこには「問」と「答」のダイナミズムがあるということを強調したいと思います。カテキズムはギリシャ語のカテケーシスという言葉に由来します。これはエコー（響き、こだま）の動詞形であるエケーオー（鳴らす、響く、響かせる、反響させる）に、カタ（下に）が付いたもので、「耳に響かせる」「肉声をもって教え込む」「口で教える」という意味を持っており、古代教会では洗礼志願者教育の意味で用いられました。そこでは信条の伝授とそれに対する復誦が行われたわけですが、そのことが口頭で為されただけではなく、その時代は信条や主の祈りは「秘儀」として、外部に口外することや文書に書くことが禁じられましたので、洗礼志願者はこれらを口頭で教授されると共に、それを復誦することで暗記しました。こうした古代教会のカテケーシスを復興しようとしたのが宗教改革者たちで、ルターやカルヴァンら多くの改革者がこうしたカテキズムを執筆しました。カテキズム教育は、こうした宗教改革の伝統を引き継ぐものです。

カテキズムは「問答」と訳されますが、それは単に教理をオウム返しで覚えさせるというのではなく、口伝えて教えると共に、それが聞いた者の心の中で響かせられていくべきもの、教える者の心に響いているものを聞く者の中に響かせるものであることを意味します。そこには教える者と学ぶ者との間の人格的な対話があります。ルターの『小教理問答書』を、徳善義和氏は「子供がお父さんにした質問」とそれに

対する父親の答として特徴づけます。たとえば「あなたは主なる私の他にものをも神としてはならない」という言葉に対して、「父さん、これなあに」と子供が聞くと、「父さんはね、おまえと一緒にだよ、何ものにもまして神様を畏れて、愛して、信頼するんだよ、神様がいちばんだ」と父親が語り、子供に向かって自分の信仰を証しし、告白する答だとします（『障害者神学の確立をめざして』91頁）。この背後に、当時二歳前後だった長男ハンスとのやり取りがあったことが想像できます。このようにカテキズム教育は、血の通った生活実践の中で営まれる親と子、教師と生徒の「信仰的対話」として為されるもので、そこでは教える者の心に響く信仰の喜びを聞く者に伝えて、その心に響かせようとするのが求められます。

しかもそれが教える者の主観的な言葉ではなく、客観的な教会の言葉として信仰を伝えていくのです。恣意的でない教会の信仰の言葉を自分の言葉として身につけさせていく営みがカテキズム教育です。加藤常昭氏は「もともとは他者の言葉であるはずなのに、それを暗唱するうちにその人の中に内在する言葉、外からの言葉であったのに内からの言葉となってしまうような言葉」と述べます（『雪ノ下カテキズム』364頁）。そしてそのような信仰の言葉をもって、しかも教え語る者による生きた証しをもって教えられる言葉によって、「自分の責任で、自分の言葉として信仰を言い表す練習をさせる」ものだと言います。こうして教会の信仰の言葉を内在化させていくことによって、責任ある主体的な応答として自らの信仰を告白し、生活を確立させていくもの、それがカテキズム教育なのです。

生きているイエス様

川杉安美（綱島教会牧師）

さて、十一人の弟子たちはガリラヤに生き、イエスが指示しておかれた山に登った。そして、イエスに会い、ひれ伏した。しかし、疑う者もいた。イエスは近寄って来て言われた。「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にきなさい。彼らに父と子と聖霊の何よって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」
（マタイによる福音書28章16～20節）

もう亡くなられてしまわれたが、作家の遠藤周作という人がいました。この人は、こんなことを言っていたそうです。「十字架にイエスさまがかかれた時、失望落胆して散りちりになってしまったあの弱い弟子たちが、なぜ数十日後にあんなに強く変わったのだろうか。そこがどうもわからない」。そういうことを言うということは、イエス・キリストの復活は信じていなかったということになります。イエス・キリストの復活を信じないとすると、どうして弟子たちがあんなに変わってしまったのか、そのことの説明ができない。それで、「どうもわからない」ということになったのでしょうか。

イエス様が十字架にかかれたとき、イエス様に従っていた弟子たちは、逃げ出したり、自分はイエス様とは関係ない、そんな人は知らないと言ったり、あるいは部屋に鍵をかけて皆で隠れていた、というような有様でした。自分たちも捕まったり、殺されたりするのではないかと思って、怖くなって隠れていました。それが、わずかに数十日後、そろいもそろって皆が、今度は命を捨ててまでもイエス様のことを伝えるようになってしまったのです。全員がいったん180度変わってしまったのです。いったい何があったのかという問題です。

そのことをたとえば、他の例と比べてみま

しょう。イエス様は御自分のことを救い主と言って色々と教えをしたり奇跡を行ったりしていました。そして、弟子たちが集められ、従う人たちも現れてきました。実は、そういうことは当時は特別珍しいことではなかったのです。似たようなことはいくらかでもありました。聖書にも書いてあります。たとえば「以前にもテウダが、自分を何か偉い者のように言って立ち上がり、その数四百人くらいの男が彼に従ったことがあった」（使徒5:36a）。テウダという人が指導者になって、四百人くらいの男が弟子として従ったという運動が起こりました。それがどうなったかというと「彼は殺され、従っていた者は皆散らされて、跡形もなくなった」（使徒5:36b）。つまり、指導者であったテウダが殺されてしまい、従っていた者たちは皆散り散りになり、もうその運動は跡形もなくなってしまったのです。

あるいはまた、「ガリラヤのユダが立ち上がり、民衆を率いて反乱を起こしたが、彼も滅び、つき従った者も皆、ちりちりにさせられた」（使徒5:37）。ガリラヤのユダというリーダーが現れて、民衆を率いて反乱を起こしたけれども、そのリーダーが死んでしまうと、従っていた人たちは皆ちりちりになってしまったのです。他にも似たような運動が幾つも当時は起こってい

たようなのです。

たとえばテウダスという人が、自分は預言者だと言って、ヨルダン川を二つに分けてそこを通らせると、まるで十戒のモーセみたいなことを言いました。多くの人がやはりそれに従ったのですが、そのテウダスは当時の総督によって首をはねられてしまいました。それでその運動もやはり跡形もなくなりました。そのように、自分が預言者だとか、救い主だとか、リーダーだとか言って、従う弟子たちを作って新しい運動を起こしたり反乱を起こしたりすることが幾つもあったようです。ところが、そういう運動というのは、今見たように、指導者が捕まるか殺されるかしてしまうのです。そうすると、従っていた人たちはもうちりちりになって、その運動は跡形もなくなってしまいます。

イエス・キリストの場合も同じことだったはずです。イエス様が救い主として登場して、そしてそれに従う弟子たちがいて、新しい運動が起こったのです。ところが、そのリーダーであるイエス・キリストが捕らえられ、十字架につけられて殺されてしまったのです。そして従っていた弟子たちは、ちりちりになってしまいました。そこまでは、他の運動と全く同じなのです。だから、それでその運動は、やはり他の運動と同じように跡形もなくなると思われたのです。イエス・キリストのことはそれで終わり、歴史の一コマとして終わるはずだったのです。ところが、この運動だけが、なくならなかったのです。同じころ、他に多くの運動があり、リーダーが殺され、弟子たちは散り散りになり、それで跡形もなくなったのに、ただ一つこのイエス・キリストの運動だけは、跡形もなくなることがなかったのです。それどころか、反対に時代を越え、国を越え、世界中に広がっていくのです。いったい何があったのか、どこが他の運動と違っていたのか。遠藤周作の言葉を借りると「十字架にイエスさまがかかれた時、失望落胆して散りちりになってしまったあの弱

い弟子たちが、なぜ数十日後にあんなに強く変わったのだろうか」。そして、弟子たちは今度は殉教してまでも、命を失ってまでも、イエス・キリストのことを伝えるように変わってしまったのです。たとえば、ペトロは十字架の時に怖くなって「自分はイエスは知らない。イエスとは関係ない」とまで言ってしまった人です。しかしそのペトロは、後にイエス様を伝えるように変わり、紀元64年あたりローマで十字架にかけられて殉教したと思われます。イエス様と同じ十字架では申し訳ないということで、逆さまにつけてくれと言って、逆さまに十字架につけられて死んだという言い伝えがあります。

そのようなペトロを初めとして、恐れて逃げ出し、隠れていた弟子たちが一斉に立ち上がって、殉教してまでもイエス・キリストのことを伝え始めたのです。それは、リーダーであったイエス・キリストが十字架で死んで終わらなかったということです。死んだままではなかったのです。復活して生きておられる。その復活したイエス・キリストに、弟子たちは出会ってしまったのです。死に勝利して復活したイエス様に会ってしまったわけです。もし、それを否定するなら、弟子たちが変わってしまった別の理由を考えないといけません。なぜ、弟子たちがそろいもそろって立ち上がったのか。遠藤周作は、理由を一生懸命考えたようです。でも、イエス・キリストの復活を否定する中でいくら考えても、結局分らないということです。

もしイエス・キリストの復活が単なる作り話とか、弟子たちが勝手に考え出した教えとか物語とかそういうことであるならば、そんな作り話のために殉教までして教えを広めようとするのでしょうか。あるいは単なる作り話のために、こんなにも時代を越えて世界的な宗教にまでなるのでしょうか。このイエス・キリストの復活がなければ、キリスト教は成り立たないし、キリスト教は立ち行かないのです。確かに今はイエス様は天に昇っていかれて、直接見ることはで

きません。けれども、天に昇って行かれる前に言われました。「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」(マタイ28:20)。喜びの時も悲しみの時も、順境にも逆鏡にも、そして死の時も死んだ後も、イエス様が共にいてくださる。それに支えられて、弟子たちはイエス様のために生き抜いて、そしてイエス様のために死んで、死んだ後もイエス様と共にいることになります。

イエス様が地上で生きておられた時には弟子ではなかったが、イエス様が天に昇っていかれた後に弟子になったパウロもそうです。もともとはキリスト教を迫害していたのに、復活したイエス・キリストと出会ったのです(使徒9:1~19)。この経験から、やはり180度変わり、イエス・キリストを命がけで宣べ伝える者となったのです。そして、ペトロと同じようにローマで殉教したのです。天に昇って行かれた後だったけれども、イエス様がパウロに出会ってくださった。そのために、パウロは180度変えられてしまい、イエス・キリストを伝える者になったのです。

しかしながら、使徒たちだけの話であるならば、それは他人事となってしまいます。そういう出来事があったのですね、ということで終わってしまいかねません。実は、主イエス・キリストが復活して生きておられると言いますが、聖書で言うところの生きているというのは、単に命があるという意味だけではありません。ユダヤ人の発想では、動物は生きていると言うが、植物は生きているとは言わないようです。なぜなら自分から動かないからです。たまっている淀んだ水は動かないから死んだ水と言い、湧き出て流れている水は生きた水と言います。つまり、ユダヤ人の発想では、生きているというのは、動く、働きかける、そういう意味です。ですから死んだ神というのは、命がないということもありますが、動かない、働きかけてこ

い、そういうことです。反対に主イエス・キリストが生きているというのは、こちらに働きかけてくる、語りかけてくる、だから生きておられるということです。いくら、命があると言っても、全然こちらに働きかけてこない、語りかけてこない、人知れずどこかで勝手に生きているというのでは、ユダヤ人の発想では生きている神と言わないのです。ですから、主イエス・キリストが生きているというのは、確かに死から復活したということもありますが、さらにこちらに働きかけてくる、語りかけてくる、私たちににかかわってくる、そういうお方だ、そういう生ける神様だということです。そういう意味で、「生きておられる」と聖書は教えているのです。決して、他人事のような、2000年前に復活したという事件で終わる話ではないわけです。

復活したイエス様は、確かにイエス様の方から弟子たちに出会ってくださいました、語りかけてくださいました。パウロにも、イエス様の方から語りかけてくださり、出会ってくださいました。そして今日も、私たちに働きかけてくださり、出会ってくださり、語りかけてくださるのです。ただし、当時のように直接お姿を見せたり、直接声をかけられたり、という方法ではありません。

まず第一に覚えなければならないのは、このペトロやパウロの生きていた時代と今日と決定的に違うことがあるということです。それは、聖書が完結していたか否かということです。聖書ができていない時代は、それこそ直接イエス様が語るとか、パウロの場合のように幻で現れるとか、そういうことが必要でした。また、本当に復活したという目撃証人が必要でした。しかし、聖書が出来上がった時代には、今度はイエス様は聖書でもって語られます。証言によって語られます。ですから、聖書を通してその背後で語ってくださっている神様、イエス様を知っていく、出会っていく、お交わりをしていく、ということになります。

それから、出会う、共にいる、お交わりをするというのは、人格的な交わりなので、一方通行ではなく、こちらからも応答をしていきます。つまり、お祈りをするということです。そして、特に聖書の教えと祈りがなされている礼拝とか、教会の様々な集まりとか、そのような場で、主イエス・キリストと出会い、また交わることができるのです。そのような場で、主イエス・キリストが共にいてくださるということを楽しむのです。本当は、主イエス・キリストの方が、出会う、交わろうと招いてくださっているのです、いつも共にいると語りかけてくださっているのです。

インドネシアの宣教師だった入船尊先生が、インドネシアでの経験を書物にしました。その中で次のようなことを書いておられます。「日本のような社会では、聖書研究も、礼拝も、祈禱会も、特に、生ける主との交わりのリアリティにふれることができるように、自覚的に、導かれる必要があります。特に今日は、非人格的世界、すなわち、技術、物質的、経済的価値の方に目を奪われ、人格的世界にこの上なく鈍感になっているわけですから、この面の自覚的な、バランスの回復が求められます。礼拝においても、実に、今、ここで、神との会見をしようと

しているであることを強調するようなあり方が必要です。」(『宣教師としてインドネシアに遣わされて』入船尊著 p.63)。

あの、恐れと不安の中にあった弟子たちに出会って、立ち上がらせた主イエス・キリストが、あのパウロに出会って、180度変えてしまった主イエス・キリストが、あるいはこれまでの2000年の歴史の中で、世界の各地で、多くの人に語りかけ、働きかけ、多くの人を変えてきた主イエス・キリストが、同じように今も生きて働いておられるのです。生きている、つまりイエス様の方から私たちに語りかけてくださっている、働きかけてくださっているのです。聖書を通し、お祈りを通し、礼拝を通し、また教会を通して。

それを信じて受けとめて、生きているイエス様と共に歩む、そういう歩みをしていきたいのです。いつもイエス様が共にいてくださる、喜びの時も、悲しみの時も、順境にも逆境にも、そして死のときも、死んだ後も、主イエス・キリストが共にいてくださる、それによって立ち上がらせられ、変えられ、新しくされ、歩んでいきたいと願うのです。



「子供と親のカテキズム」について (1)

牧田吉和 (四国中会・山田教会牧師)

はじめに

今回、大会教育委員会の手による「子どもと親のカテキズム」が完成し、これまで用いられてきた中部中会教育委員会の「子どもカテキズム」に代わって、本誌のカリキュラムにおいても採用されることになりました。これは、重要な転換点を意味します。これからの教会学校教育全体にも大きな影響を与えるからです。そのような転換点に際して、今回の「子どもと親のカテキズム」の背景や意図、内容的な特徴などについて2回にわたって記しておきたいと思います。

本稿を記している筆者自身は、現在は大会教育委員会の委員ではありません。昨年まで同委員会の委員であり、委員会内部でこの「子どもと親のカテキズム」の作成を委ねられ、カテキズム担当の小委員会の委員方（2011年2月28日に組織化：委員は、三川委員、相馬委員、筆者）と協力して3年間の年月をかけて作成に取り組んできました。カテキズムの作成は個人の仕事ではなく、大会教育委員会全体の仕事ですが、以上のような作成に関わる事情から筆者が本稿をお引き受けすることになりました。

1. 「子ども親のカテキズム」の誕生の背景

1. 「岩の上こどもカテキズム」から中部中会「子どもカテキズム」への流れ

まず、今回、「子どもと親のカテキズム」が作成されるに至った背景に触れておきたいと思っています。直接的な背景は、中部中会教育委員会「子どもカテキズム」（2001年3月25日刊）に関係しています。この「子どもカテキズム」のルーツは、1997年5月に名古屋岩の上教会（当時は伝道所）の相馬伸郎牧師がご自分の教会の教会

学校のために、また教会員の教育や求道者の入門講座のために2週間ばかりという驚異的なスピードで完成された「岩の上こどもカテキズム」にあります。「岩の上こどもカテキズム」が土台になって、中部中会教育委員会の幾らかの手直しを経て、現在の「子どもカテキズム」が完成されました。完成されたこのカテキズムは、『教会学校教案誌』においてカリキュラム化されて、多くの教会で広く用いられようになりました。改革派教会の中での「教案誌」使用の拡大と共に、このカテキズムは大きな役割を果たすようになってきています。

2. 「ウェストミンスター小教理問答」への橋渡しとしてのカテキズムの必要性

以上のような中部中会教育委員会「子どもカテキズム」の成立までの経緯を踏まえて、ではなぜ今回の大会教育委員会のカテキズムが必要とされるようになったのかという点にも触れておきたいと思います。

この問題は、「岩の上こどもカテキズム」の作成が必要とされた理由にまでさかのぼって考える必要があります。「岩の上こどもカテキズム」が必要とされたのは、「ウェストミンスター小教理問答」は現在の子どもたちには少し難しすぎるという点があったと聞いております。このような必要性は、今に始まった問題ではありません。すでに旧米国南長老教会でも、「ウェストミンスター小教理問答」の前段階の教材として、A.W. ミッチェル編「キリスト教初步教理問答 ―ウェストミンスター小教理問答への手引き―」（傍点は筆者）が出版されています。この書は、日本でも、当時の長田教会松田輝一牧師によって翻訳され、『基督教初步教理問答』

(活水社、1954年。その後、つのぶえ社からも再版)として出版され、多くの改革派教会の教会学校で幅広く用いられました。内容的には低学年の子どもたちにも理解可能なものです。50年前になりますが、筆者の母教会である那加教会でも当時教会学校でこれによって教理教育がなされていました。

「ウェストミンスター小教理問答」については、私自身がこの数年間山田教会の主日礼拝で毎回一問づつ、時には一問を2,3回にわたって解説してきましたが、子どもどころか、成人にとってさえ易しいわけではないと痛感させられています。この意味において、相馬牧師が「ウェストミンスター小教理問答」への橋渡しとして「岩の上こどもカテキズム」を作成された理由は良く理解できます。「岩の上こどもカテキズム」の修正版である中部中会教育委員会「子どもカテキズム」も同様な橋渡しとしての役割をもっていると思います。

3. 中部中会「子どもカテキズム」の改訂が求められた理由

大会の教育委員会としても、すでに以前から「新しいカテキズム」の作成の可能性も探ってきました。そこには、改革派教会にとって子どもたちの信仰問答教育はきわめて重要だという強い認識がありました(拙論:「オランダ改革派教会における契約の子の教育」、本誌2002年5号、7号掲載論文を参照のこと)。契約信仰に堅く立つ改革派教会では、契約の子どもたちの信仰教育を行う上で「カテキズム」は必須のものです。ですから、歴史的改革派教会は、「ウェストミンスター小教理問答」、「ハイデルベルク信仰問答」、「ジュネーブ教会信仰問答」……等々、多くのカテキズムを生み出してきたのです。日本キリスト改革派教会の場合には「ウェストミンスター小教理問答」を信条文書としてすでに持っているのですが、「ウェストミンスター小教理問答」の橋渡しとなる「新しいカテ

キズム」が必要だと考えてきました。そのような「新しいカテキズム」の可能性を探る話し合いの中で、それを作成する場合の構成や内容の方向性も議論しました。しかし、最終的結論としては、時間的なこと、人材的なことなどの現状を考慮して、すでに広く使用されていた中部中会の「子どもカテキズム」を改訂する方向で作業することになりました。

委員会が、「子どもカテキズム」の改訂を意図し理由は、「子どもカテキズム」を使用してみて次のような問題点があると認識したからです。

1. 問いが非常に長くて使用しにくいこと。
2. 作成された時の事情もあって、小さな子どもを対象にしているような言葉と大人を対象にしているような言葉と内容が混在していること。
3. 教理的な内容の点で正確さに欠ける部分があること。

以上の点はこの「子どもカテキズム」を評価しないということを意味していません。カテキズムを作ること自体が、実際に試みるとわかりますように、実に難しい仕事です。この点で「岩の上こどもカテキズム」を最初に作成された相馬牧師に敬意を表すべきだと思います。良く工夫もされています。しかし、大会レベルで浸透させるとなると、上述のような理由で改訂を加えてより整ったものとした方が良くであろうと大会教育委員会は判断しました。

4. 改訂作業から「子どもと親のカテキズムの」の誕生へ

上に説明したように、今回の「子どもと親のカテキズム」は、もともとは中部中会「子どもカテキズム」の改訂を目指したものでした。しかし、実際に改訂作業を試みている間に、状況は変化したのです。全体にわたって大幅な改訂を行う方向に傾いて行きました。改訂作業は、「ウェストミンスター小教理問答」への橋渡し

という基本的方向は守りつつも、新しい要素を加えた「新しいカテキズム」を目指す方向に向かうことになったのです。新しい要素とは、次号でカテキズムの内容に触れる時に言及しますが、あらかじめ簡単に触れておきますと、「ウエストミンスター小教理」には欠けている「教会論」の要素を大幅に加えること（この点は「子どもカテキズム」も意図していた点です）。さらに、「ハイデルベルク信仰問答」などの歴史的信仰問答書、私たちの教会が表明してきた「創立宣言」や「二十周年宣言」、その後の信仰宣言のことも考慮した「カテキズム」を作成するという方針が定まって行きました。この意味では、結果的には、今回の「子どもと親とのカテキズム」は、日本キリスト改革派教会の「カテキズム」としての独自性を持つものとなりました。下敷きとなった中部中会の「こどもカテキズム」の様々な要素を残してはいますが、事実上「新しいカテキズム」といっても過言ではないような形で今回の「子どもと親とのカテキズム」ができあがったのです。少し複雑な経緯をたどったのですが、これが「子どもと親のカテキズム」が生まれてきた背景です。

II. 「子どもと親のカテキズム」の狙い

1. 「子どもと親のカテキズム」の対象

大会教育委員会の「子どもと親のカテキズム」は完成したのですが、作成作業において問題となったのはどの年齢層の子どもたちを対象とした「カテキズム」を作成するのか、という点でした。

委員会で話し合った結果、小学5～6年生ぐらいの小学校上級生を対象とすることになりました。これには次のような狙いが含まれていました。つまり、カテキズムの作成段階から、一方では、小さな子どもたちにはこのカテキズムを用いてかみ砕いて教えられるように内容的な工夫を施すこと。また他方では、例えば中学生や高校生に、あるいは成人の求道者には、これを

用いてさらに高度なことを教えられるように工夫すること。このような狙いでカテキズムを作成しておけば、教会学校で用いる場合も、高学年を目途にその上下は実際の使用においてある程度フレキシブルに対応できるのではないかと委員会は判断したのです。もし小学校1～2年生を本当に対象とするのであれば、将来的にはこのカテキズムを基礎に、もう一つ別の、もっと易しいカテキズムを作ることが必要でしょう。次の世代にこの仕事を期待したいと思います。現時点では、そこまでの余力はないというのが委員会の率直な判断でした。

2. 「子どもと親のカテキズム」というタイトルの狙い

今回のカテキズムには「子どもと親のカテキズム」というタイトルがついています。このタイトルの意味も説明しておく必要があるでしょう。

このタイトルの根本的な意味は、契約信仰にまでさかのぼることになります。すでに触れたように、改革派信仰における教育は契約信仰に立脚します。契約の枠組みで子どもたちの信仰教育を考えます。契約の民としての教会は、契約の子に対する教育において全面的に責任を担うことになります。と同時に、契約信仰においては、家庭における契約の子の教育もきわめて重要な意味をもつことになります。幼児洗礼の時のことを思い起こしていただきたいと思います。幼児洗礼において親は契約の子の信仰教育に対する責任を誓約します。この意味で、契約の家庭における信仰教育は重要です。

このような契約信仰に基づく理解の中で、改革派教会は、教会としても、教会学校のような形で契約の子たちへの様々な教育プログラムをもって熱心に教育に取り組んできました。歴史的にもカテキズムはそのような中で重要な役割を果たしてきました。例えば、米国系改革派教会では、礼拝の中で特に子どもたち対象の小説教

も実行されてきました。この例にならい、私たち改革派教会でも同じように礼拝の中で子どもたちに対する小説教がなされるケースも多くなっています。その際、今回の「子どもと親とのカテキズム」を用いて、子どもたちに話しつつ、同時に大人も教育できるようにという狙いがあります。この意味で言えば、大人の教会学校のテキストとしても用いることができるように作られています。したがって、応用すれば求道者教育にも十分に用いていただけるはずです。

以上のように教会における契約の子の教育のことを念頭に置いています。今回の「子どもと親とのカテキズム」においてたえず視野の中にあっただのは家庭における契約の子の教育という状況です。家庭においても、改革派教会の歴

史においては、家庭礼拝やその他の家庭での信仰教育の場でカテキズムが用いられてきました。カテキズムは親と子の信仰的対話の重要な道具としての役割を果たし続けてきたのです。今回のカテキズムは、契約の子だけでなく、確かに日本という宗教的土壌に生きる未信者の子どもたちのために用いられることも考慮して作られています。しかし、何と言ってもこのカテキズムは契約信仰に基づく契約の子の信仰教育に、特に家庭における信仰教育を重視し、そこに特別な狙いが定められています。この意味において、この新しいカテキズムは、やはり「子どもと親のカテキズム」なのです。このカテキズムが、親と子の信仰的対話の土台の役割が果たせるなら、どんなに素晴らしいことでしょうか。



「からす たろう」(やしま たろう 文・絵／偕成社)

望月鈴子（浜松伝道所会員）

絵本「からす たろう」を書店で見つけたのは10年ほど前でした。からすたろう？ どんな話だろうと思い、手に取りました。表紙に描かれているほっかむりして何かを見つめる少年の表情に心がひかれました。バラバラとめくり、拾い読みをしていくうちにだんだん心が辛く切なくなっていくこと、しかし最後にどんでんがえしで、辛くなっていた心にポツと灯りがともったような心地になったのを思い出します。

「からす たろう」の主人公は「ちび」と呼ばれた一人の男の子。小学校に入学した日から学校の床下に隠れて出て来ないような男の子で、先生を怖がり、何一つ覚えず、クラスの子もたちとも遊ぼうとしませんでした。勉強の時間も、休み時間もひとりぼっちでおかれ、やがてみんなは男の子を「うすのろ」とか「とんま」と呼ぶようになりました。

後からわかることですが、「ちび」の家は学校からはるかに遠い山の奥にありました。家族しか知らなかった「ちび」は、小学校に入学して初めて家族以外のたくさんの子どもや人々に会ってどう接したらよいのかわからなかった、気後れしていたのではないのかしらと思ったりします。

みんなにつまはじきにされながらも「ちび」は、雨の日も嵐の時も一日も休むことなく、遠い山の向こうの家から学校に通い続けました。なぜ、「ちび」は遠い上に居心地の悪い学校に、自分なりの楽しみを見つけて一日も休まず通うことが出来たのでしょうか。まず考えられるのは、「学校は行くべき所」と教えられ、「ちび」自身も「行かなくては……」と受け止めていたのかもしれませんが、でも、「ちび」が学校に通



い続けられた原動力は、家族が待っている居心地のいい家があったからではないと思います。この絵本で家族のことは描かれていません。しかし、「ちび」の家は山奥にあり貧しかったかもしれませんが、きっと一生懸命働き、助け合い、労わりあう家族、温もりのある家庭だったのではないかと想像しています。だから辛い学校生活でも通い続けることが出来たのではないかと深読みしています。

転機が訪れたのは6年生になった時、新担任の「いそべ先生」との出会いでした。「いそべ先生」は「ちび」としっかりと向き合ってくれました。そして「ちび」が持っている知識の宝庫を探り当てたのでした。〈のぶどうや山いものありかをよく知っている〉のでごきげんで〈花だんづくり、花のことをよく知っている〉ことに感心しました。「ちび」が描いた絵や習字もほかの子どもと分け隔てすることなく張り出してくれました。先生は「ちび」と二人だけで話をすることもありました。「ちび」は心を開き、「いそべ先生」に山の向こうにある家のこと、遠いとおい学校への行き帰りの道のことなど、いっぱいいっぱい話したことでしょう。

その年の学芸会で「ちび」は「からすの鳴き声」を披露してみんなを驚かせました。〈あちゃんがらす、母さんがらす、父さんがらす〉〈朝の鳴き声、不幸があった時の鳴き声、うれしいとき、楽しい時の鳴き声〉おしまいに〈一本の古い木にとまっているからすの特別の鳴き声〉で締めくくりました。そこで「いそべ先生」は「ちび」がどうしてこんなに見事に鳴き声を表現できるようになったか説明しました。「ちび」は日の出と共に家を出、日没に家に帰りつくまで、6年間毎日一日も休まず学校に通い続ける中で、心を澄ませ、耳を澄ませてからすの思いを聴いたことを……。その後、「ちび」は「からす たろう」とみなから呼ばれ、「大したやつ」と認められたのでした。

「ちび」は「いそべ先生」に出会い、埋もれていたかもしれない知識を掘り起こされ生かされました。ここに「ちび」以外の子どもたちとの関わりは描かれてはいませんが、「いそべ先生」は、担任する子供たち一人ひとりときちんと向き合っていたに違いありません。丁寧に接し、思いを聴きとり、認め、生かし、高める。教育の本質とはここにあるのではと思わされます。

著者・八島 太郎氏は、絵本「からす たろう」を恩師二人にささげています。この物語に登場する「いそべ先生」は恩師二人の思い出をあわせてつくったものということです。八島氏の心の中にある教師像は、「いそべ先生」に凝縮されているのかもしれないと考えています。

さて、昨年の秋・11月に、中部中会・日曜学校委員会主催による教会学校教師研修会があり、講演をお聞きしました。講演者は山形県にある基督教独立学園高等学校校長である安積力也先生。

この学校は、一学年わずか25名の定員、全学年75名の高校でみんな寮生活。辺境の田舎に立地しているにもかかわらず、日本各地から入学希望者がいるようです。勉強だけでなく、

現代の思春期の子どもたちが背負っている様々な問題に、教師たちが深く関わって共に生きていく共同体のような学校に思えました。

講演を聴きながら、私の心はピンピンと共鳴していました。今自分が感じ、考えていることが同じような方向性でした。安積先生だけでなく、教師たちの多くが生徒たちと共同生活をしています。すぐそばに、思春期まっただ中で生きることの根底の意味、自分の実存の意味を問い、悩む高校生たちがいます。心を研ぎ澄ませ、耳を澄ませ、丁寧に接し、静かに思いを聴きとり、認めるべきは認めて、荒れて固い魂の岩盤、心の畑を耕す働きが求められています。勉強のみならず、全人格教育を担い苦闘しておられる教師たちの姿が透けて見えてきました。基督教独立学園で真摯に心の底の底から向き合ってくれる人に出会い、魂の岩盤を耕され始めた生徒たちは、社会で生きていけるという何らかの確信を得て卒業していくようです。

たくさん大切なことを安積先生はお語りになったのですが、心に大きく重く残っているのは「教育とは他者に命がけの関心を持ち続ける仕事だ」という言葉です。心を全開にして関わることだということです。この講演を聴きながら、私は「からす たろう」の「いそべ先生」を思い出していました。「いそべ先生」はつまはじきにされていた少年に関心を持ち、温かい心で真摯に向き合いました。その結果、「ちび」と呼ばれた少年はすっと前を向いて立ち、歩むことが出来るようになったのではないのでしょうか。

教会学校教師の働きも「教育」を担います。イエス・キリストの救いを子どもたちに語り伝える「信仰の教育」です。子どもたちは週1回、日曜日わずか1時間足らずですが、御言葉を聴くために教会に集まります。この子どもたちの心を御言葉で耕し、イエス様の救いを信じてことができますようにと切に願い、祈り、奉仕します。教師たちに求められることは、教会学校

に集う子どもたちがやがて救われる希望をもって、関心を持ち続け、一人ひとりと向き合い、人格的交わりを深めて、御言葉を語り続けることではないかと思われています。

微力ですが教会学校の働きに携わっています。教会学校に集う子どもたちに関心を持ち続け、向き合い、愛し、イエス様の救いの恵みを語りたいと願っています。



副読本のご案内

『主は羊飼―中高生のための教理入門―』

価 格 800円

著 者 木下裕也

(名古屋教会牧師・教会学校教案誌編集員・神戸改革派神学校講師)

ぜひお買い求めください。ご注文は教案誌編集部まで。

❶ 人生の目的―神礼拝

もうかなりのお年になってから教会に通い始められた方と聖書の学びをしていたときのことです。そのときたまたま一緒に、ウェストミンスター小教理問答の問1を読みました。その問いは「人のおもな目的は何であるか」です。

この問いを読まれて、その方はつぶやくようにおっしゃいました。わたしはもう何十年も生きてきたのに、人生のほんとうの目的などということ考えたこともありませんでした、と。

人生の目的とは何か。このことをはっきり知っているのと、知らずにいるのとでは、やはり生きかたが大きくことになってくるのではないのでしょうか。

さまざまなことが人生の目的になり得ます。お金をもうけること、地位や名誉を得ること、仕事で成功をおさめること、熱烈な恋愛をすることなどです。これらのことは人生にある幸せをもたらすでしょう。

けれども一方で、そのどれもが不確かです。お金は一瞬にして失われることがあります。地位や名誉を得たとしても、たった一度のあやまちでそのすべてを棒にふることもあります。熱烈な恋もさめることがあります。とすれば、これらはいずれも人生の究極の目的とはなり得ないでしょう。

さらに、私たちの命そのものも不確かなものです。明日この地上に生きているという保証を、私たちはだれひとり持たないのです。

では、私たちはついに人生の確かさ、人生のほんとうの目的を見出すことはできないのでしょうか。

いいえ、私たちは人生の真の目的を知ることができます。ほんとうに確かで、生きがいのある命と人生を生きていくことができるのです。

もういちどウェストミンスター小教理問答の問1を見ましょう。

問 人のおもな目的は何であるか。

答 人のおもな目的は、神の栄光をあらわし、永遠に神を喜ぶことである。

もうひとつ信仰問答を見ましょう。ジャン・カルヴァンの手にあるジュネーブ教会信仰問答の問1はこうです。

問 人生の目的は何ですか。

答 神を知ることです。

人生の目的は神さまを知り、神さまの栄光をあらわし、神さまを喜ぶことにあります。すなわち、神さまを礼拝することこそが人生の真の目的なのです。

人生の確かさは私たち自身の中にはありません。私たち自身の何かを頼りにしているかぎり、私たちの人生は不確かです。

けれども神さまは確かなお方です。神さまこそ私たちの人生のゆるぎなき土台、岩、命のとりでです。なぜなら神さまは天地の造り主であられ、私たちの命の与え手であられ、この世界のいとなみと私たちの人生の歩みのすべてをみ手のうちに握っておられるお方だからです。

聖書默想・説教展開例・分級展開例

テキスト

創世記 12章1～9節

「アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた」（創世記15章6節）。

ここには全聖書をつらぬいて揺らぐことのない救いの真理——人はわざによらず、行いによらず、ただ信仰によって義とされるとの真理が語り示されている。パウロの執筆になるローマの信徒への手紙も、信仰による義を全体の主題としていってよい。宗教改革においても、この真理は確認された。

信仰の父アブラハムにおいて、すでにこのことは明らかである。アブラハムは神の言葉を聞いた。それは彼に子孫を与え、空の星のように増え広がらせるとの言葉であった（5節）。

アブラハムは、このように約束される主を信じた。主はこれを、このアブラハムの信仰を義と認められたのである。当然、ここには行いはない。ただ神の約束への信頼があるのみである。つまり神はアブラハムの行いを問われたのではない。御言葉をそのとおりに信じ、御言葉にゆだねる信仰をお問いになったのである。そして彼の信仰をお喜びになり、彼を義と、すなわち神の前に正しい者とお認めになった。

主を信じ、主に委ねる——このアブラハムの信仰は、彼が主の召しを受けて旅立ったことを語る12章1～4節にもはっきり見ることができる。

主なる神はアブラハムを呼ばれ、言われた——「わたしはあなたを大いなる国民にし／あなたを祝福し、あなたの名を高める／祝福の源となるように」（2節）。

続く15章5節で再び語られることになる約束である。あなたの子孫は海辺の砂、空の星のように数え切れないほどに増え広がるとの祝福の言葉である。しかし、この祝福にはひとつの命令が伴っていた——「あなたは生まれ故郷／父の家を離れて／わたしが示す地に行きなさい」（1節）。

神がアブラハムにお求めになったのは、この大いなる祝福の約束を信じて、神の言葉に従って旅立つことであった。聖書は語らないが、アブラハム

ムには苦悩があり、逡巡があったであろう。この命令は彼にとって決して易しいものではなかったからである。第一に、神は「わたしが示す地に行きなさい」と言われたが、それがどこなのか、またその地にたどりつくまでにどのようなことが待ち受けているのか、そうしたことはいっさい明かされなかった。

第二に、この命令に従うためには、長く慣れ親しんでいた生まれ故郷を離れなければならなかった。家族とも別れなければならなかった。仕事も捨て、長く育んできた生活の基盤をも捨てなければならなかった。

第三に、このときアブラハムは七十五歳という高齢であった。行く先も知れない旅へと赴いていくには、あまりに年をとり過ぎていた。

しかし聖書はただ一言、結論だけを述べる。「アブラムは主の言葉に従って旅立った」（4節）。

アブラハムは主なる神を信じたのである。わたしはあなたを、そしてあなたの子孫を祝福すると御言葉が、自分の人生の旅路においてそのとおりに実現すると信じ、すべてをゆだね、信頼して旅立ったのである。

このアブラハムの信仰に学びたい。後にイサクをささげよと命じられたときにも、アブラハムは「主の山に、備えあ」（創世記22章14節）ることを信じた。人はこの信仰によって生きる。試練や不合理のただ中に置かれても、主の恵みは確かであり、主の約束は揺らぐことはなく、主のなさることにまちがいはないとの信仰に立ち続ける。この信仰のいとなみにおいて、神は確かに信じる者を祝福してくださるのである。

アブラハムと同じように、主は私たちをもおのおのの務めへと召し出してくさるであろう。私たちの一人一人にも、主が定められた信仰の旅路があるであろう。「主の言葉に従って旅立」つ。そのひとつのことがあるなら、私たちの旅路は祝福されるのである。（木下裕也）

〔単元のねらい〕

人生の岐路、分岐点に立たされることがだれにもある。その時、信仰を持たない人々にとっては自身の判断がすべてであろうが、信仰に生きる者たちは御心を求め、御言葉に従う。そのような道筋において、神が豊かな祝福を用意しておられることを知っているからである。人間的には不利なことのように見えても、御心にかなう道こそが真に祝された道である。その消息を、アブラハムの信仰から学び取りたい。

神さまの道を歩む

私たちは人生の旅路にあって、しばしば分かれ道、分岐点に立たされることがあります。目の前にふたつの道があって、どちらの道に進んだらよいのかと考えることがあります。お昼に何を食おうか、という選択はまだしも、入試や就職、結婚といった人生を決めてしまうような大きな選択をしなければならない場合には、やはり悩みますね。

そのような時、どうすればよいのでしょうか。神さまを信じて生きる私たちにとっては、答えははっきりしています。まず神さまの御心を求め、神さまに従うことを第一にすることです。それがいちばん大切です。そのようにする時、私たちの人生は豊かに祝福されます。

自分の考えや判断よりも、神さまの御心を求める。そして、御言葉に従う。この信仰について、アブラハムの生涯から学びましょう。

ある日、神さまはアブラハムをお呼びになり、言われました。「あなたは生まれ故郷／父の家を離れて／わたしが示す地に行きなさい」(1節)。

生まれ故郷を離れて、神さまがお示しになる地へと旅立ちなさいとのご命令です。

アブラハムは神さまを信じる人でしたから、神さまの御言葉に従うべきことを知っていました。神さまの御言葉のもつ重みを、もちろんわかっていました。けれどもこの時おそらくアブラハムは、深く悩んだと思います。聖書はそのあたりのことを書いていませんが、何日も思い悩んだかもしれ

ません。なぜなら、アブラハムにとってはいくつもの点で、従うことのむずかしい命令だったからです。

第一に、神さまは「わたしが示す地に行きなさい」とおっしゃっただけです。それがどこなのか、またその地にたどりつくまでにどのようなことが待ち受けているのか、そうしたことはいっさい明かされませんでした。

第二に、この命令に従うためには、長く慣れ親しんでいた生まれ故郷を離れなければなりません。愛する家族とも別れなければなりません。それまでずっと続けてきた仕事も捨てなければなりません。長く暮らしてきた家からも離れなければなりません。

第三に、このときアブラハムは七十五歳でした。もう年をとって、老人になっていました。老後の暮らしを静かに送っているのが普通の年齢です。この年になって行く先も知れない旅へと旅立つのは、あまりに厳しいことのように思われました。

つまり、アブラハムはこの時分岐点に立たされたのです。人生の大きな分岐点です。道はふたつです。神さまの御言葉に従って旅立つか、御言葉に従わずにそれまでの生活を続けるかです。

それはつまり、神さまの御心を先立たせるか、それとも自分の考えや判断を優先するかということであったのです。

聖書はたった一言、アブラハムがどうしたのかだけを語ります。「アブラムは主の言葉に従って

旅立った」(4節)。

アブラハムは神さまの御言葉に従って旅立ったのです。自分の判断ではなく、神さまに聞き従うことを選んだのです。不利な、厳しい条件ばかりであったのに、なぜそうすることができたのでしょうか。

神さまの祝福を信じたからです。この命令はたんなる命令ではありませんでした。祝福の約束をともなっていたのです。「わたしはあなたを大いなる国民にし／あなたを祝福し、あなたの名を高める／祝福の源となるように」(2節)。

アブラハムは、神さまが自分の命と人生を豊かに、あふれるほどに祝福してくださる御方であることを信じたのです。わたしはあなたを、そしてあなたの子孫を祝福する——この御言葉が、自分の人生の旅路においてそのとおりに実現すると信じたのです。そしてすべてをゆだね、信頼して旅立ったのです。

もしこの時にアブラハムが自分の判断を優先し

て、旅立つことをしなかったとしたら、豊かな祝福を見ることはできなかったでしょう。御言葉を信じて旅立ったからこそ、神さまは本当にアブラハムを祝福し、彼の子孫を海辺の砂、空の星のように増やしてくださいました。聖書に記されているとおりです。

御言葉に従って旅立つ人を、神さまは祝福してくださいます。どんな試練があっても、困難があっても、神さまは必ず助け、守ってくださいます。神さまの恵みは確かです。主の約束は揺らぐことはありません。神さまのなさることにまちがいはありません。

神さまは私たち一人一人の人生にも、豊かな計画を備えてくださっています。それぞれに使命を与えてくださっています。人生の分岐点に立った時には、御心を祈り求めましょう。御言葉に従いましょう。「主の言葉に従って旅立」つ。そのひとつのことがあるなら、私たちの人生の旅路は確かです。(木下裕也)

[今週の暗唱聖句]

詩編 37編5節 a

あなたの道を主にまかせよ。



〈ねらい〉

私達の信仰生活の礎をアブラハムは神様の召しを通して示しています。人生の岐路に立つときこそ神様から与えられた召しにどう耳を傾け、実行するか。アブラム（アブラハム）の召しについて子どもたちと共に考えます。

〈展開例〉

1. 自分の道（人生）に迷ったらどうしますか？

みなさんは出かけて行って知らないところで道に迷い込んでしまったことがあると思います。右も左も分からない、そのような時、何を頼りにしますでしょうか。

- ・地図を見る
- ・誰かに道を尋ねる

……等々、色々方法があると思います。

きっと迷っている時は不安でこの状況から何とか抜け出したいと思うでしょう。だから必死な思いで調べたり、人に道を聞いたりするでしょう。少しでも不安を解消しようと努力します。一方で、自分には自信があり、いろんなものに頼ることはせず、自分でなんでも解決しようとする人もいるかもしれません。自分自身で不安と闘いつつも、自分の道を考える。その道は正しいと思って進んでいきます。調べたり、人に聞いたりすることをしませんでしたので煩わしくなく、人に気を遣うこともなく、その道が合っていればそのような時間を短縮することができます。でも、何かを頼りにする場合はもっと早く解決に向かうかもしれませんね。自分をただ

信じて自分の道にしたがって歩んだ場合は、もっともっと深く道に迷ってしまうかもしれません。

アブラハムさんの歩みはそのどちらだと思えますか？ 一見、神様が決めたことではなく、自分で選択した歩みのように感じるかと思いますが、アブラム（アブラハム）さんは「みちしるべ」すなわち神様の言葉にしたがって、召しにしたがって歩んで決めました。神様の言葉に耳を傾けるには聖書の言葉をしっかり聞いて、神様を信じ、頼り、道に迷わないことです。

2. 神様の召しに従ったら、神様はアブラム（アブラハム）さんに何をしてくださる、と約束してくださいましたか？（1節～3節）

- ・大いなる国民にしあなたを祝福し、その名を高める（祝福の源）。
- ・あなたを祝福する人は祝福し、呪う者は呪う。
- ・地上の氏族すべてあなたによって祝福に入る。

この一つ一つを考えてみよう。「その名を高める」とは、有名になる、と言うことです。アブラハムさんを知らない人は少ないですね。人類の歴史上でもとっても有名な人になりました。そして祝福を持って守ってくださり、信仰の父となり、地上の全ての氏族が全て祝福される、という恵みに満たされました。神様の召しに従うと祝福が備えられることを共に学びたいと思います。

対話の手掛かりとして……

①「召命」という言葉は、教会ではよく使われる言葉ですが、普段の生活ではあまり耳にしません。でも、英語ではそれほど難しい言葉ではありません。“calling”と訳すことができます。つまり、誰かに「呼び出される」というのです。私たちも普段、誰かに呼び出される経験をします。「誰かがあなたを呼んでいる」と言われると、内心ドキドキします。私を呼び出した人のところに行くまでの短い時間の中で色々と思いを巡らせます。では、神様は私たちを呼び出して、何をなさろうとするのでしょうか。改めて「召命」という言葉に目を留めると、「命」に召して下さるということがわかります。なるほどと思う一方で、不思議な感じがします。『命』に召す」とはどういうことでしょうか。別に神様に呼び出されるまでもなく、私たちは既に命に生きているのではないのでしょうか。

②なぜ神様は私たちを呼ばれるのでしょうか。そして、なぜ私たちは神様の呼び掛けに応えて、神様のところに行かないといけないのでしょうか。私たちはこの世で、様々な声を聞いて生きています。自分が自分に語り掛けるということもあるでしょう。あるいは親や先生、先輩や友人など様々な声や考えなどを聞き、そしてそれらの声と対話しながら生きているのです。また、私たちの人生は、決断の連続です。目の前に自分が描いている様々な道があります。どの道に行くのかを選択するのは容易なことではありません。選ぶことができたとしても、その道が自分が描いていたものと随分違っていったということもあるでしょう。なるべくなら、自分の理想通りに歩みたいと多くの人が思います。だから、私たちは周りにいる色々な人の声を聞いて、それらを参考にしながら、最終的には自分で決断するのです。強いられてその道を歩まなければ

いけないということもありますが、いずれにせよ、様々な声が、私たちの人生を決めていると言っても過言ではありません。

③「命に召す」とは、要するに、「どう生きるか」ということと深く結びついているのではないのでしょうか。与えられた命をどう生きるかということです。その生き方を示してくださるのが、神様の言葉なのです。もちろん、自分や周りの人の言葉を聞いても意味がないと言っているわけではありません。でも、その中心にある言葉、私たちの人生の根底を支える言葉が、神様の言葉なのです。アブラハムも神様に急に呼び出されて、故郷を離れることになりました。しかも行き先も分からないのです。人間の思いからすれば、これほど不安なことはありません。そして、事実、アブラハム自身思いもしなかった様々な出来事が、彼の人生を襲います。決して、楽しいことばかりではありませんでした。多くの挫折を、別れを、試練を経験しました。大きな罪も犯しました。

④そんな思いをするくらいだったら、故郷に留まって、自分が好きなことを好きなようにして生きていきたい。自分の夢を叶えることだけに心を注いで生きていきたいと思うかもしれません。でも、神様の言葉に聞き従って生きていくことは、自分の声に聞き従って、自分の思いどおりに生きて行くこと以上に幸いな道だと私は信じています。確かに自分にとって良いことばかりが起こるわけではありません。苦しいこと、悲しいこともたくさん経験します。でも、そういうところで響いてくる神様の声を聞くことが許されています。アブラハムもこの時だけではなく、度々、神の御声を聞き続けることができました。そうやって、生きている人の歩みは必ず「祝福」されるのです。

テキスト	創世記 15章1～21節
参照教理問答	子どもカテキズム 問30,31 ウェストミンスター信仰告白 第7章、第11章、第14章 ウェストミンスター小教理問答 問20,33,86

先週の聖書黙想でも語られているとおり、創世記15章5,6節は、信仰義認を考えていく上で、大切な御言葉です。とりわけ信仰義認が、聖書全体を貫く恵みの契約の中にあることを覚えることは大切です。

すでに学んできたとおり、人間は、サタンの誘惑により罪を犯し、それ以後に生まれ来る人間は皆、生まれながらに罪が混入しており、完全に墮落しました（全的墮落）。そのため、人間は自分の力では、神の救いを獲得することができなくなり、罪の刑罰としての死を避けてとおることができなくなりました。

しかし神さまは、人間を愛し続けてくださり、人間を罪と悲惨の状態の中で滅びるままにしておかれることなく、人間に救いを提示してくださいました。これは神さまの永遠の救いのご計画に定められたことが、福音宣教によって私たち人間に示され、私たちが信仰告白することにより具現化されるのです。この救いの約束のことを、恵みの契約と言います。この恵みの契約は、最初、アダムとエバが罪を犯した直後に与えられた原福音（創世記3:16）に始まり、それ以後の聖書全体に貫かれている神の救いの約束です。

神さまは、この恵みの契約を成し遂げるために、救い主イエス・キリストをこの世にお送りくださいました。そしてイエスさまが地上での生涯において、律法に仕えられ、罪を犯されなかったことにより、私たち人間が神の子となるための必要を満たしてくださったばかりか、キリストは私たちの罪の刑罰を代わりに担ってください、十字架にお架かりくださり、死を遂げてくださいました。

従って、神さまと私たち人間との間で、恵みの契約が成り立つのは、神さまご自身が私たちにお与えくださった無償の恵みによります。

こうした私たち人間の罪の赦しと救いの神さま

のご計画と御業が、聖書の御言葉によって私たちに示された時、私たちは、神さまの恵みに同意することが求められます。恵みの契約は、神さまの側から私たちに提示された約束ですが、私たちはこの契約に同意することが求められます。これが信仰告白です。

つまり、私たちの信仰告白は、私たちは神さまの御前には罪人であるけれども、神さまがお与えくださった御子による罪の贖いと救い、永遠の生命を、感謝して受け入れることです。

この神の恵みに対する私たちの信仰告白が語られているのが、今日与えられた創世記15章6節にある「アブラムは主を信じた」とのアブラハム（「アブラム」は17:5より「アブラハム」と名乗る）の信仰告白となります。

このアブラハムの信仰告白により成立した恵みの契約により、アブラハムは神の子として受け入れられ、神によって義と認められたのです。この時、アブラハムは自分で救いを獲得する行為を行ったわけではありません。立派な行いを行ったから神さまに認められたのではなく、これから立派な行いをすることを宣誓して神さまに認められたのでもありません。アブラハムにとっては、神さまがお示しくくださった救いを受け入れ、信じただけでした。このアブラハムの行為が、信仰義認と言われます。そしてこの信仰義認は、恵みの契約を語る時にもとっても重要な教理です（参照：ローマ4:11～16）。

キリスト教会は多くの教派に分かれています。プロテスタント教会の多くが、「聖書のみ」を語り、信じることによって救われる信仰義認を受け入れます。しかし、「信じる」という行為を強調し、信仰に伴う善き生活を、救いの条件にすることも少なくありません。そうすることにより、神の恵

みによる無償の恵みではなくなり、神人協力の道を開くアルミニウス主義となってきます。

ここで一つ確認をしておかなければならないことは、信仰に伴う善き行いです。前述のとおり、恵みの契約においては、善き行いを救いの条件にすることはありません。キリスト者の善き行いは、信仰の実りです。このことは、十戒が与えられた経緯においても明らかになります。主はエジプトで奴隷としてつながれていたイスラエルの民を解放してくださった後に、十戒を与え、神に従う生活の規準をお示しく下さいました。そのことが、序文のことば「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である」(出エジプト20:2)で明らかになっています。

またこのことは、ウェストミンスター信仰告白の章立てにおいても明らかです。同信仰告白は、第11章において義認を語り、第12章で子とすること、第13章において聖化を語ります。ここまでは、神の無償の恵みによる決定です。それに対して、第14章で救いに導く信仰、第15章で命に至る悔い改め、第16章で善い行いが展開されます。これらは、義認・子とすること・聖化に伴って語られる御言葉の実りなのです。

従って、アブラハムは、信じることにより義と認められたのです。そのため、その後契約の継承者としてイサクが与えられること、イサクを主に献げることが求められることにおいて、アブラハムは信仰が試されますが、アブラハムは信仰によって主に委ね、行動することができたのです。

〈子どもたちに対して〉

教会学校・日曜学校に集っている子どもたちの多くは、家族と共に礼拝に集っており、自分の意志で教会に来ている子どもたちは少ないかと思えます。しかし、自発的か強制的かには関係なく、教会学校・日曜学校に礼拝に集っているということは、神さまがお招きくださった結果であり、みんなが神さまによって救いに招かれていることを語っていただきたい。そして神さまからの招きを受け入れ、神さまを信じることによって、アブラハムに大いなる祝福が約束され、現実になくなったように、礼拝の場に集う一人一人にも、神さまからの豊かな恵みと祝福が約束されていることを確認していただきたい。信仰があるところに希望があり、希望があるところに生きる喜びがあります。(辻 幸宏)



テキスト	創世記 15章1～21節（特に1～7節）
子どもカテキズム	問30, 31
参照教理問答	ウェストミンスター信仰告白 第7章、第11章、第14章 ウェストミンスター小教理問答 問20, 33, 86

〔単元のねらい〕

アブラハムの信仰告白は、聖書全体を貫く恵みの契約、信仰義認を理解する上で重要なテキストです。アブラハムは主を信じて義とされました。しかしこのことは、人間には不可能だと思えない100歳になるアブラハム、90歳になるサラに子どもが生まれるということでした。

一方、子どもたちは、今生活している周囲のことがすべてのように考えているかと思います。しかし神さまの御業、救いは、私たちの想像を遙かに超えたところで現実のこととなることを示していただきたい。そのために、全知全能であり、自然の秩序をもお作りになられた神が、私たちの常識を超えてお働きになることができることを示し、それらを含めて、主の御力、主の救いを信じて、主に委ねて祈ることへと導いていただきたい。

信じれば、救われます！

皆さんは、人間がどれ位まで生きることができるか知っていますか？ だいたい80歳から90歳、長生きする人で100歳ですね。非常に長生きする人でも、120歳まで生きた人がいるということは、最近では聞きません。

アブラハムさん（ここではまだアブラムと呼ばれていましたが、後からアブラハムと名前が変わります）は、この時80歳を超えていたのではないかと思います。もう少し生きることができたとしても、子どもはもうできない、だから跡継ぎを親戚の子どもであるダマスコのエリエゼルにしようと考えていました。

しかし神さまは、「エリエゼルではないですよ。あなたから生まれる子どもがあなたの跡を継ぐんですよ。空を見てごらん。多くの星が見えるでしょう。数えることができますか？」とお語りになります。都会などでは、今はあまり星も見えないかもしれませんが、今でも山だったり、田舎の方に行くと、数え切れないくらい多くの星を見ることができますよね。神さまは、アブラハムさんに対して、「あなたから生まれる子どもが、これ位大勢になることができますのですよ」と約束してくだ

さったのです。

皆さんならどうでしょうか？ 信じることができますか？「嘘だろう」、「だまされたらダメだ」、「信じることができない」と言うかもしれませんね。しかしアブラハムさんは、神さまの言葉を信じました。アブラハムさんは、「嘘だろう」と思わなかったのでしょうか？ 多少はそうに思ったかもしれません。しかしそれ以上に、神さまがお語りくださることだから、大丈夫だと思い、信じたのです。なぜならば、神さまが天地万物を造られたことをアブラハムさんは知っていました。私たち人間も神さまに造られたのですね。だからこそ、私たちが出来ない、不可能だと思うようなことであっても、神さまならば可能であることを、アブラハムさんは知っていたのです。こんなこと、神さまを知らない人が聞いたら、「馬鹿にするだろうな」などとも考えないのです。自分には不可能だし、他の人たちも馬鹿にするかもしれないけれども、神さまがお語りになるのだから、そうなるのだろう、とアブラハムさんは思い、アブラハムさんは、神さまを信じたのです。

この時、神さまはアブラハムさんを義と認め、あなたは救われますよとお語りくださいました。神さまが義と認めてくださり、救ってくださるということは、神さまが約束してくださったことは、必ず実現するということです。アブラハムさんに跡継ぎとしての息子イサクが生まれたのは、アブラハムさんが100歳になった時です。神さまはアブラハムさんとの約束通りに、跡継ぎをお与えくださったのです。そればかりか、イサクさんにはヤコブとエサウさんが生まれ、ヤコブさんには12人の息子たちが生まれ、彼らがイスラエルの12部族となり、アブラハムさんの子孫であるイスラエルは星のように多くの人たちが生まれてきましたね。アブラハムさんにとっては、「もう無理だ、もう不可能だ」と思っていたことであっても、神さまは成し遂げて、約束をお守りくださったのです。

皆さんは今、神さまが招いてくださり、教会学校に集まっているのです。「自分の意志で来た」、「お父さん、お母さん、家族の人が来るから一緒に来ただけ」という人もいるかと思いますが、神さまがみんなの心に働きかけて、「教会に行こう」という思いにさせてくださったのです。だからこそ、神さまは、皆さんが、今、教会学校に集まっていることを、本当に喜んでくださっています。そして、神さまは、アブラハムさんを救ってくださり、義と認めてくださったように、皆さんが神さまの子どもですよ、救われてますよとお語りくださっています。是非、神さまの招きを受け入れていただきたいと思います。

神さまを信じるとどうなるのでしょうか？ 友だちに言うの嫌だな、格好悪いなと思うかも知れません。しかし、神さまは、皆さん一人一人の顔とお名前を知っておられます。そして今、皆さんが神さまを信じると告白することを待っていてく

ださいます。そして、神さまを信じるということは、神さまに委ねて生きれば良いので、すごい楽じゃないでしょうか。神さまは、天地万物を造られた方ですよね。だから、私たちにとっては、「難しいな」、「出来ないや」と思うようなことであっても、神さまならばお出来になります。そして神さまを信じている私たちは、何でもお出来になる神さまに祈ることが出来るのです。お委ねすることが出来るのです。神さまは、私たちのことを全て知っておられるので、祈りをすべて聞いてくださいます。だからこそ、困っている時、神さまに祈ることが出来ます。苦しい時、祈ることが出来ます。神さまは、すべての祈りにお答えをくださいます。自分で解決しなければならない、と思うと苦しくなるけれども、神さまに祈れば、気持ちも楽になるのではないのでしょうか。神さまが私たちと一緒に頑張ってくださるのです。

また、神さまを信じるということは、アブラハムさんが神さまによって義と認められたように、私たちも罪が赦され、義と認められ、神さまの子どもとして神の国に入ることが許されるのです。皆さんは、これから長い間生きるんだと思っておられるかもしれませんが、おじいさん・おばあさんになると、もうすぐ死ぬのかなと思ってしまいかもしれません。しかし神さまを信じるということは、今の体は死んでも、新しい体を与えられて、天国でいつまでも生きられるのだ、神さまと一緒に喜んで楽しく生きることが出来るのであり、喜びが出てくるのですね。神さまはこのことをお約束してくださいました。

アブラハムさんが、神さまは必ず約束を守ってくださることを信じて、神さまを信じたように、皆さんも、是非神さまの救いを信じて、神さまを信じていただきたいと思います。（辻 幸宏）

〔今週の暗唱聖句〕 創世記 15章6節

アブラムは主を信じた。
主はそれを彼の義と認められた。

〈ねらい〉

私たちの信仰生活は、ただ神様の恵みによってのみ成り立っています。善き生活をする事で恵みがもたらされるのでは無く、信じることへの代償として与えられ、善き生活へとつながります。アブラハムの信仰の姿勢を通して神様の恵みを理解します。

〈展開例〉

1. アブラム（アブラハム）さんは神様に対してどんな素晴らしい事をして義と認められたのでしょうか。

アブラム（アブラハム）さんは神様の召しに従って歩み、名声を掴みました（有名になりました）。いったい、どんな事をして神様からその様な大きな恵みを頂いたのでしょうか。

実はたった一つなのです。6節に答えがあります。

「アブラムは主を信じた。」

たったこれだけです。とっても簡単ですね。たったこれだけでアブラムさんは神様から「義」と認められました。この「主を信じる」とはどのようなことでしょうね。神様の前でアブラムさんのように「素直」になることでしょう。アブラムさんは素晴らしい業や偉業を通して「義」と認められたわけではありません。ただ神様を信

じたのです。素直に神様の前に立ち神様を信じてました。アブラムさんと同じように、

「〇〇君は主を信じた」

「〇〇さんは主を信じた」

と神様に言ってもらえるような祝福に満たされた歩みを目指したいですね。

2. 神様は本当に約束を守ってくださると思いますか？

聖書を読むと、つい昔の話だから自分たちとは関係ない、とか、神様は今の時代奇蹟は起こされないから、などと考えてしまいます。本当にそうなのでしょうか。

アブラムさんは100歳になって妻サラさんとの間に子どもを授かりました。おじいさん、おばあさんです。アブラムさんはエリエゼルさんが家を継ぐと思っていました。ところが神様は「あなたから生まれる者が跡を継ぐ」（4節）と言われました。当然アブラムさんはとっても驚きました。しかし、アブラムさんは神様のその「言葉」を信じました。不思議な業や奇蹟を信じたのでは無いですね。「言葉」を信じることによって大いなる祝福が与えられ、信じられないような恵みへと変えてくださいました。神様は必ず約束を守ってくださる方です。

対話の手掛かりとして……

①「召命」とは、「呼ばれること」だということを、前回学びました。そこでは詳しく書きませんでしたでしたが、もう一つの大事なことは、呼ばれたら、その声に「応える」ということです。神様の言葉は聞いて、それだけでありがたいということもあるのですが、それに応えることによって、神様の言葉のありがたさがより自分のものとなるのです。アブラハムも神様の言葉を聞いて一步を踏み出したのです。

②しかしながら、いつも元気に歩き続けることができるわけではないでしょう。祝福の約束に基づいて、最初はしっかりと足跡を刻んで歩むことができたとしても、思いがけない出来事を前にして、その足が止まって、倒れてしまうこともあるのです。でも、そうやって倒れてしまった私たちをもう一度、立ち上がらせくださる力ある方がおられます（詩編145）。それが神様です。その度に、私たちは知るのです。自分の力で歩いていたと思っていたけれども、本当に支えてくださっていたのは神様なのだと。神様の祝福は、ゴールしてはじめて与えられるものではなく、ゴールに向かう道の中においても確かにあるのだということを。

③この時、アブラハムもある挫折に陥っていました。その挫折の原因は、自分でもなく、他人でもなく、神様だと思っていたのです。苦しい時、しんどい時、私たちはその原因が何であるかを突き詰めようとします。原因が分かれば、それを取り除くことによって、苦しみから解放されるからです。しかし、アブラハムはここで、自分を苦しめる原因は、神様だと思ったのです。約束されていたはずの子どもが、まだ自分と妻サラの間に与えられていないからです。ふたりとも歳を重ね、妻も人間の目からすれば、子ど

もを産むことができる年齢ではありませんでした。神様の祝福を信じ、それに応えて歩み出したものの、その約束の一步がまだ始まろうとしません。私たちも同じような経験をするかもしれません。イエス様を信じると人生がまるで変わる！ 生きることが喜びになる！ その招きに応えて、キリスト者になり、あるいは教会に来ているもののまだまだ神様の恵みの手ごたえというものがよく分からないということが。

④でも、神様は信仰生活の中で悩み、御自分に対して疑いを持っている者に対しても、声をかけてくださるのです。面白いのは、ここでアブラハムに、召命の時（創世記12章）とまったく違う言葉を掛けられたわけではないのです。言葉自体は違いますが、内容的は同じです。要するに、アブラハムとサラの間に子どもが与えられ、祝福が受け継がれていくのだということです。皆さんはどう感じるでしょうか。「また神様は同じことをおっしゃっておられる。あなたのその言葉が原因で悩んでいるのに、なぜまた同じことをおっしゃるのか。何の解決にもならないではないですか。」アブラハムも同じような思いを抱いていたのかもしれませんが。神様の言葉を信じ続けても解決できないから、自分たちで策を講じた方がよい。つまりエリエゼルを跡継ぎにさせれば、神様の約束は実現するのだと。でも、神様の言葉を実現するのは人間ではなく、神御自身です。その御業の中に、人間を巻き込まれるのです。神様は疑いを抱くアブラハムを外に連れ出しました。自分で決断し、歩み出すことができないアブラハムの手を取るようにして、星空の下に連れ出したのです。神様に助けられるようにして、星空の下、もう一度、御言葉を聞き直した時、彼は主を信じたのです。疑いの中で、かつて聞いた神様の言葉が、新しい響きを立てて自分に迫ってきました。その時、アブラハムは主を信じたのです。

テキスト	創世記 22章1～19節
参照教理問答	子どもカテキズム 問13 ウェストミンスター小教理問答 問11 ハイデルベルク信仰問答 問26, 27, 28

〈聖書テキストの解説と黙想〉

アブラハムは、神の召しに応えて、故郷を離れて旅立った(12章)。旅路の中で、アブラハムに対する神の約束は、何度も繰り返される(12:1～3, 7, 13:14～17, 15:1)。

しかし神の約束の成就の前提となる、アブラハムとサラの間に生まれるはずの子どもは、一向に与えられない。アブラハムは、神の約束を疑い、家の僕であるダマスコのエリエゼルに家を継がせることにしたのだと、神に不平を述べる(15:2, 3)。

神はアブラハムを責めることなく、自分の心の思いに囚われているアブラハムを、輝く星空のもとに連れ出し(神の御心の広さへと連れ出し)、アブラハムとサラとの間に子どもが生まれるとの約束を繰り返し、アブラハムの信仰を確かにさせた(15:5, 6以下)。

それでもなお子どもが与えられないことに焦慮したサラは、アブラハムと、自分の女奴隷ハガルとの間に子どもが与えられればよいのではないかと提案し、アブラハムは受け入れる。イシュマエルがこの時、与えられた。

しかし、神はなお、アブラハムとサラに、あなたがたに子どもが生まれるとの約束を繰り返される(17:1以下)。それは、アブラハムとサラの不信仰を凌駕する神の契約への信実、人間的不可能性(彼らの年齢)を凌駕する神の全能の力を、明らかにする出来事である。

結局、神の約束の言葉どおりに、アブラハムとサラのもとにイサクが与えられる。神をあざ笑ったアブラハムとサラの卑しい笑いを、神は、信実の喜びに満ちた笑いへと造り変えられたのである(17:17, 18:12, 21:6)。

イサク誕生の後、ハガルとイシュマエルは、アブラハムの家を離れる(21:9以下)。イサクはア

ブラハムの家にとって名実共に、「あなたの息子、あなたの愛する独り子イサク」(22:2)となったのである。

ところが、そのイサクを「焼き尽くす献げ物としてささげなさい」(22:2)との神の命令がくだる。それはアブラハムとサラにとって、人間的には最大の喜びが取り去られること、信仰的には神の裏切りを意味する。あれほどの長い年月の疑い迷いを経て、ようやく与えられたイサクが失われて、なお神の約束のみが実現することを信じ抜く道が一体どこにあるというのか。

「モリヤの地」とは、後のイスラエル王国でソロモン王が神殿を建築した場所である(「ソロモン王はエルサレムのモリヤ山で、主の神殿の建築を始めた」歴下3:1)。

「次の朝早く」(3)との表現は、私たちの胸を突く。アブラハムとサラには、御心を求めて祈り合う時間も、語り合う時間も与えられなかったのである。アブラハムは、イサク奉献を実行したら神は約束を裏切ることになるのではないかとの恐れと、今まで不信仰と人間的不可能性を超えて実現してきた神の約束への信頼(5, 8)の間を揺れ動き、ついに息子イサクを縛って祭壇の薪の上に置き、刃物を取って屠ろうとした。

揺れ動きの頂点で、天から主の御使いが、神の言葉を語る。それは、恐れと信頼の間の、人間的に見れば狭い隙間を縫って、神的には広く整えられた道が開かれることを宣言する、福音の言葉であった。

神の福音の言葉には、第一にアブラハムの恐れを含む信頼の中に、なお信仰を認める愛が満ちている。第二に、信頼を含む恐れの中に、身代わりの献げ物を備えて、恐れを喜びに変える、希望が満ちている。

神の福音の奥にあるのは何か。それはアブラハ

ムに二度繰り返して語りかけられる言葉に明白である。「あなたは、自分の独り子である息子すら、わたしにささげることを惜しなかった」(12)。「あなたがこの事を行い、自分の独り子である息子すら惜しなかったのだ」(16)。

どのようにこの出来事を読んでも、アブラハムは実際にはイサクを献げてはいない。アブラハムの決心の中には、献げる気持ちが含まれていたとしても、それは先に述べたように重層的であり、純粋ではない。

私たちが後に知ることになるのは、アブラハムの信仰を保ち、アブラハムの子らと呼ばれる私たち信仰者を生み出すために、神こそがご自身の独り子のお命を、モリヤの山(エルサレム)で、十字架に犠牲として献げることを厭われなかった御方であるということである。

だからこそ「自分の独り子ですら、わたしにささげることを惜しなかった」(12)との言葉を、後にパウロは神に用い直したのである。「わたしたちすべてのために、その御子をさえ惜まず死に渡された方は、御子と一緒にすべてのものをわたしたちに賜らないはずがありませんか」(ローマ8:32、ここには12節の七十人訳聖書が引用されている)。

このようなところにまで膨らむ、神の取り扱いを経験したという意味で、信仰の父と呼ばれるアブラハムは、この深い経験を味わった場所を「ヤーウェ・イルエ(主は備えてくださる)」と名付けた。主の山に備えありとは、恐れと信頼の中を揺れ動

く私たちの旅路に、必ず主が広く整えられた道を備えてくださるとの、信仰を言い表した言葉である(教理用語で言えば「摂理」)。

〈子どもたちに対して〉

子どもたちも、神に祈る生活を教えられ、祈る生活を始めたなら、必ず、この恐れと信頼との間の揺れ動きを経験する。

一方で、アブラハムとサラがたどったような、不信仰の中で繰り返される神の約束が実現していく喜びを繰り返し味わうだろう。

他方で、このような神の導きが神の命令であるなら、すべての喜びは奪い去られ、約束の真実など消し飛んでしまうのではないかとの恐れに囚われることも、繰り返して起こる。

その中で、神は、ご自身の独り子イエス・キリストによって成し遂げられた救いの地点から、私たちの思いを超えて、すべてを導いておられるという確かな恵みを伝えたい。

「主の山に、備えあり」。これが、御子イエス・キリストにまで至る神の愛の導きを示すもので、後にパウロはこのように言い表したのである。「神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということ、わたしたちは知っています」(ローマ8:28)。

ハイデルベルク信仰問答の間26, 27, 28を良く噛み締めながら、子どもたちのための説教の言葉を紡ぎ出したい。(安田直人)



テキスト 創世記 22章1～19節
子どもカテキズム 問13

〔単元のねらい〕

暗唱聖句は、黙想に記したように、神の摂理を言い表しています。摂理とは、私たちの知らないところで、神の計画が実現していき、何もかも良いように整えられていくということを意味しません。アブラハムとサラが体験したような、神を信じることも困難な状況の中で信仰が揺さぶられ、試され、そして恐れに囚われてしまっている只中で、経験させられる神の真実です。子どもたちもまた経験する信仰と恐れ揺れ動きの中に、神の愛の導きが確かにあることをしっかりと語りたいと思います。

主の山に、備えあり

アブラハムさんのお話を、これまで2回続けて聞いてきました。今日はアブラハムさんとサラさんに、神さまが約束してくださった、子どもが登場します。思い返してみましょう。神さまは、繰り返し「あなたがたに子どもが与えられ、そしてあなたの子孫は、数えきれないほどになる。そしてあなたの子孫は約束の土地に生きることになる」という約束を、アブラハムさんとサラさんと結んでくださいました。

先週のところでは、この約束が、本当に厳かな神様の契約であることが、はっきりと示されました。暗闇の中で、「煙を吐く炉と燃える松明が二つ」と言われるほど、明るい光に包まれて、神さまご自身が、裂かれた動物の間を通り過ぎてくださったのです。これは、この契約が破られるならば、私の身体が裂かれても構わないという神さまの強い決心をあらわすものでした。

それほど神さまのお姿を見させていただいた後でしたが、アブラハムさんとサラさんは、段々年をとり、まだ子どもが与えられないことに、耐えられなくなってきました。神さまの約束は本当じゃなかったんだ。私たちの力で、何とかしなきゃいけない。それで、やきもきしたサラさんは、自分の召使のハガルとアブラハムさんの間に、子どもが与えられれば、自分たちの子どもになるんじゃないかと考えてしまったのです。

確かに、イシュマエルという子どもが与えられ

ました。けれども、神さまは、アブラハムが九十九歳になった時に、あらわれてくださって、「あなたとの契約を私は守る。あなたも守りなさい。必ずあなたとサラの間に子どもが生まれる」と語りかけてくださいました。

神さまからご覧になったら、アブラハムもサラも、神さまの契約が実現するなんてとても信じることができなかった、不信仰な夫婦ですね。自分たちの力で、神さまがしてくださらないことをしてしまおうとした、思い上がった夫婦だと言ってもよいかもしれません。それなのに、神さまは、先週聞いたとおり、ご自分の契約に、あくまでも忠実な方でいらっしゃいました。

もちろん、アブラハムさんとサラさんの気持ちは、良く分かりますよね。子どもが生まれるとしたら、アブラハムはもう百歳、サラは九十歳です。どうしてこんなおじいちゃんとおばあちゃんから、赤ちゃんが生まれるなんていうことがあるのでしょうか。それで、アブラハムさんは、神さまがお語りくださったので、ひれ伏して聞きましたが、けれどもひそかに笑いってと書いてあります。サラさんも、神さまの御使いからその話を聞いた時、同じように、ひそかに笑ったのです。

けれどもやはり、神さまがご自分の契約に忠実でいらっしゃる、その通りになるということの方が、アブラハムさんやサラさんの信仰よりも、アブラハムさんやサラさんの、人間から見たらとて

もとてもありっこないという現実よりも確かでした。子どもが本当に生まれたのです。

名前は神さまが教えてくださった通り、イサクと名付けられました。「笑い」という意味です。ひそかに神さまを笑う、いやしい気持ちを、心から神さまをはめ讃えて笑う、心からの喜びに、神さまは変えてくださったのです。

イサクは、そういうわけで、アブラハムさんとサラさんの愛する独り息子でした。大事に大事に、可愛がって育ててきたのです。

それなのにある日突然、神さまが、命令をなさいました。「愛する独り子イサクを連れて、モリヤの地に行き、焼き尽くす献げ物としてささげなさい」。焼き尽くす献げ物と言えば、刃物で突き刺して殺し、薪で燃やす献げ物のことです。何ということでしょう！

どんなにアブラハムさんの心は揺れ動いたことでしょう。どう考えてもおかしいことです。もしイサクを殺して献げたら、子孫が増え広がり、約束の土地に住むようになるとの神さまの約束は破られることになるじゃありませんか。

でも、アブラハムさんが体験してきたのは、あの日、召されて旅立った時から、今まで、神さまは一度も約束を破ったことがない、ということです。アブラハムさんとサラさんは、神さまの約束を信じられずに、約束を破ってしまったことが何回もありましたが、そのたびに神さまの方では、約束の言葉を新しく与えてくださり、実現してくださったのです。目の前にいるイサクが、その確かな証拠です！

それで、イサクに、「火と薪はここにありますが、焼き尽くす献げ物にする子羊はどこにいますか」と尋ねられた時、アブラハムさんは必死になって答えました。「わたしの子よ、焼き尽くす献げ物の子羊はきっと神が備えてくださる」。

どちらが本当なのでしょう。神さまはどうしてこんな命令を与えて、私を試みたりなさるのだろうか。アブラハムさんが、モリヤに向かう足取

りは、とても重たかったに違いないと思います。

モリヤに到着し、祭壇を築き、薪を積み上げると、アブラハムさんはイサクを縛って薪の上に載せました。そして刃物を取り、イサクを殺そうとしました。その時です！

御使いを通して、神さまの声が響きました。「その子に手を下すな。何もしてはならない。あなたが神を畏れる者であることが、今、分かったからだ。あなたは、自分の独り子である息子すら、わたしにささげることを惜しなかった」。

アブラハムさんがあたりを見回すと、木の茂みの中に雄羊がいたので、その雄羊が、焼き尽くす献げ物として、神さまに献げられました。

どう考えてもおかしい。こんなことが起こるのだったら、神さまは嘘つきだ。神さまは約束を破ってしまわれるんだ。私たちも、辛い思いをしながら、涙を流しながら、そう考えてしまうことがあります。

でも、神さまは今まで、一度も嘘なんかついたことはない。神さまはいつだって約束を守ってくださった。おかしいと思いながら、心の中に、神さまの今までのお姿が浮かび上がります。

そんな時、このアブラハムがイサクを献げ物にしようとしたお話を思い出しましょう。そして、実はアブラハムは愛する独り子イサクを献げはしなかったけれども、神さまは、私たちが生きるために、愛する独り子イエス様を、十字架に犠牲の子羊として献げてくださったのだ、ということ思い出しましょう。

あなたにとって本当に必要なことは、神さまが備えてくださいます。何よりも、罪が全部赦され、神さまの子どもとなって歩むための、救いに必要なことは全部、神さまが備えてくださいます。

神さまなんか嘘つきだ。だけど神さまは嘘をついたことなんか一度もない。その間を心が揺れ動く時、自分に語りかける神さまの御言葉として覚えることにしましょう。「主の山に、備えあり」。

(安田直人)

[今週の暗唱聖句] 創世記 22章14節

アブラハムはその場所をヤーウェ・イルエ（主は備えてくださる）と名付けた。

そこで、人々は今日でも「主の山に、備えあり（イエラエ）」と言っている。

〈ねらい〉

アブラハムは信仰の父として私たちの信仰生活に大きく受け継がれています。いわばお手本でもあります。それは人間としての悩みや葛藤があったとしても、神を信頼し、心から神を愛していくことを意味しています。神を愛することとは一体どんな事なのか、この物語を通して考えてみましょう。

〈展開例〉

1. どうしてアブラハムさんは大切な息子イサクを屠ろうとしたのでしょうか。

初めに、神様からの命令がありました（2節）。でも、この命令を破ることもできました。長い間子どもが与えられず、苦難の日々があったにもかかわらず、最愛の息子を焼き尽くす献げ物として献げなければいけない、そんな理不尽なことが有って良いのか……。アブラハムさんは神様に失望し相当苦しんだと思います。でも、アブラハムさんは、神様がそれまで一度だって約束を破ったことが無い事をよく分かっていましたし、何よりもまず神様を恐れ、そして敬っていました。神様の命令をとにかく第一（重要なこと）として神様に供える、その姿勢を共に考えてみたいと思います。

2. 自分がアブラハムさんの立場だったらどうしますか？

これはとっても難しいですね。自分も同じよ

うにはできないけど、神様を愛し、神様を信じて第一とする生活を心がけること、それならできますね。自分に与えられた時間やお金（お小遣い）など、まず神様にその一部を第一の献げ物としてささげる事の大切さを学びたいと思います。アブラハムさんのような神様に対する深い信仰が少しでも私たちに備わるように祈りましょう。

3. 神様はご自分の大切な子どもをどうされましたか？

アブラハムさんは神様のご意志により、「その子に手を下すな。何もしてはならない」（12節）と言われイサクさんは焼き尽くす献げ物とはなりません。しかし、神様ご自身は愛する一人子イエスを私たちのために十字架につけられ献げてくださいました。この世を救うために、そしてこの世と私たちを愛してくださったからなのです。

4. アブラハムさんは神様の命令を通して何が得られましたか？

神様を恐れ敬い、愛し、信頼することで、今の私たちにもつながる神様からのたくさんの恵みを頂きました（13節、16～18節）。私たちも神様から愛されていることを知り、神様を信じ、神様の道に従っていけば、たくさんの恵みに与えることができます。

対話の手掛かりとして……

①私たちが神様に従うことが難しいと感じるのは、自分自身にあるのではなく、神様御自身にあるのではないだろうか？ ふとそう思うことがあるかもしれません。心が揺らいでしまうのは、私ではなく、神様あなたではないのですかと思ってしまうのです。ここに登場するアブラハムもまたそのことを感じていたのかもしれません。25年間も待ち続けて、やっと与えられた息子ヨセフを、「いけにえとして献げよ」と神様おっしゃるのです。愛しい息子の命をなぜ？ という思いはもちろんのこと、この息子がいなければ、神様の祝福は後の世代に広がることはありません。なぜ神様は御自分の約束を破られるのだろうか？ そしてそのことによって、私を苦しめるのだろうか？ そういった思いがアブラハムの心に渦巻いていたことでしょう。

②しかし、不思議なことに、聖書を読む限り、アブラハムがいかに苦しんだかという心理描写は全くと言っていいほど記されていません。淡々と主の言葉に従うアブラハムの姿が描かれているのです。それは何もアブラハムがイサクの命を献げることが惜しくなかったということではないでしょう。言葉にできないような苦しみが彼を襲ったに違いありません。しかし、創世記の著者は、アブラハムの心の中を描くことよりも、もっと大切なメッセージを伝えたいと考えたのではないのでしょうか。その一つは、この物語の鍵になる言葉、「主は備えてくださる」（創世記22:14）ということです。ここで用いられている「備える」という言葉は、「見る」ということです。誰が見ておられるのでしょうか。それは神様です。神様が見ていてくださるその眼差しの中に、すべてのことが備えられているのです。アブラハムはこの神の眼差しの中に、自分自身を置き、すべてを神様に委ねたのです。

③私たちの信仰は、神の「摂理」を信じる信仰です。余り聞き慣れない言葉かもしれませんが、要するに、ここで神様がアブラハムにしてくださったように、これから起こることを前もって見ておられるお方がいるということです。その神の眼差しの中に、立とうとする信仰です。私たち人間は、自分たちのこれから先の歩みについて、何が起こるのかを見ることはできません。でも、神様はその視線の先に、私たちが祝福されることを確かに見ておられるのです。アブラハムは、イサクをささげようと命じられた時、神様のことが見えなくなり、分からなくなりました。しかし、そこでアブラハムは、神様が見ていてくださること、備えていてくださることの中に、自分自身のことも、イサクも委ねたのです。

④神様は、アブラハムだけではなく、私たちにも同様の試練をお与えになります。すべてが順調に行っていると思っている時に、私たちの心を揺り動かすような試練をお与えになることがあります。しかし、それは私たちを突き放すためではなく、信仰を強めるためです。自分ではなく、神様が見ていてくださるその眼差しの中に、立って歩み出していくことができるために、私たちを訓練し、成長へと導いてくださるのです。

⑤多くの人たちが愛している御言葉があります。「わたしは、あなたたちのために立てた計画をよく心に留めている、と主は言われる。それは平和の計画であって、災いの計画ではない。将来と希望を与えるものである。……」（エレミヤ22:11）私たちには将来があり、希望があります。それは神様が造り出してくださる確かなもののなのです。

テキスト	創世記 37章12～36節
参照教理問答	子どもカテキズム 問13 ハイデルベルク信仰問答 問27～28 ウェストミンスター小教理問答 問11 ウェストミンスター大教理問答 問18

①はじめに (1～11節)

指定されたテキストは、12節から36節ですが、1節から11節の内容を踏まえる必要があるため、以下に概観したいと思います。

ヤコブ、別名イスラエル（創世記32:29）は、旧約において神の民イスラエルの祖先です。彼は、父アブラハムが主なる神より与えられた地（創世記17:8）、カナンに住んでいました。ヤコブには、12人の息子がいました（創世記35:22b～26）。ヤコブの12人の息子は、やがて神の民イスラエル12部族の祖先となっていきます。12人の息子の一人、ヨセフは、年寄り子で、どの息子よりもかわいがられました。ヤコブは、ヨセフに裾の長い晴れ着を作って着せてあげました。そのため、兄たちから憎まれました。

ある日、ヨセフは、夢を見ました。ヨセフは、夢の内容を兄たちにこう語りました。「畑でわたしたちが束を結わえていると、いきなりわたしの束が起き上がり、まっすぐに立ったのです。すると、兄さんたちの束が周りに集まって来て、わたしの束にひれ伏しました」（7節）。兄たちは、このヨセフの話を聞いて、ますます憎しみを深めました。ヨセフは、再び夢を見て、こう兄たちに語りました。「わたしはまた夢を見ました。太陽と月と十一の星がわたしにひれ伏しているのです」（9節）。この夢の話は、兄たちだけでなく、父ヤコブにも語りました。ヤコブは、次のようにヨセフを叱りつけました。「一体どういうことだ、お前が見たその夢は。わたしもお母さんも兄さんたちも、お前の前に行って、地面にひれ伏すというのか」（10節）。こうして、兄たちは、ヨセフに対するねたみ、憎しみをさらに深めていきました。ただ父ヤコブは、このヨセフの話を心に留めました。

以上、1節から11節は、12節以降の物語、また、48章まで続くヨセフ物語の大切な伏線となっています。

②ヨセフ、兄たちに会いに行く（12～17節）

兄たちは、出かけていって、シケムで羊の群れを飼っていました。ヤコブ、別名イスラエルは、兄たちの様子を見に行くようにヨセフに頼みました。父ヤコブは、ヨセフをヘブロン谷から送り出しました。ヘブロンからシケムまでの距離は、約75キロメートルあります。ヨセフは、シケムに着くと兄たちを探すため、野原をさまよっていました。そこに名前も記されない一人の人が登場します。その人は、ヨセフに「何を探しているのかね」と尋ねます。ヨセフは、羊の群れを飼っている兄たちを探していることを告げます。すると、その人は、「もうここをたってしまった。ドタンへ行こう、と言っていたのを聞いたが」と答えました。シケムからドタンへは、さらに約25キロメートルあります。ヨセフは、兄たちを探すためにドタンへと向かいました。ドタンは、隊商がシリアからエジプトに行くための道に面していました。ヨセフは、ようやく遠くの方にいる兄たちを見つけることができました。

③兄たち、ヨセフを殺そうとする（18～22節）

ドタンにいる兄たちは、自分たちのところへ近づいてくる弟ヨセフの姿に気がつきました。その時、兄たちの心にヨセフに対するねたみ、憎しみが沸き起こりました。4節、5節、11節に記されていた兄たちのヨセフに対する憎しみを思い起こしたいと思います。兄たちには、ヨセフが一人でこちらに向かっているのがわかりました。今なら殺しても誰も見ていません。兄たちの次の言葉には、ヨセフに対する憎しみがよくあらわされています。「おい、向こうから例の夢見るお方がやっ

て来る。さあ、今だ。あれを殺して、穴の一つに投げ込もう。後は、野獣に食われたと言えばよい。あれの夢がどうなるか、見てやろう」(19,20節)。

ところが、長男ルベンだけは、殺すことには反対しました。ここにはルベンの長男として兄弟を導かなければならない責任があらわされています。

④ヨセフ、隊商に売られる (23～30節)

ヨセフが兄たちに近づいてくると兄たちは、父ヤコブがヨセフに作ってあげた裾の長い晴れ着をはぎ取りました。ここに兄たちのねたみの大きさがあらわされています。そして、兄たちは、ヨセフを捕らえて穴の中に投げ込んでしまいました。この穴は、雨水をためておくための井戸であると思われます。そこに水が入っていなかったため、ヨセフを懲らしめるためにはちょうど良い場所でした。兄たちは、ヨセフを穴に落としたまま、離れた場所で食事を始めました。

するとギレアドの方からイシュマエル人の隊商がやってくるのが見えました。イシュマエル人の隊商は、商売道具を積んで、エジプトに下って行こうとしているところでした。その時、兄の中の一人、ユダが次のように提案しました。「弟を殺して、その血を覆っても、何の得にもならない。それより、あのイシュマエル人に売ろうではないか。弟に手をかけるのはよそう。あれだって、肉親の弟だから」(26,27節)。兄たちにとって、どんなに憎くてもヨセフが同じ父を持つ弟であることに変わりありません。兄たちは、何も殺すことはないという思いに至りました。

ところが、兄たちが食事をしながら話し合っている時に、ヨセフが捕らえられている穴の横をミディアン人の商人たちが通りかかって、ヨセフを見つけて引き上げ、銀20枚でイシュマエル人の隊商に売ってしまいました。イシュマエル人の隊商は、ヨセフをエジプトへ連れて行ってしまいました。食事を終えた長男ルベンが穴に戻ってみるとそこにヨセフの姿はありませんでした。穴に落として懲らしめるだけにとどめようと提案していたルベンは、ヨセフの姿がないことに強く心を痛めました。

⑤ヨセフの死を父に知らせる (31～35節)

兄たちは、父ヤコブを欺くという最も卑劣な行動にでます。父がヨセフを愛するがゆえに贈った

裾の長い晴れ着を殺した雄山羊の血で浸し、父へと送り届けました。兄たちは、ヨセフが野獣に殺されたことにしようと思いました。この行為に兄たちのヨセフに対する憎悪の深さ、その憎悪を引き起こす罪の深さを思い知らされます。ヨセフが死んだと知った父ヤコブの悲しみはとても深いものでした。ヤコブは、ヨセフのために何日も嘆き悲しみました。

⑥ヨセフ、エジプトに売られる (36節)

ヨセフは、兄たちの前から姿を消し、父ヤコブにとっては、死んでしまったと思われました。

ところが、ヨセフ物語は、ここから本編が始まります。ヨセフは、エジプトへ売られ、ファラオの宮廷の役人で、侍従長ポティファルのものとなりました。

ところで、ヨセフをエジプトに売ったのは、イシュマエル人のはずですが、36節では、メダン（ミディアン人）と記されているのは、少し混乱すると思います。士師記8章でもミディアン人とイシュマエル人は、交互に使われ、同じ民族を指しています。創世記37章においても同じ民族の言い換えであると理解するのがよいでしょう。

⑦最後に

37章は、兄たちのヨセフに対する憎悪が包み隠さず記されていました。兄たちに憎悪を引き起こさせたヨセフの態度にも問題があったと思います。

ヨセフは、兄の憎悪によって、エジプトへと売られ奴隷にされるというとてもない災難を味わうことになります。愛する息子ヨセフを失ってしまった父ヤコブは、ただ苦悩するしかありませんでした。ここに人の力ではどうすることもできないにくい罪が描かれています。この事実に対して、神は、全く沈黙しているように思えます。

しかし、実は、すべて神の深い配慮による導きの下で起っていることだったことが後でわかります。神は、人の罪をも超えて、ご自身の計画を実行されます。神は、人がどんな状況にあらうと必ず背後で守り導いてくださいます。神は、歴史を支配し、人生をふさわしい方向に導いてくださいます。これを神の摂理と言います。ヨセフ物語を通して、摂理信仰を子どもに伝えましょう。

(浅野正紀)

テキスト	創世記 37章12～36節
子どもカテキズム	問13
参照教理問答	ハイデルベルク信仰問答 問27,28 ウェストミンスター小教理問答 問11 ウェストミンスター大教理問答 問18

〔単元のねらい〕

人間の罪は、目を覆いたくなるような悲しい現実を生み出します。しかし、そのような人間の罪の現実の背後で、すべてを支配し導いておられるのは神です。ヨセフは、兄たちの憎しみを買い、エジプトへと売られてしまう悲劇に見舞われます。しかし、神はヨセフを守り、ご自身の計画を実行されるために確実に導いておられました。私たちの人生もどのような困難な中にあっても必ずふさわしい方向に神が導いてくださいます。

苦難の中に働いておられる神

ヤコブには、12人の息子がいました。ヤコブは、12人の中でヨセフを特にかわいがりました。ヤコブは、特別ヨセフにだけ、裾の長い晴れ着を作って着せてあげました。そのことを、兄たちは、よく思わず、ヨセフをねたんで憎むようになりました。

ある日、兄たちは、出かけて行き、シケムで羊の群れを飼っていました。ヤコブは、ヨセフにこう言いました。「兄さんたちは、シケムで羊を飼っているはずだ。兄さんたちのところへ行ってきたくれないか」。ヨセフは、「はい、分かりました」と答えました。すると、ヤコブは、ヨセフに更にこう言いました。「では、すぐに出かけなさい。兄さんたちが元気であるか、彼らが飼っている羊が無事か見てきてくれないか。そして、その様子を私に知らせてくれないか」。

父ヤコブは、ヘブロンからヨセフを送り出しました。ヘブロンからシケムまでは、75キロ位、あります。ヨセフは、父の頼みの通り、シケムに向かって旅をし、ようやくたどり着きました。

ヨセフが兄たちを探すためにシケムの野原をさまよっていると、一人の人が声をかけてきました。「何か探しているのですか」。ヨセフは、こう答えました。「兄さんたちを探しています。兄さんた

ちは、このシケムで羊を飼っています。もし知っているならば教えてください」。一人の人は、こう答えました。「彼らなら、もうここを離れてしまいましたが。確かドタンに行くと言っていました」。シケムからドタンへは、さらに25キロ位あります。ヨセフは、この人の言葉を聞いて、兄たちを探すためにドタンへと旅立ちました。

ヨセフは、ようやくドタンにたどり着き、羊を飼っている兄たちを見つけました。兄たちにも、遠くの方から弟のヨセフがやって来るのが見えました。兄たちは、遠くの方からこちらに近づいてくるヨセフを見ていて、さまざまな憎しみが心の中からわき出てきました。兄たちは、近づいてくるヨセフを見ながら、ヨセフを殺してしまおうとたくらみました。兄たちの心にしみついているヨセフに対する憎しみはあまりにも大きいものでした。兄たちは、ヨセフが自分たちのところへ近づいて来るなり、捕らえて殺し、穴に投げ込もうと考えました。

ところが、長男のルベンは、ヨセフを殺すことに反対して、「殺すのはやめよう。穴に落とすだけにしよう」と言いました。ルベンは、最終的には、ヨセフを助けて、父ヤコブのもとへ帰してあげようと考えました。ルベンは、長男であり、兄

弟をとりまとめる責任がありました。

ヨセフが近づいてくると、兄たちは、ヨセフの着ている裾の長い晴れ着をはぎ取り、ヨセフを捕らえて穴の中に投げ込んでしまいました。

その後、兄たちは、ヨセフを落とした穴を離れて、食事を始めました。兄たちが食事をしている時、遠くの方からイシュマエル人の隊商がやってくるのが見えました。イシュマエル人の隊商は、商売道具を積んで、エジプトに向かっていているところでした。兄たちの一人、ユダは、こう言いました。「弟ヨセフを殺しても私たちに何の得にもならない。あそこにいるイシュマエル人にヨセフを売ってしまおう」。兄たちは、このユダの提案に賛成しました。

ところが、イシュマエル人が来る前に、ミディアン人の商人がヨセフの落とされた穴の横を通りかかりました。ミディアン人は、ヨセフを見つけるなり、穴から引き上げて、銀20枚で、イシュマエル人に売ってしまいました。そんなこととは知らない兄たちは、ヨセフを穴から引き上げようと思って穴の横に來た時にびっくりしてしまいました。特に弟ヨセフを殺すことに反対したルベンは、あわてふためいてこう言いました。「ヨセフがいなくなってしまった。わたしはどうすればいいんだ」。

兄たちは、父ヤコブに対してヨセフがいなくなってしまったことをどう報告するか考えて、嘘の報告をすることにしました。これは、とてもひどいことです。兄たちは、ヤコブがヨセフに贈った裾の長い晴れ着を拾いあげて、殺した雄山羊の血に浸しました。こうして、血まみれになった晴れ着を父ヤコブに送り届けました。ヤコブは、血

まみれの晴れ着を見てヨセフが野獣にかみ殺されたと思いました。ヨセフをかわいがっていたヤコブの悲しみは、とても大きいものでした。何日も何日もヤコブは、嘆き悲しみ泣き続けました。

しかし、ヨセフは、死んだわけではありませんでした。イシュマエル人の隊商に売られたヨセフは、エジプトへと連れて行かれました。そして、ファラオの宮廷の役人であった侍従長ポティファルの奴隷となって生きていくこととなりました。

ヨセフは、自分にも責任があったと思いますが、兄たちに憎まれ、兄の恐ろしい罪によってエジプトへ奴隷として売られてしまいました。これは、ヨセフにとって災難であり悲劇でしかありません。

また、ヨセフが死んだと思っている父ヤコブにとっても自分の力ではどうすることもできない大きな苦しみです。まるで、ヨセフもヤコブも神にみはなされてしまったかのような苦難の中にいます。

しかし、実は、この悲劇的な出来事の背後には、確実な神の守りと導きがありました。後に、ヤコブと兄たちは、他でもないヨセフに助けられることになります。神は、人の罪が引き起こした悲劇を超えて、喜びの出来事を用意してくださいました。

神は、私たちがたとえどんなつらい状況の中にあろうとも必ず共にいてくださり、守り導いてくださいます。神は、歴史を支配し、人生を導かれます。これを神の摂理と言います。神は、今日も明日も私たちを守ってくださいます。神は、悲しみを喜びへと変えてくださいます。この神にすべてをゆだねて生きていきましょう。（浅野正紀）

〔今週の暗唱聖句〕 コリントの信徒への手紙一 10章13節(b)

神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなならず、
試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてくださいます。

〈ねらい〉

ヨセフ物語を通して、私たち人間には、はかり知れない神様の計画と導きがあることを知る。12部族のはじめとなるイスラエルの息子12人について知る。

〈展開例〉**★話し合いのポイント**

①(直前の出来事であるヨセフの夢について、説教の中で触れられていなければ37章1～11節を輪読する。)

ヨセフがお兄さんたちに話した夢は、どんな内容でしたか？ その話を聞いたお兄さんたちは、どんな気持ちになったと思いますか？

→ヨセフの兄の妬みや怒りの気持ちを想像して、その後の事件が起きた理由を理解する。また、私たちの心にもヨセフの兄たちと同じような思いがあることに気付けるように導く。

②お兄さんたちを訪ねて行ったヨセフの身に起こった事件は、どんなことでしたか？ その時のヨセフの気持ち、また父ヤコブの気持ちはどうだったでしょう？

→12節以下の出来事を共に振り返って、ヨセフやヤコブの悲しみ、絶望を理解する。この恐ろしい事件の中にも、神様の計画があり、摂理が働いていることを、知ることが出来るよう導く。

★作業

イスラエル12部族のはじめであるヤコブの息子の名前を覚えよう。

模造紙など大きな紙1枚を用意し、創世記35章23～26節を参照して、12人の息子の名前を協力して書きだす。(それぞれの人について記入できるスペースを取っておく)今日の箇所に登場した人について、言ったことや起きたことなどを聖書から見つけて記入する。

例えば、

ヨセフ……お兄さんたちを訪ねて行って、銀20枚で商人に売られてしまった。

ルベン……「命まで取るのはよそう」「血を流してはならない。荒れ野のこの穴になげいれよう。手を下してはならない」。

ユダ……ヨセフを殺そうとした兄弟に、「手をかけるのはよそう」と言ってイシュマエル人に売ろうと言った。

など。

あと2週ヨセフ物語が続くので、また12兄弟が登場した時に確認したり書き加えて活用できるように、その間掲示しておくといよい。

〈祈り〉

天の父なる神様、今日も教会に来ることができてありがとうございます。

神様がどんな時も私たちの歩みを導いて守ってさることを感謝します。

イエス様のお名前によって祈ります。アーメン。

対話の手掛かりとして……

①聖書を読み始めますと、夫婦、親子、兄弟など、「家庭」を舞台にして物語が進んでいることに気付かされます。家庭とは、本来、愛と喜びに満ち溢れている場所です。それゆえに、そこに居るだけで、平安に過ごせるような場所です。しかし、創世記を読んでみますと、アダムとエバの夫婦、カインとアベルの兄弟、ヤコブとエサウの兄弟、そして今回のヨセフ物語など、「家庭」という一番愛情に満ち溢れていなければいけない場所が、悲劇の舞台となっているのです。ハイデルベルク信仰問答問5で、「わたしは神と自分の隣人を憎む方へと、生まれつき傾いているからです」とあります。ポールが坂道を止まることなく転がり落ちていくように、罪は全人類へと広がっていったのです。

②その悲劇が、ヤコブの家族にも及んでいます。なぜこんな悲劇が起こったのでしょうか。父ヤコブがヨセフを、他の兄弟よりも可愛がったからでしょうか。あるいはヨセフが、自分が見た夢を兄たちの前で誇らしげに語ったからでしょうか。確かに、そういったことが原因で、ヤコブの家族が不和になったのかもしれません。しかし、聖書が語りますのは、もっと深いことです。「兄たちは、父がどの兄弟よりもヨセフをかわいがるのを見て、ヨセフを憎み、穏やかに話すこともできなかった」と4節にあります。「穏やかに話すことができなかった」ことが、この家族を襲った悲劇の原因です。「穏やか」という言葉は、ヘブライ語で「シャローム」という言葉で、「平和」「平安」と訳されます。今日の箇所では、14節「元気にやっているか」「無事か」という言葉も、同じシャロームです。それは、争い事がない平穏無事な状態というよりも、神様の祝福が満ち溢れている状

態を意味する言葉です。しかし、ヤコブの家には、この神の祝福を失っていたのです。罪とは、この神の祝福を失っている状態のことです。

③ところで、今回のテキスト創世記37章を丁寧に読んでみますと、「神」とか「主」という言葉が一切用いられていないことに気付きます。ヤコブの家で起こった悲劇な、そして取り返しのつかない出来事が記されているだけなのです。そして人間が犯した罪が、家庭おいて、段々と広がって行く有様を、神様がボーっとご覧になっておられるわけではないのです。創世記37章のはじめには、ヨセフが見た夢が記されています。「夢」において、神様は御心や御計画が示されることがよくあります。

④でも人は、その夢の中に示された神の御計画を無視します。ヨセフに殺意を抱いた兄たちは、こう言いました。「……あれの夢がどうなるか、見てやろう。」(創世記37:20) 兄たちからすれば、ヨセフの傲慢さに対する怒りの言葉であったかもしれませんが。ヨセフが見た夢の中に、まさか、神様の御計画があるなどとは、思ってもみなかったのです。神様は、時に、私たちの気付かない仕方で、御自身の御計画を進めて行かれることがあるのです。私たちの目に映るのは、人間の罪、悲劇、醜さだけかもしれません。だから、こんなところに居てもつまらない。生きていても意味がないと思うこともあるかもしれません。しかし、ヨセフの物語から改めて教えられるのは、そういう人間が犯す罪の中に、神様は確かに生きて働いておられるのだということです。神と自分の隣人を憎むのではなくて、心から愛して生きることができるよう、神様は、もう一度、祝福で私たちを満たそうとしておられるのです。

テキスト
参照教理問答

創世記 39章～41章
子どもカテキズム 問11, 13, 14
ハイデルベルク信仰問答 問1
終末の希望についての信仰の宣言 二(四), 四(四)

〈聖書テキストの解説と黙想〉

【KEY1 聖書本文を語る】

〔STEP1〕聖書本文を読む。

創世記39～41章を読む。長いので、何度もくり返して読むことはできないかもしれないが、少なくとも1回は音読する。

〔STEP2〕この個所のテーマは何か？

主は、苦難を経験している者と共にいて、その歩みを顧みてくださる。

〔STEP3〕それをどのように展開しているか？

エジプトへ売られたヨセフは侍従長ポティファルのものとなった。主が彼と共におられた(39:2)ので、彼はうまく事を運び、主人から信頼された。しかし、主人の妻の誘惑を断ったために、陥れられ、王の囚人をつなぐ監獄に入れられた。そこでも、主が彼と共におられ(39:21)、監守の目にかなうようにされ、獄中のことを取り仕切るように任された。

王の給仕役と料理役が過ちを犯して牢に入れられた。彼らが夢を見たので、ヨセフは「解き明かしは神がなさること」(40:8)と言って、解き明かした。そして、その通りに給仕役は復職し、料理役は処刑された。

2年後、ファラオの夢を解き明かすために、ヨセフが呼び出された。夢の解き明かしについて尋ねられたヨセフは「神がファラオの幸いについて告げられるのです」(41:16)と答えて、ファラオの夢を聞き、解き明かした。夢は「神がこれからなさろうとしていることを、ファラオにお告げになったのです」(41:25)と言って、7年間の豊作と、それに続く7年間の飢饉があることを告げ、その対策を提案した。

ファラオは感心し、「神がそういうことをみな示されたからには、お前ほど聡明で知恵のある者は、ほかにいないであろう」(41:39)と言って、

ヨセフを宮廷の責任者にした。ヨセフは、豊作の7年間に食糧を蓄えさせた。生まれた子どもに名づけるとき、「神が、わたしの苦勞と父の家のことをすべて忘れさせてくださった」、「神は、悩みの地で、わたしに子孫を増やしてくださった」と語り、主の顧みを感謝した。飢饉が始まると、エジプト人だけでなく、世界各地の人々も、ヨセフのもとに食物を買いに来た。

【KEY2 神の福音を語る】

〔STEP1〕この個所で神はご自身について何を表されたか？

主は、奴隷にされた家においても、監獄においても、ヨセフと共にいてくださり、彼のすることをうまく計らってくださった。

神は、ヨセフを通して、夢を解き明かされた。

神は、ヨセフをエジプトの支配者にすることによって、彼の苦勞・悩みに慰めを与えられた。

〔STEP2〕前後の章は、神について何と言っているか？

ユダとタマルの物語(38章)をはさんで、37章には、兄たちがヨセフにひれ伏すヨセフの夢について記されている。兄たちはヨセフを捕らえ、ヨセフは商人に売られた。

42章では兄たちがエジプトに来て食糧を求め、ヨセフにひれ伏して夢が実現される。

39～41章は、主が、ヨセフに見せた夢(すなわち主のご計画)の実現に向けて、ヨセフと共にいて導かれたことを示す。

〔STEP3〕聖書全体を通しての神の働きに、この個所はどのように関係しているか？

主は、アブラハムに、子孫を星の数のように増やし、子孫にカナンの地を与えることを約束された。7年間の飢饉において、アブラハムの子孫が絶えてしまうことが、ヨセフのエジプト派遣に

よって避けられた。そして、ヨセフに呼び寄せられるヤコブの家族は、移住したエジプトの地において星の数のように増え、やがてカナンの地に向かうことになる。

このような大きな契約の実現のために、主は、一人一人の人生に寄り添い、共にいて導きを与え、労苦への慰めを与えられる。終わりの日の完成へ向かう、キリストによる新しい契約の進展の中に生きている私たちの歩みにも、主は同じように関わられる。

【KEY3 子どもたちの信仰と生活のために語る】

〔STEP1〕 この個所に登場する当時の人々の必要は何だったか？

父の家から離され、悩みの地であるエジプトで苦労を重ねてきたヨセフには、新たな苦労を経験するたびに、主が共におられて取り計らってくださることを経験し、夢の解き明かしなどの特別な導きを通して、励ましを与えられる必要があった。

〔STEP2〕 私たちの教会の子どもたちに似たような必要があるか？

子どもたちがおかれている境遇はさまざまであるが、苦労のまったくない子はいない。その苦労は、自覚しているものではなく、子ども自身が言葉にして表すことはできない場合が多いだろう。まだ、経験してきた人生が短く、主がどのように人生に関わってくださるかを、時間的に長い視野で考えることはできないに違いない。

〔STEP3〕 この聖書箇所「その時」から、私たち

の教会の「今」へ橋をかける。

主は、ヨセフが経験した一つひとつの苦労のたびに、共にいてくださり、取り計らってくださった。私たちが苦労しているときにも、そのたびに主は私たちと共にいて、取り計らってくださるお方だ。

今の時点では、苦労ばかりが目にとまって、先を見通すことができないかもしれない。ヨセフの場合も、そうだったはずだ。しかし、彼は、神を信頼し続け、神が夢を解き明かしてくださることさえ疑わなかった。苦労はすぐにはなくならなかったが、やがて主は、ヨセフを取り立てて、エジプトで重要な働きをさせ、多くの人を飢えから救い、子どもも生まれさせて、豊かな慰めを与えられた。そして、さらなる祝福を与えようとされている。それは、アブラハムに与えられたご自身の契約を実現するものでもあった。

主は、ご自身を信頼し続ける者たちを決して見過ごしにされないお方だ。そして、ご自身の契約に忠実であられるお方でもある。私たちは、キリストが再び来られるときに実現する、恵みの契約の完成、「もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない」終わりの日の恵みに向かって歩んでいる。ヨセフのように、そこに至るまで、多くの苦労を経験することだろう。しかし、主は、常に共にいて取り計らってくださり、ご自身の契約の実現に向けて、すばらしい計画を進展させてくださる。

(大西良嗣)



テキスト 創世記 37章12～36節
子どもカテキズム 問11, 13, 14

〔単元のねらい〕

ヨセフの物語の理解に、10月から取り上げられているアブラハム契約（創世記12:1～9、15:1～21、22:16～18）からの視点を欠かすことができない。主がその実現に向けて働かれる様子を知ることができる豊かな物語である。この契約は、シナイ契約、ダビデ契約へと受け継がれて発展し、やがて新しい契約としてキリストにおいて豊かにその姿を現わす。私たちは、この新しい契約の時代を、契約の民（神の王国の民）として生きている。キリストが再び来られる時に完成される神の国は、この契約の完成でもある。主は、この契約の実現に向けたご自身のお働きの中で、私たちと共にいて取り計らい、私たちを用い、ご自身の計画を進展させてくださる。

つらいときこそ、主がいっしょにいてくださる

先週は、ヨセフが商人に売られてしまったお話を聞きましたね。お兄さんたちの悪だくみで、ヨセフはたいへんな運命をたどることになってしまいました。けれども、実は、ここにも神様のご計画がありました。

商人に売られたヨセフは、エジプトに連れて来られました。「こいつは、よく働きそうだな」と思ったのかもしれませんが、ヨセフを買ったのは、ポティファルという王様に仕える働きをしている人でした。ヨセフは、物のように買われて、ポティファルのものになったのですね。

ヨセフは、お父さんの家に帰れなくなって、とても寂しかったと思います。けれども、神様が、ヨセフと一緒にいてくださいました。ですから、ポティファルの家で、とてもよく働くことができました。ポティファルもヨセフのことをとても信頼して、自分の食べる物以外、家のことはすべてヨセフに任せてしまうほどでした。神様は、苦勞している私たちと、そんなふうと一緒にいてくださる方なのですね。

けれども、問題が起きました。ポティファルの奥さんが、かっこいいヨセフを気に入ってしまいました。それだけなら良いのですが、ポティファルのいないところで、自分のベッドに入るように誘いました。ヨセフは、いつも断っていました、

ある時、家に他の人がいなかったのも、ポティファルの奥さんは、ヨセフの服をつかんで、無理やり誘いました。ヨセフは、服を奥さんの手に残して逃げました。怒った奥さんは、ポティファルに、「ヨセフが私にいたずらをしようとしました。この服が証拠です！」と嘘をついたのです。ポティファルは怒って、ヨセフを牢屋に入れてしまいました。

何も悪いことはしていなかったのに、牢屋に入れられてしまったヨセフは、とても悔しかったことでしょう。けれども、ここでも、神様が一緒にいて、導いてくださいました。監守長がヨセフのことをとても信頼して、ヨセフにいろいろな仕事をすっきり任せてしまうほどになりました。

ある時、エジプトの王様ファラオのテーブルで料理を出す給仕役と、王様の料理を作る料理役が、何か失敗をして、牢屋に入れられてきました。ある朝、ヨセフが二人のところへ行くと、どうも二人とも考え込んでいる様子です。二人とも、不思議な夢を見たのですが、何か意味がありそうなのだけれど、それを教えてくれる人がいないので、悩んでいたのです。

ヨセフは、「夢の解き明かしは、神様がしてくださいます」と言って、夢の話をしてもらいました。ヨセフは、自分には力がなくても、神様には力があることを信じていたのです。給仕役の見た

夢は、三日後にファラオが給仕役をもとの仕事に戻すという意味でした。料理役を見た夢は、三日後にファラオが料理役を木にかけて処刑するという意味でした。三日後、ヨセフが言ったとおり、給仕役は元の仕事に戻され、料理役は木にかけられて処刑されました。

ヨセフは、給仕役に、元の仕事に戻ることができたら、「わたしのことを思い出してください。私は何も悪いことをしていないので、牢屋から出られるようにしてください」とお願いしていました。けれども給仕役はそのことを忘れてしまいました。

2年経ったとき、ファラオが夢を見ました。ナイル川から7頭のよく太った牛が上がってきて草を食べていると、後から7頭のやせ細った牛が上がって来て、よく太った牛を食べつくしてしまいました。ファラオはもう一つの夢も見ました。7つのよく実った穂が1本の茎から出ていました。後から7つの干からびた穂が出てきて、よく実った穂を呑み込んでしまいました。

ファラオは、ひどく胸騒ぎがして、特別な夢に違いないと思い、エジプト中の魔術師や賢者に夢の意味を尋ねましたが、誰もわかりませんでした。

そのとき、給仕役が、ヨセフのことを思い出して、ファラオに知らせました。ファラオはヨセフを呼び出し、夢の意味を尋ねました。ヨセフは「夢を解き明かすのは私ではありません。神様が教えてくださいます」と言って、ファラオの夢を聞きました。もし、解き明かせなかったらファラオを怒らせてしまうかもしれません。けれども、ヨセフは神様の力を信賴していたのです。そうして、ファラオの夢を解き明かしました。

「2つの夢の意味はどちらも同じです。これから7年間エジプトには豊作があり、たくさんの食物が実ります。しかし、次の7年間は飢饉で、食物がなくなり、豊作があったことなど忘れてしまうほどになります。ですから、知恵のある人を見つけて、エジプトの国を治めさせてください。そして、豊作の7年の間にできるだけ食べ物を蓄えておけば、飢饉の7年間に皆が飢え死にしないで

済むでしょう」。

ファラオと家来たちは、ヨセフが話すことに感心しました。ファラオはヨセフに「神様があなたにそういうことを教えられたのだから、あなたほど知恵のある者は他にいない。あなたを、この国でわたしの次に偉い者にする」。と言って、ヨセフを、エジプト全国を治める者にしました。

ヨセフは、結婚もして、子どももできました。「神様が、これまでの私の苦労や、お父さんの家を離れなければならなかった悲しみを忘れさせてくださった」と言って、神様に感謝をしました。

ヨセフは、最初の7年間の豊作の間に、エジプト中で食物を集め、それぞれの町でも蓄えさせました。飢饉の7年間が始まって、最初はそれぞれの町で蓄えた物がありました。しかし、それがなくなると、皆、ヨセフのところにやってきて、食べ物を買いました。飢饉は周りの国でも起こっていたので、外国の人たちもエジプトに食べ物を買いに来ました。

もし、ヨセフがファラオの夢を解き明かさず、食べ物を蓄えていなかったら、食べ物が無くてたくさんの人が死んでしまったはず。神様には多くの人の命を守るご計画があって、ヨセフをエジプトに送り、いつも一緒にいて導かれたのです。実は、このことは、後でヨセフのお父さんの家族の命を助けることにもなります。神様のご計画というのは、本当にすばらしいですね。

ヨセフは、エジプトで、とても苦労をしました。けれども、神様はいつも一緒にいてくださいました。神様は、神様を信賴し続ける人を決して見過ごしにはされないお方です。神様のすばらしい計画は、まだ続いています。それは、イエス様が完成してくださるすばらしい計画です。主は、ヨセフと同じように、私たちのことを、ご自身の計画のために用いてくださいます。そのために、私たちが苦労することもきっとあるでしょう。それでも、私たちと一緒にいて、ご自身のすばらしい計画を実行してくださる主を信賴して歩んで参りましょう。

(大西良嗣)

[今週の暗唱聖句] 創世記 39章2節

主がヨセフと共におられたので、彼はうまく事を運んだ。

〈ねらい〉

エジプトに売られたヨセフが奴隷、囚人の身分から大臣となるまでの出来事を振り返って、神様の不思議な導きと大きな祝福を知る。

〈展開例〉**★読んでみよう**

聖書箇所が広範囲にわたっているので、礼拝で朗読されなかった箇所などを子どもたちで読んでもらい、さらに理解を深める。

それぞれが（人数が多ければ4グループに分かれて）40章ならナレーター・ヨセフ・給仕役の長・料理役の長、41章ならナレーター・ファラオ・ヨセフ・給仕役の長の役になって音読する。朗読劇のように、声色を使ったり、身振りをつけてみても良い。読んでみて気づいた登場人物の気持ちや、状況の変化などを話し合う。

★話し合いのポイント

- ①39章、40章、41章それぞれの登場人物は誰と誰ですか？

②起きた出来事は何でしたか？

③ヨセフの気持ちはどうだったでしょうか？

→ポティファルとその妻、給仕役の長と料理役の長、ファラオなどとヨセフの関わりについて、質問しながら整理する。奴隷に売られた後も続いたヨセフの過酷な試練と、その中でも神様から与えられていた恵みがあったことを具体的に知る。ヨセフが苦しみや悲しみの中でも希望を捨てず、神様からいただいた賜物を生かして救われる時を待っていたこと、神様が思いもかけない方法でヨセフを救い、豊かに祝福してくださったことに気付く。

〈祈り〉

天の父なる神様、今日も教会に来ることができてありがとうございます。

神様がすべてを支配し、良く導いてくださることを信じて歩むことが出来るようにしてください。

イエス様のお名前によって祈ります。アーメン。

対話の手掛かりとして……

①今回のテキストは非常に長いので、ここでは、創世記39章に絞って記すことにします。この章の主題は、「主は共におられる」ということです。「主が共におられたので、彼はうまく事を運んだ」と2節にあります。3節、21節、23節でも、「主が（ヨセフと）共におられ」とあります。遠い国に奴隷として売り飛ばされたヨセフにとって、明るい将来などあるはずがないと普通なら考えてしまいます。また、7節以下には、身に覚えのない罪を着せられてしまうヨセフの様子が記されています。事態が悪くなるどころか、不幸な出来事が次々に彼を襲うのです。ヨセフは親や兄弟からも、故郷からも、仕事からも引き離された悲惨な状況の中にありました。しかしなおそこで生きることができたのは、「主が共におられた」からです。主が共におられたがゆえに、うまく事を運ぶことができました。それはヨセフ自身ではなく、神様御自身が事をうまく運んでくださったのです。

②私たちもヨセフとまったく同じ境遇に生きているわけではないかもしれませんが、母の胎を出たばかりの幼子のように、裸で何も自分の力では生きていくことができないほどに、無力さを感じる場合があります。その時に、何が私たちを支えるのでしょうか。聖書は、神様があなたと共にいてくださるということに尽きる。それゆえに、「あなたは生きるのだ」と言うのです。また、救い主イエス・キリストは、「インマヌエル」と呼ばれます。「神は我々と共にいる」という意味です（マタイ1:23）。神なしに、キリストなしに、生きていくことはできないのだと、聖書は語るのです。

③神が共にいてくださったヨセフですが、彼の人生を見ていくと、必ずしも、いいことばかりが

たくさん起こったわけではなかったと思います。数多くの苦しみを、痛みを、また悲しみを経験しました。でも最後には、すべてが神様の御計画であることが分かったのです。色んな辛いことがあっても、最後に笑うことができれば、確かに幸せかもしれません。しかし、聖書は、ヨセフ物語を通して、「終わりよければすべて良し」という単純なことを言いたいのでしょうか。あるいは、神と共にある人生は、最後のゴールだけが幸せなのだ。それまで忍耐しようということと言いたいのでしょうか。もしそうだとすると、ゴールに向かうまでの辛い道のりは、不幸な歩みでしかないのでしょうか。

④いいえ、そうではありません。ヨセフの人生には、いくつもの非劇が襲いかかりました。しかし、人間から見て不幸としか言いようのない出来事の中には、神様はおられなかったかという、決してそうではないのです。もしおられないのならば、私たちが人生において経験する苦しみは、まったく意味を持ちません。失敗も、罪も、病も、死も、ただ空しいだけではないのでしょうか。でも神様は空しい人生を与えるために、私たちに命を与えたのではありません。神様の恵みは、嬉しい時も、悲しい時も、どのようなところにも及ぶほどに豊かな恵みなのです。災いと思えないようなところにおいても、神様は共にいて、慰め、励ましてくださるお方です（詩編23:4）。「神はわたしと共におられる」という信仰があるからこそ、苦難の中においても、耐える力、諦めない力が与えられるのではないのでしょうか。ヨセフは、どのような時も、神が共におられることを信じていました。それゆえに、この苦しみの中にも、必ず神様の御心がある、必ず意味があるということ、最後まで信じることができたのです。そういう人の人生は、本当に幸いです。

〈救済史カリキュラムの文脈〉

改革派信仰を育てるための救済史カリキュラムは、10月5日から創世記の主要部分である「族長物語」を扱ってきました。神が族長アブラハムを召し出し、「あなたを祝福する」と宣言された恵みの契約こそ、聖書全体を一本の糸で編んでゆく神学的な枠組みです。神がご自分の契約を御心のままに履行していかれる歴史の中で、祝福は人間の想定を超えた道筋をたどりながら、アブラハムから子イサク、孫ヤコブへと受け継がれます。この選ばれた一家に対する神の祝福は、その血縁共同体に留まるものではありません。「アブラハム（とその子孫）を祝福する者を、わたしは祝福する」とも宣言された同じ契約によって、血筋を超えた契約共同体・信仰共同体へと拡大することになるのです。そのきっかけとなったのが「ヤコブの子ヨセフ」という人物をめぐる出来事でした。異母兄弟から疎まれ奴隸として売られたヨセフ（10月26日）、主が共にいてくださったエジプトの地で最善を尽くし奴隸から大臣へと引き上げられたヨセフ（11月2日）。この人物の言動を通して、神が語られ、また行われます。そこで、創世記全体をしめくくるヨセフの信仰が告白され、出エジプト記そして聖書全体を読み解く神学が示されます。

〈取り組む単元の主題と目標〉

今回の単元は、創世記45章と50章を説教テキストに指定します。ファラオの信任のもとエジプト大臣として食糧政策に成功したヨセフは、カナンから食糧を調達に来た異母兄弟を発見します。忘れかけていた悲しみと憎しみを想起させられ、しばらく身の上を隠していたものの、押さえきれずにそれを明かすヨセフ（45章）。カナンから呼び寄せた父ヤコブを看取り、葬儀を行い、異母兄弟に平安を告げ、子孫に遺言を残すヨセフ（50章）。物語の焦点となるのが、ヨセフの信仰告白（50章20節）です。教案は、これを暗唱聖句に指定し、単元の主題「悪を善に造りかえる主」を掲げます。

悪を善に「変える」ではなく「造りかえる」と表現したところに、黙想の課題がありそうです。「いかなる悪さえ、神の善へと変える主を信じ、歴史形成の主体者として生きよう」と設定された単元の目標が、黙想の道筋を示していると思います。ヨセフを「歴史形成の主体者」と見て、その姿に教会学校生徒が倣うべき生き方を見させようとする意図があるようです。

〈創世記50章20節をめぐる黙想〉

創世記は主要人物ヨセフに、主なる神の導きを言及させる（45章5～8節、50章20節）。ヨセフ物語は一つの実際にまとまりをもった物語、それも知恵文学的な教訓物語と言える。一義的に完結した主題は明らかに「導き」である。神はすべてを良い方に変わらせたもう。神は全く隠れた所で、暗い人間性のすべてを、ご計画の遂行のために、すなわち「多くの命を救うために」善きに計られる。この導きは、一般的な神の摂理の流出ではなく、神がイスラエルの族長たちに与えた特別な救済意志の一部であった（50章24節）。

同時にヨセフ物語は、登場人物が苦難を経てどのように浄化されるかを描く。救いを与える主なる神の導きに感化されて、ヨセフは異母兄弟たちを赦すのである。物語は、主なる神の行動を深い隠微性の中へと移す。人間の悪い行為と神の良き行為とは分かちがたく混じり合っている。ここに主なる神の歴史支配への根源的信仰が表明されている。神が救済計画の特別な道具として選んだヨセフに対して、異母兄弟が反抗したところに、旧約における救済の出来事（新約へとつながる恵みのご支配）を見るのである。

鍵の言葉は、ヨセフの信仰告白「あなたがたはわたしに悪をたくらみましたが、神はそれを善に変え、多くの民の命を救うために、今日のようにしてくださったのです」（50章20節）。これは、神が人間の悪を善に変えるという規則があるかのような、一般的宗教的真理を示しているのではな

い。むしろ、単に全く特定の出来事の連関を神から解釈しようとした結果である。そして同時に、何かが成就した事実を回顧する。その何かは未来に向かって、救済史的場を越えて進む。鍵の言葉は、ヨセフと異母兄弟の葛藤の中で意味すること以上のことを含む。この言葉がそれにふさわしい最終の成就に至る記事を、旧約に見出すことはできない。鍵の言葉の真の意味での最期的・神学的な射程は、新約において明らかとなる。

信仰は、神の自由に多くの予測不可能な事柄を認容しなければならない、という事実を知っている。多くの偶然と思える出来事が、賢者たちの意見によれば、説明を免れていたのではない。教訓的なヨセフ物語は、読者に何と不思議な仕方で、ある犯行が何年にもわたってずっと、そのことをした人間たちの背後から迫って行き、ついには彼らに追いつくことになるかを、詳細に呈示している。ヨセフにあのような大きな不安をもたらした異母兄弟たちは、ついにヨセフの前で不安におのかねばならないのである。このことを彼らは、事実関係がまだ実際に明らかでないうちから認識した（42章21～22節）。物語の意図は、罪と苦しみとの対応関係を見せ付けるという点に尽きるものではない。精錬浄化の思想も存在するからである。異母兄弟の苦しみは、ヨセフから出ていて、ヨセフは彼らを非常に巧妙なやり方で策略にかけ、彼らがまたもや一人の兄弟を裏切ろうと思えばそれが可能な状況の中に投げ込む。そこで異母兄弟たちの真実が示されるのである。

この出来事全体の中で最も重要なことは、あらゆる災いや事態の紛糾の中において、実に驚くべき仕方です。神の救いをもたらす計画が働いている、という点にある。人間によって悪が企まれたが、神はそれを御自分の善に計らわれた（50章20節参照）。神は至る所でその御手を働かせておられるばかりでなく、悪の中にさえ救いの業を行われ、ご自身の目標へと至らせるのである。

（ラート『旧約聖書神学』1962年参照）

〈説教者が語り次ぐべき歴史的改革派教理〉

神の摂理の教理が我々に益となるためには、どのような目標に向けられるべきか。特に、逆境に

遭った時は直ちに心を神に向けて高め、御手が我々の魂を忍耐と晴朗な思いに整えたもうことに深く感銘を受くべきである。もしヨセフが兄弟たちの不信を思い続けたならば、彼らを兄弟として受け入れることは決してできなかった。しかし彼は、そこで心を主に向け直したので、害を受けたことを忘れ、穏和と寛容に傾き、進んで彼らを慰めた（創世記45章7,8節,50章20節）のである。

（カルヴァン『キリスト教綱要』1559年より）

神は罪の原作者ではないが、どの程度まで人を頑なにされるのか。神は正しい審判者にして復讐者であり、人間の悪を禁止しようと思えば禁止できるが、ご自身の正しい裁きに従ってそのようになさることを控え、悪を許容されることがある。ヨセフの兄弟たちの罪の場合であれば、神が人間の悪を用いて善に変えるためである。

（『第二スイス信仰告白』1566年より）

神の全能の力と計り知れない知恵、限りない慈しみは、神の摂理の中に非常によく現れるので、神の摂理は、天使および人間の、最初の墮落と他のすべての罪にまで及んでいる。しかもそれは、単なる許容によるのではなく、許容すると同時に神が罪を、ご自身の清い目的に役立つように、種々の方法で、最も賢く、力強く制限し、さもなければ、秩序づけ、統治することによる。

（『ウエストミンスター信仰告白』1647年より）

〈歴史形成の主体者は誰か〉

ヨセフの人生を初めから終わりまで支配された神こそ、イスラエルを救済するために歴史を形成したもう主です。苦難を経て栄光に至る道を歩んだ僕ヨセフは、主が共にいてくださる恵みの中で御心を悟り、信じ、行いました。異母兄弟の罪を赦し、アブラハムの子孫が再び約束の地へ上る道を指し示しました。涙とともに清められて（創世記45章14節、46章29節、50章1節・17節）、神の歴史形成の業に参加したのです。

教会学校の生徒も、キリストに結ばれた神の子供として、互いに赦しあうなら、平和を造りだす主の歴史形成の業に参加する者となるでしょう。

（二宮 創）

テキスト 創世記 50章15～21節
子どもカテキズム 問13

〔単元のねらい〕

「いかなる悪さえ、神の善へと変える主を信じ、歴史形成の主体者として生きよう」。この単元目標に生徒たちを動機づけるため、ヨセフの涙に注目しましょう。涙とともに清められて、神の救いの歴史形成の業に参加させられた彼だからこそ、「人の悪を善に計らいたもう神」を賛美することができました。以下の展開例は、児童説教の見本ではなく、同労諸兄姉の説教奉仕のために素材を提供するものです。

涙とともに清められて

「ヨセフは涙を流した」（創世記50章17節）。この人の人生は、涙なくして語れないものでした。愛する父ヤコブの葬儀を終えたこの時、息子ヨセフの流した涙には、いったいどんな思いが込められていたのでしょうか。そして、彼が涙ながらに異母兄弟たちに語った言葉には、どんな信仰が表明されていたのでしょうか。ヨセフの涙の半生を、一緒に辿ってみましょう。

「ヨセフは、弟ベニヤミンの首を抱いて泣いた。ベニヤミンもヨセフの首を抱いて泣いた。ヨセフは兄弟たち皆に口づけし、彼らを抱いて泣いた」（創世記45章14,15節）。この時のヨセフの涙は「再会の涙」です。同じ母ラケルから生まれたただひとりの弟ベニヤミンとの再会の涙。そしてかつてヨセフを疎んじて奴隷として売り飛ばした異母兄弟たちとの再会の涙です。

恐らく、39歳（創世記41章46,47節・53,54節、45章6節・11節）になっていたヨセフにとっては、実に22年ぶり（創世記37章2節）の再会でした。ヨセフと異母兄弟の隔たりは、年月の隔たりのほか、エジプトとカナンという地域の隔たり、エジプト大臣とヘブライ農民という身分の隔たりがありました。二重三重の隔たりの原因となったのが、ヨセフと異母兄弟との間の憎しみと敵意でありました。決して忘れることができない兄たちへの敵意に燃え、憎しみに苛まれながら、ヨセフは幾つもの試練を経る中で、どれほど多くの「悔し涙」を流してきたことでしょう。

早魃被害に遭い食糧調達のためエジプトに来た異母兄弟を見ても、ヨセフは自分が弟であることを隠します。彼らとの押し問答の最中、彼は「遠ざかって泣いた」（創世記42章24節）のですが、それは父ヤコブと実の弟ベニヤミンの存命を知った喜びと、兄たちへのわだかまりとが「ないませの涙」でした。策略を巡らし、兄たちに弟ベニヤミンを連れて来させたヨセフでしたが、さすがに「弟なつかしさに胸が熱くなり、涙がこぼれそうになった」（創世記43章30節）のは、封印してきた「望郷の涙」がこみ上げたからです。こうしてヨセフは、兄たちへの憎しみを越えることができ、敵意を捨て去ることができました。彼を売った張本人である兄ユダが弟ベニヤミンを庇う姿を見て赦すことができたのです。実はそうなるようにと神によって導かれたからです。

ついに再会は実現します。エジプト大臣ヨセフは、自分がヘブライ人であり、同じ父ヤコブの息子であることを、声を上げて泣き、表明します。「わたしはヨセフです。お父さんはまだ生きておられますか。わたしはあなたたちがエジプトへ売った弟のヨセフです。しかし今は、わたしをここへ売ったことを悔やんだり、責め合ったりする必要はありません。命を救うために、神がわたしをあなたたちより先にお遣わしになったのです。この二年の間、世界中に飢饉が襲っていますが、まだこれから五年間は、耕すことも収穫もないでしょう。神がわたしをあなたたちより先にお遣わしになっ

たのは、この国にあなたたちの残りの者を与え、あなたたちを生き永らえさせて、大いなる救いに至らせるためです。わたしをここへ遣わしたのは、あなたたちではなく神です。神がわたしをファラオの顧問、宮廷全体の主、エジプト全土を治める者としてくださったのです。急いで父上のもとへ帰って、伝えてください。息子のヨセフがこう言っています。ためらわず、わたしのところへおいでください。」(創世記45章3～9節)。

「再会の涙」は、年月の隔たりを越えて互いに生きていることを確かめあえた「安堵の涙」です。地域の隔たりを越えて家族が再び一緒に暮らすことができる「希望の涙」です。身分の隔たりを越えて強い者が弱い者を慈しむ「憐憫の涙」です。何よりも憎しみを越え、敵意を捨てて赦すことができた「喜びの涙」です。神の救いの計画を悟り伝えることができた「感謝の涙」です。さまざまな感情に色づけされた涙とともに、ヨセフの心は清められました。こうして彼は、ヤコブの家とイスラエルの民を救う神の歴史形成の業に参加する者とされるのです。

「ヨセフは車を用意させると、父イスラエルに会いにゴシェンへやって来た。ヨセフは父を見るやいなや、父の首に抱きつき、その首にすがったまましばらく泣き続けた」(創世記46章29節)。カナンからエジプトに下った父ヤコブの年齢は130歳(創世記47章9節)でした。22年もの間父の安否を気にかけながらも、悩みの地で自分の苦勞と父の家を忘れようとした「謝罪の涙」。これからは近くで暮らししてお支えしたいという「決意の涙」です。涙で始まった親孝行の期間は、その後17年間(創世記47章28節)でした。

「ヤコブは、息子たちに命じ終えると、寝床の上に足をそろえ、息を引き取り、先祖の列に加えられた。ヨセフは父の顔に付して泣き、口づけした」(創世記49章33節～50章1節)。「わたしはもう死んでもよい、お前がまだ生きていて、お前の顔を見ることができたのだから」(創世記46章30

節)と言った父への「追悼の涙」。「わたしの生涯の年月は短く、苦しみ多く、わたしの先祖たちの生涯や旅路の年月には及ばない」(創世記47章9節)と語った父への「同情の涙」。「どうかわたしをこのエジプトには葬らないで、先祖たちの墓に葬ってほしい」(創世記47章29,30節)と願った父への「宣誓の涙」。このように幾重にも味つけされた涙によって、ヨセフの魂は清められ、神の摂理への信頼は高められ、救いのための歴史形成の業への服従を深めることになるのです。

父ヤコブの葬儀を終えたヨセフのもとに、兄たちが集まります。「ヨセフが仕返しするのではないか」(創世記50章15節)という不安に苛まれたからです。しかしヨセフははっきりと語ります。「恐れることはありません。わたしが神に代わることができましょうか。あなたがたはわたしに悪をたくらみましたが、神はそれを善に変え、多くの民の命を救うために、今日のようにしてくださったのです」(創世記50章19,20節)。

この時ヨセフの流した涙には、どんな思いが込められていたのでしょうか。彼が涙ながらに異母兄弟たちに語った言葉には、どんな信仰が表明されていたのでしょうか。それは、人の思いを越えた神の御心、人の悪しき企てを越えた神の善き計らい、すなわち摂理への信頼が表明されたのです。そうすることで、ヨセフはもはや異母兄弟の罪を問わない「赦しの涙」を流したのです。

神は御子にあって愛する者たちを、救いの計画に沿ってお召しになります。悔し涙、わだかまりの涙、望郷の涙、再会の涙、安堵の涙、希望の涙、憐憫の涙、喜びの涙、感謝の涙、謝罪の涙、決意の涙、追悼の涙、同情の涙、宣誓の涙、赦しの涙。幾重にも味つけされた涙によって、神はしもべを清めて、歴史形成の業にお用いになります。人の悪しき企てさえも、ご自分の善き計らいに変えてくださるのです。教会学校の生徒も、ヨセフに似た者となるよう召され、涙によって清められて、赦しと和解の業に参加するのです。(二宮 創)

[今週の暗唱聖句] ローマの信徒への手紙 8章28節

神を愛する者たち、つまり、ご計画に従って召された者たちには、
万事が益となるように共に働くということを、私たちは知っています。

〈ねらい〉

神は人の悪や頑なさをも用いてよき業をされるだけではなく和解をもたらされることを当該箇所全体から発見することで確認する（教師の方は37～50章を事前に読んでください。以前の授業で作業を行っていたものを活用することもできます）。

〈展開例〉

1. ずるいことをした人をどう思いますか？

世の中には、小さなことから大きなことまで、良いこと、キチンとしたことをする人がいます。一方で、悪いこと、ずるいことをする人、ルールを守らない人もいます。でも、何でそうなるのでしょうか。ヨセフさんのお兄さんたちは、ヨセフさんに何をしましたか？先生と一緒に創世記の中のどこにどのように書いてあるのか探してみましょう（ヒント37章より後ろ）。

- ・お兄さんたちはヨセフさんが気に入らなかったようです。それはなぜですか？
- ・お兄さんたちはヨセフさんに意地悪をしました。それは、ヨセフさんがお兄さんたちにとって当たり前だと思っていたルールから外れていたからではないでしょうか？お兄さんたちの立場からその理由を説明してください。
- ・あなたは、自分（たち）のルールとは違うことをしようとする人をどうしたいと思いますか？
- ・神様は、お兄さんたちのしたことについて、どのようにされましたか？無理にとめようとはしましたか？その心に働きかけられたのではないですか？（ヒント、37章21節以下ルベンの言葉）

2. 神様は公平な方ですか？

- ・ヨセフさんは、奴隷にされたときにどのよう

に神様から助けていただきましたか？（39章）

- ・ヨセフさんのすること、言うことは、どのようになりましたか？それはなぜですか？（40～41章）
- ・神様がヨセフさんにしてくださったことについて、ヨセフさんはどのように言っていますか？聖書の言葉から探し出しましょう。（45章）
- ・神様はお父さんやお兄さんたちを、どのようにされましたか？ヨセフさんの前でへりくだるようになったのではないですか？
- ・全体から見て神様はヨセフさんの見た夢をその通りに実現されましたか？

3. 神様によって仲直りしましょう。

- ・ヨセフさんはお兄さんたちを、すぐにゆるすことが出来ましたか？（42～43章）
- ・お兄さんたちは、エジプトで出会ったヨセフさんについて最初は、どのように思っていましたか？（42～43章）また、お父さんであるヤコブさんが死んでしまった後はどうでしたか？（50章）
- ・ヨセフさんは、お兄さんたちにたいして、どのように自分の気持ちを伝えましたか？（45, 50章）
- ・ヨセフさんがお兄さんたちをゆるすことが出来たのはなぜですか？その理由を語っているところを探してください（45, 50章）。

〈いのり〉

神様は私たちには分らないようなご計画をもって、世界を公平に治めておられます。わたしたちが、考え方の違う人を受け入れ、神様に信頼し地上で平和をつくれるように祈りましょう。

対話の手掛かりとして……

- ① 高校生の時だったと思います。既にその時、私は信仰告白をしていたのですが、本当に自分が救われているのだろうか。そのことにあまり自信はありませんでした。なぜかと言うと、主イエスの救いにあずかっていることを信じながら、その恵みの中を生き抜くことができない自分の愚かさ気付かされることが多々あったからです。イエス・キリストの救いは確かに信じているにもかかわらず、その恵みの中を生きる自分はとても不安定なのです。
- ② ヨセフの兄たちの心の中にあった不安もそれと少し似ているところがあるのではないのでしょうか。自分たちは、本当に赦されているのだろうか？ ヨセフは、「赦す」と言っていたけれども、それは父ヤコブの手前そう言っただけであって、父が死んだ今、私たちに復讐するのではないだろうか？ それほどひどいことを自分たちは弟ヨセフにしたのだから。兄たちは、ヨセフの赦しを、最後まで信じることができませんでした。それは、兄たちの目に、「赦し」よりも、「罪」の方が遥かに大きく見えたからなのだと思います。誰かの罪を赦すということは、非常に難しいことです。主イエスの弟子であったペトロは、こんな質問をしたことがありました。「主よ、兄弟がわたしに対して罪を犯したなら、何回赦すべきでしょうか。七回までですか。」(マタイ18:21) 一回でさえ、誰かの罪を赦すことは難しいことです。七回も赦すということは、人間の常識を遥かに超えています。その人間の常識から見たときに、また自分たちが犯した罪の大きさから見たときに、到底、赦してもらえないはずがないと思ったのです。
- ③ ヨセフは、赦しを乞う兄たちの言葉を聞き、「涙を流した」とあります。なぜでしょう。兄たち

が、ヨセフの赦しを疑っていたからでしょうか。そうかもしれません。しかし、ヨセフは「なぜ私の赦しを受け入れないのか」と激怒しているわけではないのです。「恐れることはありません」と、罪の不安に怯える兄たちを優しく慰めるのです。取り返しのつかないことをしてしまったことに気付かされる時、恐れに支配されます。愛と赦しの言葉を、恐れ心が完全にシャットアウトしてしまうのです。だからヨセフは言います。恐れることはない。そして続けてこう言います。「わたしが神に代わることができましようか。」自分を深く傷つけた相手に対して、私たちはこういう言葉をなかなか口にできません。でもヨセフは知っていました。罪を裁くことができるお方は神様ただおひとりであるということ。

- ④ そして、その神様が自分の人生において何をしてくださったかをヨセフは知っていたのです。ヨセフの人生はこれまで見てきたように、順風満帆な人生を歩んできたわけではありませんでした。なぜ自分はこんな酷い目に遭わないといけないのだと思ったこともあるでしょう。こんな辛い目に合わせた者は誰かと考えた時に、真っ先に兄たちの姿が心の中に見えたこともあったのかもしれませんが。兄たちの悪い企みにヨセフの人生はめちゃくちゃになりました。しかし、今日の私があるのは、ただ神の恵みによることをヨセフは知ったのです。それは単に「終わりよければ良し」とか「結果オーライ」ということではありません。自分の人生を支配していたと思っていた悪と罪を、善に変えてくださった方がおられたということです。神様の善は、人間の悪よりも遥かに勝って大きいのです。悪を善に変えるほどの力があるのです。その神様の御業が自分にも、また兄たちにも及んでいることを知った時、涙がこぼれ落ちたのです。

テキスト
参照教理問答

出エジプト記 2章1～10節、3章1～15節
子どもカテキズム 問34, 65

次主日と合わせて一つの黙想として記します。「巨大なテキスト」に対して、今回は特に黙想と説教が分断し、お詫び致します。説教例そのものも黙想の糧としていただければ幸いです。

〈聖書物語を語る光栄な責任〉

私たちは今、救済史カリキュラムを採用して子どもたちに信仰の恵み、神の御業を説こうと試んでいます。聖書は、神が神の民を通してなされた救いの歴史を叙述します。それは常に、物語として著されます。聖書の物語は、現実のただ中に神の介入（救い）が直接また間接に示され、地上の平凡な現実は、神の救いの現実へと大転換され、民と世界は変えられ聖書独自の世界が出現します。しかも、聖書の救いの物語の醍醐味、ダイナミズムは、この神の救いの物語が私たちの「外」、つまり「過去の歴史」で終わらないというところにあります。神の救いの歴史・物語は、私たちをもその「中」に招き入れ、私たちもまた神の救いの物語の構成者の一人とされるのです。さらには、その物語の語り手として召されます。こうして私たちには、この上なく光栄で、喜ばしい「説明責任」が与えられ、その場（礼拝と日常生活）も与えられているわけです。

ひとりの信仰の教師として、与えられたテキストから救いの物語を生き生きと語る、よき語り手になりたいと思います。その意味で、信徒である教師の皆さまが、任職された教師である説教者より豊かに神の救いの出来事を物語る事例が起きます。よい語り手は、説教において、子どもたちの心のキャンバスに人物や出来事をいきいきと描き出していかれます。そうなりたいと心から願います。したがって「技術」を磨く必要があります。ただし、蛇足ながら、黙想の深い準備なしに「聖」書の物語の語り手としては、成り立たないことも確認しておきたいと思います。

〈旧約のチャンピオン：モーセ〉

アブラハムは信仰の父であり私たち契約の民の祖であり、決定的に重要な存在です。しかし、それ以上の重さを持つ人と言え、モーセの右に出る者はいません。モーセこそ、旧約の言わばチャンピオンです。ユダヤ教においてもまた私たちの伝統からも、律法の書としての最初の五つの書を「モーセ五書」と呼びます。主イエスご自身も、その伝統を継承して旧約（聖書）のことをモーセの書と呼ばれました。また、ユダヤ人は「モーセの弟子」（ヨハネ9:28）であるとの自負、誇りに生きていました。第一に、彼にこそ神の御言葉が与えられ、十戒が示されたからです。何より、彼を通してイスラエルの民はエジプトでの奴隷生活から解放されたからです。この出エジプトこそが、旧約における神の救いの原点、原型、また頂点となりました。イスラエルは、この救いを記憶し、祝い、物語ることによって契約の民のアイデンティティを保ち、深めることができたのです。そしてこの過ぎ越しの祝いこそ、まさに主イエス・キリストの十字架の救いのモデルであり、聖餐の礼典の原型に他なりません。

〈生い立ち〉

エジプトの宰相となったヨセフによってエジプトで飢饉をしのぐこととなったヤコブの家族は、その数百年の後、男性だけでも60万人を擁し、エジプトの中でもあなどれないほどの勢力になっていました。そこでエジプト王ラメセス二世（在位 BC1279～1213。1447年、アメンホテプ二世説もあり）は、彼らを強制労働に従事させます。さらに、イスラエルの男の赤ちゃんを助産婦に命じて殺させようとし、ついには男の赤ちゃんをナイル川に放り込んで殺すことを命じます。モーセも又、ナイル川に流されます。ところがファラオの娘が拾い上げます。モーセの名は、「引き上げた（マーシャー）」（拾った）という体験に由来して

いるのです。イスラエルは契約の民、選びの民ですが、根本的な事実は、ただ神の自由な憐れみによって拾い上げられた者でしかないということが、ここに示されています。神の選びの民である私どもの原点でもあります。

〈「神」との出会い〉

モーセは、王宮で王子として育てられ成人します。しかしある日、同胞が重労働を課せられているのを見て、耐えられなくなり、エジプト人を殺してしまいます。彼は、発覚を恐れて逃げ出します。しかし主の不思議な摂理の中で、ミディアン地でツィボラと結婚し、まことに平凡な家庭生活を営む者となります。

日々の暮らしの中で、彼は、どのような生活を送っていたのでしょうか。自分の同胞の苦しみを忘れてしまっていたのでしょうか。しかし神の時が来ます。羊飼いとしてみれば群れを追っていたとき「たまたま」ホレブの山まで昇って行きました。しかしそれこそ摂理でした。彼は、燃える雑木を目撃します。その炎の中に天使が現れます。彼は、吸い込まれるようにその柴の前に立ちます。神は、「わたしはあなたの父の神である。アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」と御声を掛けられました。これは、神の自己紹介です。それは、選びの民と契約を交わした神としての自己理解に基づくものです。ここに、聖書の神の特質、また本質が現わされています。この神は、哲学者たちが考えている絶対的な存在、永遠者、不変者、創造者などの神観をはるかに越えたお方でいらっしゃいます。つまり、人間に働きかけられる神ということです。しかもそれは、12節で「わたしは必ずあなたと共にいる。このことこそ、わたしがあなたを遣わすしるしである」と示されたように、選びの民と共にいてくださる神でいらっしゃるのです。ここに聖書の神が契約の神であることがいよいよ示されます。

確かに、ここでの「あなた」とは、直接的にはモーセのことを意味しています。しかし、それはモーセ一人のことではなく、既にエジプトで神に呼び求めているあの民と共にもおられるということをも意味しています。それを知らしめるべくモーセが選ばれるのです。同時に、現実

に体験させるべく、エジプトから約束の地、乳と蜜の流れる地へと脱出させるのです。そして、聖書は、この「あなた」の中に、私ども一人一人が入っていることを告げるのです。ここに、「わたしの神」となってくれる、神の素晴らしさがあります。

〈「神」の名〉

モーセは、神の名を教えてくださいと求めました。それに対し、「わたしはある。私はあるという者だ」（エフェ アシェル エフェ）と答えになります。ある人はこれを、「神の無名性」と言いました。つまり、神は、異教の神々のようにご自身の聖なる名を人間に任せないという拒絶のご意志と第三戒を指摘するのです。また、「存在の根源」という哲学的解釈もあります。しかしおそらく、「あなたとともにいる（エフェ）」神という「事実」こそが、ここで示されているのだらうと思います。また、6章2節において「わたしは主である」とご自身の御名を、初めて啓示されます。ここにも、神の無名性の主張を読みとることが出来るだらうと思います。さらに「わたしは、……主というわたしの名を知らせなかった。わたしはまた、彼らと契約を立て、彼らが寄留していた寄留地であるカナンの土地を与えると約束した。わたしはまた、エジプト人の奴隷となっているイスラエルの人々のうめき声を聞き、わたしの契約を思い起こした」と続きます。つまり、主なる神とは、契約を思い起こされる神、つまり「神の民と共に存在する神」という恵みの事実が明示されたわけです。

ちなみに、神の名前が啓示されたのは、あの「イエス」の御名においてでした。ここに至って、名を持つ神、それほどまでに契約の当事者を信頼し、愛し、守り、神の民といつも共にいてくださる神の現実が決定的、究極的に示されたのです。私どもは、イエスさまによって、主なる神をこれほどまでに深く知ることが許され、また、イエスさまご自身を主と崇めることができます。主の御名の栄光に賛美あるのみです。そしてこの賛美が感謝を、感謝がわたしどもの服従を呼び覚まします。自分もまたひとりの小さなモーセとならせてくださいとの献身を生むのです。（相馬伸郎）

テキスト 出エジプト記 2章1～10節、3章1～10節
子どもカテキズム 問34, 65

〔単元のねらい〕

旧約の中心人物であるモーセの生涯について、二回に分けて学ぶ。彼の物語を学ぶことは、旧約の心臓部である救いと契約の恵みを知ることへと直結する。とりわけ、契約の神の真実と恵みを学び、共に喜びたい。また、主イエスの予型としてのモーセを通して、十字架の贖いと新しい契約の仲保者イエスの真実と恵みを、また神の子とされた使命についても確認したい。主と結ばれている私たちは神の器とされていることを信じ、神とその民であるキリストの体なる教会のために生き、仕えることのできる幸い、つまり神の救いの歴史を完成する務めにあずかることのできる幸い、喜び、責任を確認しあいたい。

神さまの器とされたモーセ

ヨセフをたよりにエジプトに出かけたイスラエルの人々は、その後、神さまの豊かな祝福を受けて暮らしていました。多くの人々が生まれ、男性だけで60万人の人口となっていました。エジプトの王さまファラオは、考えました。「このままだと、イスラエルのものたちがこの国に大きな影響を与えてしまう。敵が攻めて来た時、敵側についてしまったら、自分たちの国はのっとられてしまうかもしれない。さあ、今の内に、重労働をさせて苦しめておこう」。ところが、それでもイスラエルの人口はますます増えていきました。ついに、王さまは、「生まれて来た男の赤ん坊は皆、ナイル川に放り込んでしまえ」と、お触れを出しました。

さて、今日のお話の主人公、モーセはちょうどその頃、レビ族の子どもとして生まれました。お母さんは、モーセがあまりにもかわいかったので、言いつけに背いて3か月間、育てていました。しかし、とうとう泣き声も大きくなり隠せなくなってしまいました。そこで籠をつくって中に乗せ、まるでノアの箱舟のように水の上に浮かべました。そこは、王女さまが水浴びをする場所でした。すると王女は、その籠に気づいて川から引き上げました。王女は、水の中から引き上げた（マーシャ）ので「モーセ」と名前をつけました。

先生は、クリスマスのことを思い出します。あ

の時も、ヘロデ王は男の赤ちゃんを殺しました。そのときイエスさまは、ヨセフとマリヤに守られエジプトに逃げました。そして、エジプトから戻ることもできました。モーセさんは、旧約聖書の中で一番有名な人で大切な人と言われています。新約聖書では、もちろんイエスさまです。

旧約聖書、特に創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記の五つの書物を「モーセの五書」と呼びます。これらの神さまの御言葉は、モーセを通して与えられたと考えられているからです。（ヨハネ1:17）モーセは、神の民に神さまの律法を与えて紹介した人です。イエスさまは、神さまの律法を成就して、神の民を罪の奴隷から救い出してくださったお方です。実は、天のお父さまはモーセによって、イエスさまの救いのことを予告なさったのです。

旧約の中で神さまの救いがなされた中で最大の出来事は、聖書の名前にもなったエジプトから救い出された出来事です。そして、これを導いた指導者こそモーセです。それに対して、新約聖書の中で神さまがなされた最大の出来事は、イエスさまの十字架とご復活です。イエスさまによって、僕たち私たちは、救われて神さまの子どもとされています。モーセさんという人がどれほど偉大な神さまの器、神さまに用いられた人であるかが分かるだろうと思います。

さて次に、王子として育てられたユダヤ人のモーセは、ある日、同胞がエジプト人にひどい目に遭わされているのを見て、カッとなってエジプト人を殺してしまいました。王さまは彼を殺そうとします。モーセは、恐ろしくなってエジプトから逃げ出しました。ミディアンという地方にたどりつきました。そこで結婚します。羊飼いとして平凡に平和に暮らしたのです。ところが、それから40年ほど経ったある日のことです。いつものようにモーセは、羊たちとホレブの山に行きました。すると木が燃えていました。時々、雷が落ちたりして、そのような現象が起こることがあると言われています。ところが、その火は、いつまでも消えません。なんと火の中から神さまの声が聞こえたのです。「モーセよ、モーセよ」「靴を脱ぎなさい。ここは聖なる場所だから」。

実は、神さまは、もう長い間、イスラエルの人々がエジプトで苦しめられているのを、その嘆き祈る声をじっと聴いておられたのです。そして遂に、モーセを指導者として選び立てて、エジプトから神さまの民を救いだす御心を、モーセに告げられました。モーセは、びっくりして、お尋ねします。「神さま、わたしは到底そんなに立派なことができる人間ではありません」。すると神さまは、「わたしは必ずあなたと共にいる」とお答えになりました。さらにモーセは、神さまにお尋ねします。「神さまの名前を尋ねられたら、どうすればよいのでしょうか」。神さまは、「わたしはある。わたしはあるという者だ」と告げられました。要するに、神さまはイスラエルの人々の苦しみを見て、助けを求める祈りをずっと聴いてくださるお方だということです。神さまは、アブラハム、イサク、ヤコブとの契約をお忘れにならないのです。つまり神さまは、どこまでも約束を守り抜かれる真実の神さまなのです。イエスさまを信じ、神さまの子どもとされている僕たち私たちも、嬉しい時も悲しい時も神さまに見守られています。だからどんな時も、「天のお父さま」と一言お呼びすれば、神さまの助けが与えられるのです。

さて、私たちの神さまは、誰にも頼らず、ただお一人で簡単に救いのお働きがおできになります。ところが、神さまは昔も今も、ご自分を信じる人を用いて、それを成し遂げてくださるのです。確かに僕たち私たちの中で、モーセさんのように王子さまとして特別に育てられた人はいません。学校に行って勉強したり遊んだりしているだけかもしれません。何よりもモーセさんのようにものすごい大きな神さまのお働きをすることはできないかもしれません。けれども、実は、神さまは、僕たち私たちが毎日平凡にしていることを、将来、神さまのお役に立たせようとして、備えていてくださるお方なのです。だから、僕たち私たちは、学校の生活を大切にしたいと思います。またモーセさんは、最初から、そのようなことができたわけではありませんし、モーセさんの中に特別な力があったからでもありません。ただ、神さまがアブラハムたちと結んだ約束にどこまでも真実でいらっしゃり、神さまの器、道具として拾い上げ、用いてくださったからです。だから、子どもの教会は特別に大切です。元気な信仰を養ってくれるからです。

僕たち私たちは、イエスさまの十字架によって罪を赦され、神の子とされて、教会にいます。つまり、既に神さまの道具、器とされているのです。道具は、使われなければ意味がありません。ただし、一番大切なことは、使う人の「腕」の方です。神さまは、神さまの道具の僕たち私たちを上手に使ってくださいます。神さまに自分を明け渡してお任せしてしまえば、神さまは、神さまの救いのご計画のため、栄光のために用いてくださいます。今のそのままで、ただ神さまを信じ、神さまに喜ばれるようにと祈って実行してゆくとき、僕たち私たちもまた、自分が救われるだけではなく、世界を救おうとされる神さまのお働きを担えるのです。お友だちのためにお祈りしましょう。勇気を出して教会に誘いましょう。（相馬伸郎）

〔今週の暗唱聖句〕 出エジプト記 3章12節前半

神は言われた。

「わたしは必ずあなたと共にいる。このことこそ、わたしがあなたを遣わすしるしである。」

〈ねらい〉

神はご自身の民との約束を必ず果たし、具体的な時と場所と人間を選んでこの世の中に出来事をもたらされることを知る（教師の方はアブラハム契約について確認しましょう）。

〈展開例〉

1. 神様の約束を確かめましょう。

- ・神様は、人間にどのような約束をしてくださいましたか？ 創世記から探してみましょう（ヒント12,15,17章）。
- ・神様の約束は誰に受け継がれましたか？（ヒント創世記21,26,32章）。
- ・エジプトにきたイスラエルの人たちはどうなりましたか？（出1章）。
- ・エジプトの人たちはイエスラエル人をどのように思っていましたか？
- ・神様はイスラエルの人たちの中で何をしてくださいましたか？（助産婦たち、また、モーセの母やミリアムの行動、エジプトの女王のしたことについて話し合しましょう）。

2. 神様の時はいつですか？

- ・モーセさんは若者の時に何をしましたか？それはうまくいきましたか？（2章11節以下）
- ・モーセさんはすぐに神様の役に立つ人になりましたか？
- ・モーセさんはどこに逃げていきましたか？そこで何をしていましたか？その時間は短かったですか？
- ・神様は、イスラエルの人たちの声を聞いてお

られましたか（2章23～25節）？ 神様はイスラエルの人たちとの約束を覚えていましたか？

- ・あなたは、いま、我慢していることがありますか？ それはいつ解決すると思いますか？ 神様はあなたの声を聞いておられると思いますか？

3. 神様は働いておられます。

- ・モーセさんはどのようにして神様と会いましたか？
- ・神様はご自分のことを「誰の」神と言われましたか？
- ・神様はイスラエルの人たちをどのようにすると言っておられますか？
- ・モーセさんはすぐに神様の言われることが分かりましたか？ モーセさんは神様に何をお願いしましたか？ 神様は何と答えてくださったのでしょうか？
- ・あなたはどのようにして神様とお話が出来ますか？ 神様はあなたにどのような約束をしてくださいますか？（特に3章12節、また、14節についての黙想を参照）。

〈いのり〉

わたしたちは、自分の願いがすぐに聞かれないうとがっかりしてしまいます。しかし神様は、私達にはわからない仕方、今もしっかりとご計画を進めておられ、ある時が来ると、具体的な人を動かしてくださいます。神様に向かって、信頼して求め祈りましょう。

対話の手掛かりとして……

①人生において、「出会い」はとても大切なものです。私たちは家族や友人や先輩や先生など、色々な人との出会いを経験するのです。それらの出会いの中には、忘れることができない出会いやこれからの歩みを決定づけるような出会いというものがあります。信仰生活においても同じです。教会の人たちはもちろんですが、何よりも神様との出会いが、あなたの人生を大きく変えるのです。

②聖書にも、神様や主イエスと出会った多くの人たちの物語が記されています。ここに出て来るモーセもその一人です。彼は、ホレブの山で、燃え上がる柴を見つけます。そこから、神の声が聞こえてきました。「モーセよ、モーセよ」。モーセはこの時の光景を生涯忘れることができなかったのではないのでしょうか。とても不思議な出会いですが、それだけに忘れがたい出来事でした。私たちの生活においてははどうでしょうか。どうもこの時のモーセのようにはっきりとした仕方で神様に会うことなんかできないのではないかと思ってしまうかもしれません。しかも、聖書の登場人物のように、直接、神様やイエス様を見ることができるわけでもありません。「神様との出会い」という言葉は、聞こえはいいですが、実際にそんなことがあるのだろうかと思われる人もいるかもしれません。聖書に出て来る人たちのように、神様と出会うことはできなかったとしても、心の中で神様という方がおられるということを信じさえすれば、それでいいのではないかと自分で自分を説得する人もいるかもしれません。あるいは、奇跡としか言いようがない素晴らしい出来事を経験したら、そこではじめて神様に会うことができると期待しているかもしれません。

③燃え続ける柴の光景は確かに衝撃的です。しかし、皆がそのような形で神様との出会いを経験するわけではないでしょう。奇跡の中で、神様と出会う人もいれば、試練や苦難の中で、出会う人もいます。その中で大事なものは、どの出会いにおいても、神様からの語り掛けがあるということです。奇跡の中でも、苦難の中でも、そこから聞こえてくる神様の声に耳を傾け、その声に応えることです。モーセも自分を呼ぶ神様の声を聞いて、「はい」と応えたのです。

④今日、私たちは神様の声を「聖書」を通して聞くことができます。しかも、普段の生活の中で、神様の御声を聞くのです。モーセも羊の群れを飼う普段の仕事をしている時に、神様の声を聞き、神様と出会うことができました。私たちの生活においても、驚くような出来事が毎日起こるわけではないでしょう。何となく毎日が過ぎてしまったという虚しさを覚えることもあるかもしれません。しかし、そこにおいて、神様はあなたと出会ってくださるのです。

⑤そして神様との出会いは、その人の生き方を決定づけます。神様と出会うということは、ただ、お話をすることだけに留まりません。

あなたと出会いたいと願っておられる神様の願いの中心には、「あなたを救いたい」という愛があります。さらに、「あなたはこれからどう生きていくべきか」をも示してくださるのです。モーセはエジプトの地で奴隷として苦しんでいるイスラエルの民を導き出す使命が与えられました。モーセは、この神様からの使命を幾度も断ろうとします。自分には全く向いていないと思ったのでしょう。しかし、神様はモーセを説得させます。神様からの使命に生き始める歩みの中で、さらに神様の御声の素晴らしさを聞くことになるのです。

テキスト

出エジプト記 12章21～27節

参照教理問答

子どもカテキズム 問34,65

〈民の叫びを聴かれる神〉

エジプトにいるイスラエルの人々は、過酷な労働の故にいよいよ真剣に神を求め、助けを求めました。それは、彼らが、自分たちが置かれたこの状況が決して不変のものではないということを信じていたからです。つまり、歴史を支配しておられる神がアブラハムと交わしてくださった契約の故に、必ず自分たちを救い出し、神のご意志が成就すると信じていたからです。このように、彼らの叫びの中に彼らの信仰が示されています。それゆえに、「神はその嘆きを聞き、アブラハム、イサク、ヤコブとの契約を思い起こされた。神はイスラエルの人々を顧み、御心に留められた」(2:24,25) のです。

未信者が「苦しい時の神頼み」をするのは、しかたがありません。憐れみ豊かな神は、それをも用いてくださいます。ただし、キリスト者がそうであっては困ります。しかし、苦しみに遭った時、神に近づく絶好の機会になることもまた事実です。その意味で、契約の主を信じる者らしく、私どもはもっと嘆いてよいし、嘆くべきではないでしょうか。何故なら、確かに、主イエスにあって、神の国は始められ、私どもは救われていますが、一方で、神の国の未完成の悲慘がこれほどまでにこの世界に暗い影響を及ぼしているからです。深い嘆きをもって、御心がなりますように、御国が来ますようにと神に祈ることが求められています。

〈神との「出会い」による召命と変容〉

神との出会いは、人間の側から見れば常に突然のここのように思われます。青年モーセは、同胞の苦難を見て、心が激しく震えました。何とか助けたいと願い、とっさのことだったのでしょうが、エジプト人を殺してしまいました。彼はただちに、自分を守るために逃避の人生を始めます。同胞から、おそらく神からも離れるような思いの中で、

王宮の暮らしは夢の跡、妻を得、子どもを得て、羊飼いとしての平凡な暮らしを手に入れました。しかしすべては、神のご計画の下にありました。いのちを拾い上げ、エジプトでの帝王学を身に付けたであろう彼こそエジプトの民を救い出すためのご自身の選びの器でした。

燃える柴の中から神の御声を聴いたモーセは、新しいモーセへと変容させられていきます。神は、このモーセに、もはや羊飼いをしている場合ではなく、エジプトにいる神の民、同胞の救いのために立ちあがるべきことを示されます。ファラオのところに遣わす故に、今ただちに出発せよとお命じになられます。神との出会いとは、常に、それに伴う召命があることを思います。召命は、それに従う者を変容させます。神との出会い、つまり信仰とは結局、この召命への前提に他なりません。したがって、もし、救われた者でありながらも自分の使命が分からないとすれば、キリスト者としての生き方に力が入らず、信仰生活が整いません。確かに、モーセの召命は、まさに空前絶後のものであり、誰も比較できません。しかし、すべてのキリスト者に共通する真理があります。それは、使徒パウロがこのように言う通りです。「わたしたちの中には、だれ一人自分のために生きる人ではなく、だれ一人自分のために死ぬ人もいません。わたしたちは、生きるとすれば主のために生き、死ぬとすれば主のために死ぬのです。従って、生きるにしても、死ぬにしても、わたしたちは主のものです」(ローマ14:7,8)。つまり、自分のための神信仰では、力が入りません。そもそも人は、未信者であろうがキリスト者であろうが「誰かのために」生きる存在なのです。モーセをはじめ、神の民とは、神のために生きる器に他なりません。この器の中に、神のため、神の栄光のためという志が満たされることが必要です。神はその器と共におられ、宿ってくださいます。そのときこそ、器は満たされます。同時にかけがえのない器とし

ての個性と独自性が発揮されていきます。神の使命の道具となりきるところに、信仰の巨人としてのモーセが立ち現われたのです。それは、すべての神の人、神の器の特徴です。同時に、そのようなモーセであっても、何度も弱気になり、不信仰になりました。ついに約束の地を見ながら、なおそこに入ることができませんでした。

蛇足ながら、約束の地に入れなかったということによって、彼の人生は空しかったということになるでしょうか。違います。モーセのように主と顔と顔を合わせて選びだされた偉大な預言者は、後にも先にもいませんでした。高齢のモーセに約束の地に渡らせ、これを獲得させることは、主の憐れみによってもあり得なかったのだらうと思います。むしろ、神の御業は世代を越え、ヨシュアのような後継者によって進められることに、神の御業に仕える者の慰めがあると思います。私どもは、神の教会の形成、伝道という聖なる奉仕に召され、今、このような形でそれを実践しています。しかし、この奉仕は短期的なものではありません。私どもの生きている内に実現されない、獲得できないものがたくさんあるかもしれません。神はご自身の歴史のスパンの中で、御業をなされます。だからこそ、私どもは信仰の継承に励むのです。それは、単に契約の子の救いを願うだけの意図からではありません。彼らが、教会を通して、この世界のただ中で神の国の完成という偉大な神のお働きに奉仕すること、奉仕の継承をこそ願うのです。

〈しるしを与えて信仰を励ましてくださる神〉

モーセは、困難を極めるに違いない奉仕の業を思い、驚くべき召しに対して言い逆らいます(4章)。彼は、イスラエルの民が自分のことを信用しないだろうと言うのです。しかし、結局、本当に神に信頼を寄せられないのは、モーセ自身であると思われます。主なる神は、そのようなモーセの不信仰に対し、ねんごろに対応してくださいました。彼の務めをよく果たすために、何より、神が共にいてくださることを明らかに示すそのために奇跡、しるしを行って見せてくださいました。この奇跡は、はるか後に主イエスが神の国の到来を証しするために数々の奇跡、しるしを行ってく

ださった御心に通じています。

〈過ぎ越しの儀式・契約(神の自己理解)の更新〉

神の救いのしるしの頂点にあるのが、あの葦の海の徒渉であり、エジプトへの神の最後の災いである初子への裁きからの救いでした。神は、この出来事を永遠のしるしとして覚えさせられます。それが主の過ぎ越しの犠牲です。これは、過去の出来事を記憶・記念するだけの祭りではありません。むしろ、神ご自身が主、つまり契約の神であられるとの自己理解を常に更新してくださることです。こうして、過ぎ越しの祭りを祝う度に、自分たちが主の契約によって、昔も今も将来も、主の祝福と救いの中に守られて旅を進めることができることを確信させられ、信仰の恵みを更新させていただくのです。主イエス・キリストは十字架につきご復活することによってご自身の民を贖われ、聖霊を注ぐことによって新しい契約は成就されました。そのキリストの救いの出来事のすべて、主が獲得された霊的な祝福のすべてが聖餐の礼典の中にあります。主の過ぎ越しの祭りは、主の聖餐へと受け継がれたのです。契約の子らをこの聖餐の礼典へと招き、聖餐の食卓にふさわしく「整える」ことが私たちの奉仕の中心に据えられるべきです。

〈子どもたちに対して〉

教会の子どもたちもまた、学校や家庭での多くの課題を抱えています。ついに教会から離れかけるということも起こります。そのような現実を見ると、我が子がモーセのような神の人になることなど夢のまた夢、かろうじて教会から離れない大人になって欲しいという祈りと願いに沈む契約の親も少なくないと思います。しかし、私どもの思いを越えた神のご計画と摂理があります。この単元を通し、モーセをモーセたらしめた契約の主とその真実を仰ぎ、子どもたちのために祈りましょう。子どもたちがどうして幼児洗礼をうけられたのか、語って聞かせる時としたいと思います。そして主を愛し教会に心から感謝することができるように、主によりすがりつつ、育ててまいりましょう。

(相馬伸郎)

テキスト 出エジプト記 12章21～27節
参照教理問答 子どもカテキズム 問13, 24

〔単元のねらい〕

契約に真実な神は、ご自身の民をエジプトでの苦しみから解放させるために、モーセとアロンを立ててファラオに立ち向かってくださった。主なる神は、民が驚くべき救いの御業をいつまでも忘れず、生き生きとした信仰へと育て、喜びと感謝と服従の日々へと導くために、過ぎ越しの祭りを定めてくださった。これは、今日の聖餐の礼典へと引き継がれている。子どもの教会では聖餐の礼典を举行しないし、多くの教会は、この日、聖餐を祝わないと思われる。しかし、聖餐の祝いに言及しつつ、契約の子どもたちに、親（家）の信仰を語るときとしたい。なぜ、自分たちが日曜日ごとに教会に連れて来られているのかを喜びをもって確認し、主イエスを心から賛美し感謝する礼拝を捧げたい。

救い出された私たちの家族

モーセさんは、エジプトから逃げて、今、ミデアンの地で羊飼いをしています。ある日、羊たちといっしょにホレブの山に行きました。そこで、燃えている柴から神さまが「モーセ、モーセ」とお呼びくださったのでした。神さまは、仰いました。「わたしはエジプトで苦しんでいるわたしの民の叫び、祈りの声を聴いているのです。わたしはあなたを、イスラエルの人々をエジプトから約束の地へと導きださせるために、遣わすことにしています」。モーセは突然、神さまの救いのお働きを手伝うようにと呼びだされました。モーセは、答えました。「こんな自分には出来ません。誰か他の人にやらせてください」。神さまは、忍耐深く、モーセを説得してくださいました。演説が得意なお兄さんのアロンを助け手として与えてくださいました。

こうして遂に、モーセ、家族そしてアロンとともにイスラエルの長老たちのところに行きます。そして、イスラエルの人たちにこう言いました。「主なる神さまは、先祖のアブラハムたちに与えてくださった契約をお忘れになっていません。あなたがたのことをいつも顧みておられたのです。これから、エジプトから連れ出してくださるのです」。こうして、イスラエルの人たちは、心から喜び、神さまを礼拝しました。

さて遂に、その時が来ました。モーセとアロンは、エジプトの王、ファラオのところに行きます。そしてこう言いました。「イスラエルの神、主がこう言われました。わたしの民を去らせて、荒野で礼拝させなさい」。ところが、王さまは聞こうとしません。それどころか、ますますイスラエルの人たちを苦しめていきました。

神さまは、遂に、エジプトに災いを下して行かれました。最初は、ナイル川を血に染めてしまう災いです。2番目は、ナイル川に蛙がたくさん出て来る災いです。蛙は、家の中にも入ってきました。3番目は、ぶよの災い。4番目は、あぶ。5番目は、疫病。6番目は、腫れもの。7番目は、雹。8番目は、いなご。9番目は、暗闇の災いでした。エジプトの王さまは、苦しみました。ところが、いつも心をかたくなにして、イスラエルの人々を去らせようとしませんでした。

ついに最後の10番目の災いが下されることになりました。それは、エジプトの国中で、王さまの子どもをはじめすべての子ども、そればかりか家畜までも死んでしまうというものでした。ところがなんと、それにもかかわらずファラオは心を頑なににして、神さまに反抗し続けました。

このとき、神さまは、この最後の災いからイスラエルの民を守るために、そして彼らをエジプト

から連れだすために「過ぎ越しの祭り」を祝うことをお定めになりました。

神さまは、最後の災いがエジプトの王たちにくだされるその夜、イスラエルの人々には、子羊を屠り、その血をとって、その家の玄関の二本の柱と鴨居に塗るように、また、イースト菌を入れないで焼いたパンを急いで食べるようにお命じになりました。こうして、神さまは、予告された通り裁きを実行されました。そして約束通り、イスラエルの人々は、この過ぎ越しの祭りを祝っていたので、神さまの裁きはイスラエルの人々の家を過ぎ越していったのです。

ところが、エジプトの王は、それでもイスラエルの民を逃がすまいと追いかけて来ました。そこで、エジプトの軍隊を完全に滅ぼし、イスラエルの人々を完全に、エジプトから脱出させるために、神さまがものすごい風を吹かせて、海を真っ二つに分けさせて、イスラエルの民を海の底を通らせてくださいました。追いかけて来たエジプトの軍隊は、海の中に沈められてしまいました。

この出来事によって、イスラエルの人たちは、まことの神さま、自分たちの神さまがどのような神さまであるのか、初めてのように分かりました。「ああ、私たちを救ってくださった神さまは、天と地を無から創造されたお方でいらっしゃるのだ。この神さまに出来ないこと等何一つない。神さまは宇宙も地球も、そこにあるすべてのものをご支配くださる、唯一の主権者、王の王でいらっしゃるのだ」。

さて、皆さんは聖餐の礼典を見たことがありますね。「食べたいな、飲んでみたいな」と思ったことがあると思います。ちっちゃなパンや小さなグラスで飲んだりする大人の人たちのことを不思議に思ったこともあると思います。あのパンとぶどうジュースは、イエスさまの体でありまた血を示しています。それは、何を意味するのかというとイエスさまが僕たち私たちの罪を贖い、神からの怒りから救い出してくださった十字架とご復活

の意味を思い起こささせていただくためです。

神さまは、イスラエルの人々に「あの過ぎ越しのお祭りは、永遠に守りなさい」とお命じになりました。けれども、僕たち私たちの教会では、していません。その代わり、聖餐をお祝いしています。それこそが神さまの御心だからです。過ぎ越しの祭りは、モーセさんによって神さまが、自分たちを救ってくださったことを覚えさせていたくださったためのお祭りです。けれども今は、イエスさまが十字架で死んでお甦りになられたことによって、イスラエルの人だけではなく、エジプトの人たち、つまりすべての人が救われることができたのです。つまり、あの過ぎ越しの出来事、エジプトから連れだされた出来事は、イエスさまの十字架とご復活の御業の予告だったのです。ですから、僕たち私たちは今、イエスさまの教会で聖餐の礼典をお祝いするのです。

確かに僕たち私たちは、まだ、聖餐にあずかっていません。けれども、多くのお友達が洗礼を受けているでしょう。お父さんやお母さんは、皆さんが神さまの子どもであることを信じて小さなときに洗礼を受けさせてくれたのです。つまり、皆さんの家は、神さまに選ばれ、救われた特別の家族なのです。そのおかげで、皆は、教会に来ることができたのです。神さまは、イエスさまを与えてくださるほど、お父さんやお母さんを愛し、皆さんを愛し、これまでもこれからも祝福し、お守りくださいます。家族そろって、この神さまと教会に仕えることこそ、人間にとって最大の祝福、最高の幸福です。

ひとりで教会に来てくれているお友達も、大丈夫です。あなたが教会に通って、イエスさまを信じて行くとき、必ず、お父さんやお母さんも救ってくださいます。教会の先生たちは、神さまの家族です。一日も早く、皆がイエスさまの聖餐の礼典をお祝い出来る日が来ますように。先生たちが、皆のために一番お祈りしているのはそのことです。
(相馬伸郎)

〔今週の暗唱聖句〕 出エジプト記 3章12節前半

神は言われた。

「わたしは必ずあなたと共にいる。このことこそ、わたしがあなたを遣わすしるしである。」

〈ねらい〉

出エジプトにおける主の過越しと、新約を生きる私たちのかかわりを知る。

私の神、とはどういうことか具体的にイメージして、恵みを分かち合う。

〈展開例〉

神様は、エジプトの人々に、恐ろしい災いを下されましたね。なぜ、神様は、エジプトの人にそんな意地悪をされたのでしょうか。

イスラエルの人々が、エジプトで奴隷にされて、苦しんでいたからです。

なぜ、イスラエルの人々を救おうとなさったのでしょうか？

イスラエルのご先祖は、アブラハムです。神様は、アブラハムと特別な契約を結びましたね（創世記12章）。

それは、私（神様）が、あなたの神となる、ということでした。あなたの神、この言葉には、とても深い意味があると思います。皆さんは、どんなことをイメージしますか？

さて、十番目の災いは、エジプト人の、長子をすべて殺す、ということでした。そこで、神様は、エジプト人とイスラエル人を区別するために、イスラエルの人々に、殺した動物の血を、家の前の鴨居と柱に塗ることをお命じになりました。こう

して、主の災いが過ぎこされる、これが過越しの意味です。この血が、神様の民、というしるしなのです。

ところで、契約の血、というと、どこかで聞いたことがありますか。聖餐式で、牧師が「これは、多くの人のために流される私の血、新しい契約である」と、言っていますね。この言葉は、誰の言葉でしょう？ いっついわれましたか？（マタイ26章）

エジプトでは、動物がイスラエルの人々のために犠牲になりましたが、イエス様は、全世界の人々が罪をゆるされて、契約の民になる、つまり、私たちの神となってくださるために、ご自身を犠牲にされたのです。それを毎月思い起こさせていただくのが聖餐です。

どうすれば、私たちも契約の民になれますか？ お父さんかお母さんが洗礼を受けている場合、その子供は、すでに契約の子、となっています。でも、聖餐式でパンとブドウ酒（汁）をいただくためには、自分の口で、イエス様が私の罪を許してくださる救い主です、と告白しなければなりません。そうなれますように、とお祈りしましょう。

〈祈り〉

天の父なる神様、今日も教会に来ることができてありがとうございます。

主を信じる信仰をお与えください。

イエス様のお名前によって祈ります。アーメン。

対話の手掛かりとして……

①それぞれに、大切にしている記念日というものがあると思います。1年365日の中で、この日だけは忘れてはいけない大事な今日という日があるのではないのでしょうか。イスラエルの民にとっても、忘れることのできない大切な日がありました。それは自分の誕生日でもありません。愛する人と結婚した日でもありません。もちろん、そのような日は、とても大切な日に変わりありませんが、それよりも、もっと大切な日が、彼らにはあったのです。この日がなければ、自分たちの今日もないと言えるような特別な日。それは出エジプト記12章に記されている過越の出来事です。

②だからイスラエルの暦は、この過越の出来事、出エジプトからの解放の出来事、を記念することから、一年の歩みを始められます。キリスト教会の暦もまた、待降節（アドヴェント）から始まります。神様が私たちを罪の奴隷から解放してくださるために、ついに、御子イエス・キリストをお遣わしになられるのです。神様が私たちの歩みの中に、決定的な救いの出来事を始ようとなさるのです。だから、私たちの歩みの根底には、キリストにおいてはっきりと表わされた救いの出来事があります。失われた者を何としても見つけ出したいという神の愛の熱心があるのです（ルカ19:10）。その神様の思いに、私たちの心を向けるところから、新しい一年を、新しい歩みを始めるのです。

③「あなたたちはこのことを、あなたと子孫のた

めの定めとして、永遠に守らねばならない」（出エ12:24,25）とあるように、私たちはこの恵みをいつも心に留め、守らなければいけません。また、新約の時代に生きる私たちは、「キリストが、わたしたちの過越の小羊の犠牲として屠られたからです」（Iコリ5:6）とあるように、私たちのための過越の小羊キリストの犠牲の死によって、私たちのための過越が成し遂げられました。この救いの恵みを覚え、感謝し、喜ぶのが、毎週日曜日の主の日の礼拝です。十字架で死に、三日後にお甦りくださったことを、毎主日毎にお祝いしているのです。

④「また、あなたたちの子供が、『この儀式にはどういう意味があるのですか』と尋ねるときは、こう答えなさい。『これが主の過ぎ越しの犠牲である。主がエジプト人を撃たれたとき、エジプトにいたイスラエルの人々の家を過ぎ越し、我々の家を救われたのである』（出エ1:26～27）ここでなされていることは、子供が親に「この儀式は何の意味があるのか？」と尋ねているということです。そして、その意味をちゃんと子供に伝えていきます。教会でささげられている礼拝、また礼拝の一つ一つのプログラムには、ちゃんと意味があります。そのことを理解すると、礼拝をささげる喜びがさらに与えられます。もしかしたら、礼拝というのは、儀式ばかりで、何か難しいことをしていて、若い自分には到底ついていくことができないと感じている人いることでしょう。そんなとき、ぜひ、牧師をはじめ、先輩のクリスチャンの人たちに尋ねてください。ここで何をしているのですか？これはどういう意味があるのですか？

テキスト 出エジプト記 14章
参照教理問答 子どもカテキズム 問8, 11, 13, 41, 66
ウェストミンスター大教理問答 問101, 121

十戒の序言において、神が出エジプトの神として名乗りを上げているように、エジプトの抑圧からの解放は歴史を通じて民が記念すべき救いの出来事であり、後々選びの民イスラエルのアイデンティティーそのものとなる。14節で「主があなたたちのために戦われる。あなたたちは静かにしていなさい」と告げられた通り、ここに描かれる出エジプトの救済は「主の戦い」である。話を遡れば、出発にあたって民は隊列を組み、巨大な軍隊としてさっそうとエジプトを後にした。しかし、追っ手がかかるとすぐに民は動揺し、モーセに不平を訴える。そこへ「恐れてはならない」という主の励ましがあり、「静かにしておれ」との指示が与えられて、イスラエルは何もせずとも主なる神が全面的にエジプトとの戦いを引き受ける。

描かれた戦闘は次の通り。エジプト軍はファラオ自らを先頭に、馬、戦車、騎兵、歩兵を従えてイスラエル軍を一気に海岸まで追い詰める。時刻は夜半に至り、戦闘は暗闇の中で行われるが、イスラエルの背後からエジプト軍が襲いかかろうとする矢先、天使と雲の柱が間に割って入り主の戦いが開始される。そうして足留めをしておく間、主がモーセに命じたことは、イスラエル軍を率いて海を渡ることである。主が命じた通りモーセが海に向かって手を差し伸べると、海は二つに割れ、水は右と左に壁のようになる。これはモーセが割ったのではなく、主が東風を用いて海の中に道を開く。イスラエルはその乾いた陸地を通して行く。主はその間も火と雲の柱からエジプト軍を見下ろし、これを混乱させ、戦車が進まないように手を下す。そしてエジプト人は「わたしが主であることを知る」(18節)と言われていた通り、「主が彼らのためにエジプトと戦っておられる」(25節)ことを告白する。結末は悲惨なものであって、

海がエジプト軍に襲いかかり、ファラオの軍隊は全滅し、イスラエルはエジプト人のしかばねを海辺で目撃する。この戦いは31節で次のように締めくくられる。「イスラエルは、主がエジプト人に行われた大いなる御業を見た。民は主を畏れ、主とその僕モーセを信じた」。イスラエルはこうして主の戦いを目撃した証言者となる。

大切なことは、救われたイスラエルが最後に信仰へと導かれることである。そこにこそ主の戦いの意味がある。「主を畏れる」ことは「信じること」であり、旧約聖書では「信じる」とは心からの信頼を寄せることを指す。イスラエルはこの出来事を通して、主こそ救いの神として信頼できる方であると知る。またモーセを主の僕として、本当に指導者にふさわしい人物として受け取っている。「主の僕」とは、旧約聖書で人間に与えられる最大の賛辞でもある。

イスラエルの救済の原体験にあるのは、この神の絶対的な主導権であり、神の言葉を告げた僕モーセの姿である。この葦の海における救いの出来事は、ここに詳細に記されているばかりでなく、詩編にも歌われてイスラエルの民に語り継がれた(106編、136編)。この出来事を歌うことで、イスラエルは救いの神を絶えず思い起こし、信仰を呼び覚まされた。古代のイスラエル人が賛美を捧げた神の姿は、こうした戦いにおいて奇跡的な力を発揮された戦人である。現代に住む繊細な心情の持ち主である我々にはこうしたダイナミックな神をイメージすることは難しい。けれどもこの大らかな信仰の表明が伝えているのは、自然を支配し、歴史に介入して来られる神の力強さ、その神への期待と信頼である。その語り継がれた救いが希望となって、万民の救い主キリストの到来に道が敷かれる。(牧野信成)

テキスト 出エジプト記 14章
子どもカテキズム 問8, 11, 13, 41, 66

〔単元のねらい〕

旧約のイスラエルの救出物語から創造者なる神の偉大な力と神の一方的な救いの恵みを知り、イエス・キリストの到来に期待するアドベントに導かれる。

神さまの戦い

むかし、イスラエルの人々は出エジプトの出来事を通して神さまの救いを知りました。それはどんな出来事だったのでしょうか。そのころ、イスラエルの人々はエジプトで奴隷にされていました。奴隷とは、人間として大事にしてもらえないで、ただ働くための道具にされてしまうことです。自動車や機械と同じで、壊れたら捨てられてしまいます。人が奴隷にされてしまうような、そんなひどいことが世界には時々おこります。悪魔が人の心に働いて、世界を悪くしてしまうことがあります。みんなのおじいちゃん・おばあちゃんたちはよく知っていると思います。むかし大きな戦争があって、悪い力が世界を飲み込んでしまいました。あちこちの国で、人を奴隷にするようなひどいことが行われました。ドイツにはヒトラーという人が現れてユダヤ人を皆殺しにしようと計画しました。ユダヤ人は少しも悪くなかったのですけれども、強制収容所に集められて、家族もばらばらにされて、家も持ち物も全部取り上げられてしまって、死ぬまで働かされました。そして、死んだらゴミのように焼却炉で焼かれて捨てられました。収容所でユダヤ人は「丸太」と呼ばれました。もう人間だとは思われていなかった。どうしてこんなことが起こるのでしょうか。それは悪魔の力が働くからです。人間の心には神さまから離れようとする罪が誰にでもあります。悪魔はそれを利用して、ときどき世界全部を悪くしてしまいます。戦争中の日本もそうでした。ドイツばかりではなくて、日本にもそんなひどい時代がありました。日本もまた中国や朝鮮の人々を奴隷にしたり殺し

たりしました。むかし、エジプトに悪い王さまが現れたとき、イスラエルの人々も差別されて奴隷にされたのです。そこで、神さまがイスラエルの人々を救うために立ち上がりました。

そう、神さまがイスラエルのために戦いました。それは、悪魔の力に立ち向かう、善い神さまの戦いでした。出エジプトは、本当は長いお話です。神さまがモーセを選び出してイスラエルのもとへ送り込むことから、エジプトの悪い王のもとで十の奇跡を起こして、とうとうイスラエルを自由にするところまで、聖書は詳しく書いています。ですが、今日のお話はその続きです。エジプトは奴隷がいなくなってしまうと困ったと思い、イスラエルの後を追いかけて連れ戻そうとしました。エジプトには強い軍隊がありました。「えり抜きの戦車六百」と書いてあります。こんな強くて大きな軍隊にとってもイスラエルは敵いません。とうとう海の側まで追い込まれて逃げ場を失ってしまいました。人々は怖くて仕方がなくて、自分たちを連れ出したモーセに文句をいいました。「どうして私たちを連れ出したんですか。殺すためだったんですか。こんな砂漠で死ぬよりも奴隷だった方がましです」などと言いました。たしかに、イスラエルの人々は、「きっと神さまが救い出してください」とモーセが言ったことを信じてエジプトを出ました。そこで、モーセはみんなにこう答えました。「恐れてはならない。落ち着いて、今日、あなたたちのために行われる主の救いを見なさい……。主があなたたちのために戦われる。あなたたちは静かにしていなさい」(13, 14節)。そこか

ら神さまの戦いが始まります。

私たちの信じている神さまはどんな神さまでしょう？ そう、神さまは天地の造り主です。宇宙の全体も、太陽も月も地球も、海も山も大地もすべて神さまがお造りになったものです。その神さまが戦うことになったら恐ろしいことになるに違いありません。一体何が起こったのでしょうか。まず、イスラエルの人々とエジプトとの間に真っ黒な雲が立ちこめて稲妻が光り始めました。こうしてエジプトの軍隊はイスラエルに近づくことができなくなりました。それから、モーセが手にした杖を海に差し向けました。すると、海の水が二つに分かれて乾いた道が現れました。そこでイスラエルの人々は海の中を歩いて渡ることができるようになりました。道の両側には海の水が壁のようにそそり立っていました。みんなが逃げる間、神さまはエジプトの軍隊の邪魔をしました。そして、イスラエルが海を渡りきったのを見て、モーセはもう一度海に向かって手を差し伸べました。すると、壁になっていた水が元に戻って、後を追いかけて来たエジプトの軍隊を一人残らず飲み込んでしまいました。

こうして主なる神さまが戦ったのでイスラエルの人々は救われました。みんなはただ、モーセに言われた通り、静かに見ていただけでした。もちろん、逃げながらですけれども。これが「出エジプト」の出来事です。むかし、神さまご自身がイスラエルのために戦ってくださって、みんなの命を救ってくださった大きな出来事です。これによって、みんなは神さまが大きな力で人の命を救うことのできるお方だと知りました。イスラエルの人々ばかりではありません。エジプトの軍隊にいた人も「主がエジプトと戦っている」(25節)ことを知りました。神さまは人を奴隷にするような大きな悪の力に立ち向かって、これと戦うお方なのです。

エジプトは今もある国ですけれども、悪い国ではありませんから間違えないでください。これはむかしの出来事です。初めにお話ししたように、世界に悪い力が働く時に、どんな国であっても悪

くなってしまうことがあります。今でもそういう恐ろしい悪魔の働きは終わっていません。けれども、聖書が私たちに教えてくれる神さまは、その悪魔と戦う神さまです。イスラエルの人々が救われたのは、聖書を読んだ私たちが神さまの救いを信じるようになるためです。そして、神さまは出エジプトよりもすごい救いの出来事を用意しておられました。それからずっと後になって、神さまは救い主をこの世界に送って来られました。そう、私たちのイエスさまです。イエス・キリストはこの世の悪を滅ぼすために世に来られた救い主です。創造された時の人間は悪くなかったのです。神さまは人間を造って喜んだのです。でも、罪を犯して神さまを無視するようになってしまっ、人間は悪魔に利用されてしまうようになりました。だから、神さまは人間を御自分のもとへ取り戻すために御子なるイエスさまを送ったのです。そして、イエスさまの十字架によって悪魔は滅びることになりました。なぜなら、イエスさまの十字架を信じる人は神さまによって復活の命をいただいて、死んでも滅びることがなくなってしまうからです。もう悪魔は人間を滅ぼすことができなくなったのです。神さまはイエスさまによって悪魔と戦って私たちを救ってくださったのです。

神さまの戦いはまだ終わっていません。神さまが勝ったのですけれども、まだ、戦いは続きます。悪魔が働く時、人が奴隷にされてしまいます。人の命が大切にされない場所はまだまだたくさんあります。私たちの心の中にもまだ悪魔は入り込んでいて、人を憎んだり、死にたくなったりさせます。だから、神さまはまだイエスさまと一緒に戦います。最後には、イエスさまがもう一度この世界に来てくださいます。そこで、戦いは終了です。それは約束ですから、終わりは必ずやってきます。それまで、私たちは辛抱して神さまの戦いを見ていなくてはなりません。神さまはイエスさまの愛によって悪と戦います。私たちの心の中で、また、世界のいたるところで。だから、信じて、みんなのために、神さまの救いを待ちましょう。

(牧野信成)

[今週の暗唱聖句] ヨハネによる福音書 16章33節

あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている。

〈ねらい〉

自然をも支配されている神様の姿から、創造主であり、全能である神様の力を知る。この神様が、契約のゆえに一方的に民（私たち）を守ってくださり、救いに入れてくださる恵みを知る。

〈展開例〉

今日の聖書箇所は、とても有名で、映画にもなりましたね。この箇所は、絵で見ると一目瞭然、よくわかることです（絵本などを指し示す）。海を左右に分けて、イスラエルの人々が海を渡るようにして、エジプトの軍隊が通るときは元に戻したために、エジプト人は全員死んでしまったと聖書にはあります。海を分ける、そんなことを見たことがありますか？ そこに船が通っていたら、真逆さまに地面に落ちてしまったかもしれませんね。

ところで、神様はほかにどんなことがおできになるでしょう？ 聖書にはどんな出来事が書いてありますか？

無から有を造り出す、自然を思い通りに支配される、人を用いてご自身の思いを伝えられる、まだまだたくさんありますね。

ところで、今日の聖書では、自然を操っている姿が描かれていますが、神様は、何のためにこのことをなさったのでしょうか？

イスラエルの人々を救うためですね。

神様が大きい力を振るわれるとき、そこには目的があります。神様が愛しておられるご自身の民を救おうとなさるときです。イスラエルの人々は、命を救われました。そして時を経て、神様は私たちのためにイエス様を送ってくださいました。

イエス様を信じる人が一人も減びることなく、永遠の命に入れられるためです。

イエス様がなさった奇跡を言える人！

本当にたくさんありますね。イエス様がなさったことすべては、それを見て神様を信じるようになるためです。聖書を読んだ私たちが神様を信じて、滅びから救われるためです。

子どもカテキズム問13を読んでおわりにしましょう。

〈祈り〉

天の神様、今日は神様がご自身が愛しておられるものを救おうとなさる姿を学びました。

私たちのことも、何とかして救いたいと思ってくださっている、この神様の御心がよくわかるようになりますように。

イエス様のお名前によってお祈りします。アーメン

対話の手掛かりとして……

①「絶体絶命」という言葉を聞いたことがあると思います。聞いたことがあるだけではなく、そのような経験をしたことがあるという人もいるでしょう。八方塞がり、前後左右にも進むことができず、そこに立ちすくむことしかできないのです。何もできずにただ呆然と地面を見るしか他ありません。こういう時に、神様の助けの手が差し伸べられたら、どれほど嬉しいことでしょうか。

②でも神様の助けは、すぐに来ないのではないかな。この時、イスラエルの民を救ってくださったように、自分の目の前にある壁が、都合よく真っ二つに裂けて、道が開かれるはずはない。また、後ろから迫り来る敵が打ち倒されるはずなどない。そのように疑ってしまったことがあるかもしれません。あるいは、「あのピンチの時に、神様は何もしてくださらなかった」という、思い出したくもない経験をしておられる方もいることでしょう。私たちはそれぞれの経験から分かっていることがあります。困っている時にすぐに助けが来るわけではない。困っている問題がすぐに解決されるわけではないということ。だとしたら、この出エジプト記の奇跡は、大袈裟なことを物語っているだけなのでしょうかな。今、この物語を読んでいる私には関係ないことなのでしょうかな。今回の箇所は、新約で語られるイエス・キリストの救いと重ねて語られます。だとしたら、キリストの救いも、嘘を語っているのでしょうか。絵空事のように、ありもしない救いを語っているのでしょうか。

③しかし、もしそうだとしたら、キリストを信じて生きることは、とても空しいことなのではないのでしょうか。確かに、私たちの人生には、「絶対絶命」と思われるようなことがたくさんあり

ます。それはキリストを信じる前にも、信じた後にも同じように起こります。にもかかわらず、教会の人たちは、イエス・キリストのことを信じ続けてきました。「この方以外に、私たちの救いはない」と信仰を告白し続けてきたのです。なぜかと言うと、どのようなピンチが自分に迫って来て、自分を苦しめたとしても、その力に遥かに勝ったキリストの愛と力が迫って来ていることを実感していたからです（Ⅱコリ5:14、ローマ8:38,39）。

④絶体絶命の中において、その神様の愛の迫りが、どうしたら分かるのでしょうか。モーセは、神様の思いを、イスラエルの民に伝えます。それはとても不思議な言葉でした（出エ13:13参照）。「恐れてはならない!」「落ち着いて!」「静かにしていなさい!」神様は私たちの嘆きを聞いてくださる方です。私たちが神様の約束を忘れても、神様は決して救いの約束を忘れたりはなさいません。いつも、私たちのことを見ておられるのです。一方、私たちはどうでしょうか。ピンチの時、恐れを抱きます。落ち着いてなどいられません。「なぜ、神様はこんなひどいことをするのか」と不平しか口にすることができません。神様の助けの手がいつも目の前にあるのに、その手を見て、その手を取ろうとはしません。いつも見ているのは、自分を苦しめようとする敵の力ばかりです。当然そこに喜びと平安は、決して生れてはこないのです。恐れを静めるところか、余計に騒がしいものになってしまう自分がいることを思います。だから「静かにしてなさい!わたしが戦うから!」と、神様はおっしゃってくださるのです。「神様、私たちの騒ぐ心をどうか静めてください」と祈る時、確かに聞こえてくる神の助けの声があるのです。キリストの教会は、その声を聞き続けてきたのです。

テキスト	イザヤ書 9章1～8節
参照教理問答	子どもカテキズム 問23, 27 ウェストミンスター信仰告白 8章1節 ウェストミンスター大教理問答 問42 ハイデルベルク信仰問答 問31

〈聖書テキストの解説と黙想〉

まもなくクリスマスを迎えようとしている。クリスマスはちょうどその年の終わりであり、その一年を振り返る時ともなるだろう。私たちは年の終わりを迎えて、一年をどのように振り返るだろうか。楽しいことや、喜びの出来事があったらう。主の絶え間ない恵みを覚えることがあったはずである。

ただ、その一方でどうしても思わざるを得ないことは、闇ということではないだろうか。世界の中にある闇、私たちの国の中にある闇、そして、私たちの心の中にある闇。この一年を振り返る時に、その闇を思わずにはおれないだろう。悔い改めを迫られることがあるのではないか。

しかし、そういう呻きを覚えるような現実、真の光が与えられた。ここに、クリスマスの希望と喜びがある。

「闇の中を歩む民は、大いなる光を見、死の陰の地に住む者の上に、光が輝いた」(1節)。まず預言者イザヤは、この世の闇を語る。さらに、イザヤはイスラエルの闇の現実をこのように語る。「災いだ、悪を善と言い、善を悪と言う者は。彼らは闇を光とし、光を闇とし、苦いものを甘いとし、甘いものを苦いとする」(5章20節)。悪を善とし、善を悪とする。闇を光とし、光を闇とする。全くの倒錯である。神の光の導きを必要とする民の罪の現実が語られる。

そのような罪ある民には、神の裁きの警告がなされる。「その日には、海のごう音のように、主は彼らに向かって、うなり声をあげられる。主が地に目を注がれると、見よ、闇が地を閉ざし、光も黒雲に遮られて闇となる」(5章30節)。闇が地を閉ざしている。光も黒雲にさえぎられて闇とな

る。闇の支配の中で光が見えない、神の御前に裁かれる状況である。8章22節でも「地を見渡せば、見よ、苦難と闇、暗黒と苦悩、暗闇と追放。今、苦悩の中にある人々には逃れるすべがない」と闇の状況が語られる。

預言者の語るこの世の現実、民の現実は、ただ闇であると言って良いだろう。7章と8章には、イスラエル王国とシリアが同盟を結んでユダを攻めようとしている戦争が記されている(シリア・エフライム戦争、前733年)。また、この時アッシリア帝国の脅威もあった。その中で民は、本当に何を自分たちの光とするかが問われたのである。

これはクリスマスを迎える今もそうではないだろうか。現在の私たちの国も、かつての戦争の状況に遡っているとされる暗い現実がある。しかしこの時期、町では、まるでそのような不安をかき消すかのようにイルミネーションが輝き、クリスマス商戦で明るくせわしないのではないだろうか。その時に、一人一人が何を自分にとっての本当の光として生きるか、と問われていると思うのである。この世の中にあって、子どもたちにも本当の光に照らされて生きる歩みをしてほしい。神様は、私たちに救いの光を確かに与えてくださっていることが、このテキストでは明らかにされている。

この光が輝く中で、預言者が語っていることは平和である。私たちの想像を超えた平和が語られることになる。輝く光の中で深い喜びと大きな楽しみが与えられ(2節)、戦いの現実に終わりが告げられる(3,4節)。そして、その中心には一人のみどりごの誕生の出来事が記される(5節)。

ここで預言者は、ただの地上の王の誕生を言っ

ているのではない。むしろ、それを超えた真の王のことが言われている。私たち一人一人を照らす光となり、真の平和をもたらす王である。

「驚くべき指導者」。新改訳では「不思議な助言者」という訳。このみどりごは他の助言者を必要としない不思議なお方、最高の指導者である。私たちが、ただ助言を受け、聞き従うべきメシアである。「力ある神」。この方は、お生まれになった地上において神の代表者である。「永遠の父」。この方は、単にある一時代に限らず、時間を貫いて働かれる父（指導者）である。こういう平和の君のことが言われている。

時間の中を貫いて今も生きて働かれる神であるお方、私たちにとっての光であり真の平和をもたらしてくださるお方が、この地上にお生まれくださった。ただこのみどりごに、私たちの心を向け、この方に助言を求めるところに私たちのクリスマスの幸いがある。万軍の主の熱意がこれを成し遂げられる（6節）。

5節では、ひとりのみどりごが「わたしたちのために」生まれた。ひとりの男の子が「わたしたちに」与えられた、と「わたしたち」のためであ

ることが繰り返される。この平和の君であり、光であるお方が、他ならない「わたしたち」のために与えられた！ この思いを新たにするとところにクリスマスがある。

イエス・キリストがお生まれになった夜も、主の栄光が暗闇の中に輝いた。そして、「今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである」（ルカ2章11節）と天使が語った。

「あなたがたのために」お生まれになったメシア。他ならない私たちのために与えられた救い主。これがクリスマスに一人一人に与えられているメッセージである。

この暗闇にしか見えない世の現実であっても、神様はそこに確かな光を与えてくださっている。平和の見えない世の現実にも、確かな平和が与えられている。この個所は、当時と同じ暗闇の中に生きる私たちに、その偉大な福音の事実を語っている。愛する子供たちと共にその福音の事実を覚え、喜びのクリスマスに備えたい。（宮崎契一）



テキスト イザヤ書 9章1～8節
子どもカテキズム 問23, 27

〔単元のねらい〕

神様の熱心によって、一人一人の生活の中に確かな平安を与える救い主が私たちに与えられていることを覚えたい。この主イエスの恵みの支配とその御手を受け入れるところに、暗闇に生きる私たちの喜びがある。

みどりごの誕生

おはようございます。みんなは今、クリスマスに向けて教会で過ごしています。

クリスマスの中心は、誰かな？ この時お生まれになったイエス・キリストです。でも、イエス様は単に偶然にお生まれになったのではありませんでした。そこには神様の深いご計画と、私たち一人一人への神様の愛と熱意があったのです。その中で神様は、私たちのために愛する独り子イエス様を与えてくださいました。

5節には、「ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれた。ひとりの男の子がわたしたちに与えられた」と書いてあります。

ひとりのみどりごが「わたしたちのために」生まれた。ひとりの男の子が「わたしたちに」与えられた。このように、私たちのためにこのみどりごを神様が与えてくださった、ということが繰り返されています。イエス様という救い主は、まさに私たちのために与えられた方です。みんなと一緒にこの出来事を喜ぶところに、私たちにとっての本当のクリスマスがあります。

では、私たちにとってイエス様とはどのような救い主なのでしょうか？ 単にみんなが欲しいものをくれる、そういうお方でしょうか？ そうではありません。実は、イエス様はみんなが欲しい物以上に、みんなが必要としていることのために生まれてくださいました。

今日の個所を見ると、この世の一人一人が暗闇の中に生きていた様子があります。死の陰の地に

住んでいるとも言われています。聖書は、私たち一人一人は、実はそういう現実の中に生きている者たちなのだ、と言っているのです。

みんなは、自分が暗い闇や死と隣り合わせに生きている、ということを感じることはありますか？ あまりそういうことを考えることはないかもしれない。でも、聖書が語っていることは、みんなは暗闇のある世界に置かれていて、神様の前に死ぬべき罪の中にある、ということです。神様の前に、それほど大きな問題を私たちは抱えていると聖書は語っています。私たちは誰でも、神様からの救いの光を必要としている存在なのです。

例えば、この聖書の時代もそうだったのですが、今の時代も戦争などの戦いや人間同士が憎しみ合うことが依然としてあります。戦争が起きると、本当に多くの人たちが尊い命を落とすことになります。また、今の私たちのように戦争がなくても、互いに妬んだり、憎み合ったりすることは、生活の中に本当に多くあるのではないのでしょうか。私たちは、神様を神様とせず、ただ自分の思うように生きる罪の世界に置かれています。それはただ闇でしかないのだと思うのです。

だから、みんなは、何よりも神様から助けていただかなくてはなりません。神様の光に照らされて、神様が与えてくださる平和と大きな喜びに生きることを必要としています。そして、そのために、わたしたちのためにみどりごが生まれた、と今日の個所には書かれています。

このお生まれになった方は、私たちが唯一聞き従うべき驚くべき指導者です。そして、神様そのものである方が地上に生まれてくださいました。また、永遠の父、と言われるように、いつの時代でも私たちが頼ることのできるお方です。そして、暗闇と死ぬべき罪の中で、本当の平和を携えて私たちのところに来てくださる平和の君です。

この主イエス・キリストというお方を私たちの王としてお迎えするところに、私たちにとっての本当のクリスマスがあります。

みんなはクリスマスというと、どういうことをイメージしますか？ 明るいきりすますつりー、教会でももらえるクリスマスプレゼント、美味しいものが食べられる、などクリスマスには楽しい

ことが多くあります。僕も小さな時は（いや、大きくなっても）楽しみにしていたように思います。

でも、本当のクリスマスはただそのことだけで終わるものではありません。そういうものは、私たちにとって一時的に楽しくても、いつまでも続く楽しみや喜びではないと思います。

暗闇の中にあって神様の前に望みのない私たちのために、神様は愛する独り子イエス様を与えてくださいました。キリストというおさが、暗闇と死の中にある私たちに与えられました。この方を受け入れるところに、みんなにとってクリスマスの本当の喜びと楽しみがあります。イエス様は神様によってみんなのために与えられ、この方は他ならないみんなのために生まれてくださったお方です。
(宮崎契一)

〔今週の暗唱聖句〕 イザヤ書 9章 5節

ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれた。

ひとりの男の子がわたしたちに与えられた。

権威が彼の肩にある。

その名は、「驚くべき指導者、力ある神

永遠の父、平和の君」と唱えられる。



〈ねらい〉

次週から2週続けてルカ福音書からイエス・キリストの誕生を学ぶ。聖書全体がイエス・キリストを証するものであり、ルカ文書は2巻全体で神様の救済史によってそれを明らかにする（ルカ24章26～27、45～48、使徒2章、3章、7章、17章24～31他多数）。この分級では、旧約聖書からそれを確認し理解を深め次週からの受胎告知、降誕への準備をしたい。この機会に契約を確認し旧約聖書を振り返るのも大変有益である。

この分級では、旧約聖書の契約の箇所や、メシア預言を、

- ①子供たちと一緒に何カ所も開くそして輪読する。
- ②イントロクイズ形式で教師がヒントを出しながら、み言葉を読み生徒が答える（細かい章節にこだわらず、詩編、イザヤetc. 大まかな方法でも良い。当てずっぽうに答える生徒を大切にしたい）。

〈参考聖書箇所〉

アダム契約（原福音）創世記3:15

ノア契約 創世記8:15～22

アブラハム契約 創世記12:1～3

15:5～6

17:1～8

22:11～18

モーセ契約（シナイ契約）出エジプト24:3～8

（青銅の蛇）民数記21:4～9

（悔い改め）レビ26:40～45

（モアブ契約）申命30

ダビデ契約 サムエル下7:12～16

メシア預言 「メシア詩編」

詩編2「メシアの栄光」

8「最後のアダム」

16「埋葬、復活、昇天」

22:1～22「苦難」

24「栄光の王」

40「メシアの受肉」

41「ユダの裏切り」

45「王の詩編」

68「復活」

69「受難」

72、89「永遠の王座」

102「変わることはないお方」

110「祭司、王、裁き主」

118「隅の親石」

132「ダビデの永遠の王座」

「しもべの歌」 (1)イザヤ42:1～4

(2)イザヤ49:1～6

(3)イザヤ50:4～9

(4)イザヤ52:13～

53:12

イザヤ7:14、28:16

ダニエル7:13

ミカ5:1～5

ゼカリヤ6:12～13、9:9

対話の手掛かりとして……

①クリスマスは「光の降誕祭」とも呼ばれます。街に出ると、美しいイルミネーションの光が輝いています。その大きな光を前にして、圧倒されたり、心温まることもしばしばあります。しかし、クリスマスと光が深く結びついているのは、イエス・キリストが、「世の光」としてこの世界に来てくださったからです（ヨハネ8:12）。今年のクリスマスもまことの光として来てくださった主イエスに心を向けましょう。

②光が光として美しく見えるのは、真っ暗な闇があたりを覆っている時です。明るい昼間に、どれだけ光を灯しても、その美しさは際立ちません。しかし、クリスマスに見る光は、光が光として美しく輝くために意図的に、あるいは雰囲気を出すために暗くしているではありません。「闇の中を歩む民は、大いなる光を見／死の陰の地に住む者の上に、光が輝いた」（イザヤ9:1）主イエスがお生まれになる何百年も前、旧約の民は、闇の中を歩んでいました。闇というのは、太陽の陽が沈んだ、真っ暗な夜のことでありません。どれだけ太陽の光に照らされた明るい道を歩んでいても、そこを歩く人間の心が闇に覆われていることがあります。その闇とは人間の「罪」のことです。罪の闇が、人間の心を覆うとき、どれだけ歩き続けたとしても、いのちの光を見出すことはできません。その先に見えるは「死」という深い闇だけです。

③誰も闇を好む人はいないでしょう。誰もが明るくて、喜ばしい人生を歩みたいと願っています。まさに光り輝く人生を生きたいのです。そのために、一所懸命努力したり、自分磨きをして、自分を美しくしようとするのではないのでしょうか。でも、輝き切れない自分に気付かされるこ

とがあります。あるいは、一度手に入れた栄光が色褪せてしまうことがあります。自分で自分に光を当てる生き方を志していたはずが、いつの間にか闇の中を歩んでいるということがあるのではないのでしょうか。そして、そういう闇の中を歩いている自分の将来を、希望を見出すことができず、絶望という闇の中に座り込んでしまうのです。クリスマスの出来事は、そのような罪の闇、絶望の闇、死の闇の中に、救いと希望といのちの光がともされる時なのです。それは人間が造り出す光ではありません。最初勢いよく輝いていても、最後には朽ちていくような空しい光ではありません。永遠に私たちの歩みを照らし出してくれるいのちの光なのです。

④やがて救い主として、この世界にお生まれになるイエス・キリストについて、イザヤは次のように言っています。「その名は、驚くべき指導者、力ある神／永遠の父、平和の君」（イザヤ9:5）。ここで一つだけ、「驚くべき指導者」という言葉に注目しましょう。ある翻訳では、「指導者」という言葉を「助言者」と訳しています。また、ある英訳聖書では、「カウンセラー」と訳されていました。世の光として来てくださった主イエスは、ただ死の陰に光を照らしてくださるわけではありません。そこから立ち上がって歩き出すことができるように、私たちの手を取って、正しい道に導いてくださるのです。キリストの十字架によって、罪と死から解放されましたが、私たちの歩みの中には、まだ様々な闇があり、それらと立ち向かって生きていかなければいけません。しかし、主イエスは生きておられるのです。まことのカウンセラーとして、今も、そしてこれからも私たちの悩みに心を傾け続けてくださり、相応しい助言を与えてくださるのです（ヘブライ4:15）。その方の声に、私たちも耳を傾けたいのです。

テキスト
参照教理問答

ルカによる福音書 1章26～38節
子どもカテキズム 問22
ウェストミンスター小教理問答 問22

〈聖書テキストの解説と黙想〉

①テキストの概要

ルカによる福音書1章26～38節はクリスマスの時期に教会学校や主日の礼拝でよく読まれる箇所である。救い主、イエス・キリストの誕生が予告され(31節)、イエス・キリストがどのようなお方かが明らかになる(32,33節)。そして戸惑いながらも神様の言葉を信頼するマリアの信仰(34～38節)が示され、キリストの誕生へと物語は進む。イエス・キリストの誕生、キリストの使命、神の言葉に応答する信仰者。この箇所においてはこうしたクリスマスの本質を知るのに恰好のテキストだといえるだろう。

②天使ガブリエルと処女降誕

しかしながら、このテキストにはいくつかの難しさがある。一つは、天使ガブリエルの存在である。この天使をどのように考えるのか。小さい子どもならば、そのまま受け入れてくれるだろうが、年を重ねるごとに天使という存在そのものに懐疑的になってくるだろう。もしくは、テレビやゲームによって描かれている聖書とは似ても似つかない天使をイメージする生徒もいるかもしれない。また、処女降誕という超自然的な出来事についても、子どもにどのように話せば良いのか、難しい問題である。処女降誕はキリストのご性質である無罪性、神であり人である二性一人格といった教理を考える時に非常に重要な教えである。しかしながら、ことがらそれ自体は容易に説明ができるものではない。天使にしても、処女降誕にしてもこうした問いに理想的な答はないだろう。しかし、ひとつ考えられるのは、理屈によって天使の存在や処女降誕を信じるように説得するのではなく聖書に記されている事実を、淡々と確信をもって語ることはないだろうか。天使にしても処女降誕にしても常識的にいえば信じることは困難であ

る。これらのことを子どもたちが受け入れるとすればそれは聖霊なる神の働きである。聖霊の働きに期待し、委ねる。そのためにも御言葉に集中して子どもたちの反応を必要以上に気にすることは避けたい。教師の皆様方が確信をもって語る姿をもって証しとしていただきたい。

③解説

(1) エリサベトとマリア

ルカ1:26～38節は前の段落(1:5～25)と密接な関係がある。1:5～25の段落においては不妊の女であったエリザベトに後の洗礼者ヨハネとなる男の子の誕生が予告される。その出来事を受けて、主イエスの誕生の予告がマリアに告げられる。エリサベトは高齢での出産であり(1:18)、マリアは男性を知らずしての出産である(34節)。エリサベトの出産は非常に困難なものであるし、マリアの出産に至っては生理的には不可能なものである。しかし、この両者にいと高き方の力(35節)が及んだ。今回の説教は前段落と連続していないので、エリサベトの話をする必要はないかもしれない。しかし、エリサベトの身に起こった出来事も踏まえた上で、いと高き方の力について思い巡らしたい。

(2) 天使ガブリエルの訪問

冒頭の「六か月目に」という言葉とガブリエルの登場は前述のようにイエス・キリストの誕生と先行する物語を結びつける。ヨハネ誕生の予告から6か月目にガブリエルはナザレに遣わされたのである。ガブリエルは老女エリサベトとは異なりおとめであるマリアのところに遣わされる。マリアはダビデ家に属するヨセフと婚約していた。当時のユダヤでは、婚約とは同居はしていないが実質、夫婦であった。ヨセフがダビデ家の出身であることはヨセフの子どももダビデ王家系に属することを意味している。

(3) 天使の挨拶と戸惑うマリア

マリアのもとに遣わされた天使は「おめでとう、恵まれた方」と語る。後続する「主があなたと共におられる」を強調している。この2つの言葉はマリアが特別に選ばれた人物であるという点を強調している。マリアは、天使そのものに戸惑ったということよりもむしろ、その言葉の意味について戸惑った。当時、男性が女性に対して「主があなたと共におられる」とあいさつすることはなかったからである。

(4) イエス・キリスト誕生の告知

戸惑うマリアに対して、天使は「恐れることはない」(30節)と語る。そして、マリアに対するメッセージを語る。このメッセージは4つに分けることができる。①彼女はイエスという名の息子を得る(31節)。イエスとは、ヘブライ語ヨシュアがギリシャ語化したもので、「神は救い」という意味。②その子は神の子である(32節、いと高き子とは天地創造の神のこと)。③彼はダビデの王位を受け継ぐ(32, 33節。この点については後述)。④その子の誕生は聖霊が彼女の上に降ることによってもたらされる。そして、いと高き方の力がマリアに臨む(35節)。ゆえに、このお方は聖なる者、神の子とよばれる。このようにして、この不可解な妊娠が何よりも神の主権によってなされることを示し、おとめマリアの妊娠と生まれてくるイエス・キリストが神の子であることを強調する。このようにルカは非常に丁寧かつ慎重にマリアの妊娠の意味とそれがもたらすものを丁寧に述べる。これらのことが起こるしるしとして、不妊の女エリサベトへの言及がされている(36節)。それは「神にできないことはなにもない」(37節)ことの証明でもある。

(5) ダビデの王座

イエス・キリストがこの地上に来てくださった意味はなんだろうか。キリストの業の中心点は十字架と復活である。しかしながら十字架と復活については福音書が進むにつれて明らかになっていく奥義である。マタイ福音書のクリスマス物語ではこのお方が罪からの救い主であることが告白

されているがルカ1章ではより積極的にこのお方がダビデの王座を頂くということが予告されている(32節)。クリスマスということで、キリストの到来の意味を語ることはふさわしいことである。そしてそれは「ダビデの王座を受け継ぐ者」としてこの地上にきてくださったことを覚えたい。

「ダビデの王座」とは何か。これを知るためにはナタン預言と呼ばれるサムエル記下7:12~16節を知ることが重要である。ナタンはダビデ王にダビデ王の子孫がダビデの王国と王座をとこしえにすると預言した。王は神様から民を治めることを委ねられた者である。王の働きは神様のご支配を見える形で代行することにある。その中には罪からの救いも含まれるし、さらに救ったものをきよめていく働きも含まれる。こうした王としての働きを確固たるものにしたのがイエス・キリストである。現代の教会に集う一人一人もこうした主イエスの王座に連なるものである。

(6) マリアの信仰

マリアが天使とのやりとりで、どこまでその意味を悟ることができたのかは明らかではない。しかし彼女はその言葉に戸惑いながらも、「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように」(38節)と天使に告げた。こうしたマリアの信仰に思いを馳せたい。プロテスタント教会においてはカトリック教会に対するアレルギーからか、マリアの信仰についてあまり積極的に語られないのかもしれないが、マリアの御言葉への従順は深い。こうした態度を心に留めておくことは大切である。もちろん、こうしたマリアの信仰もマリア個人の資質もさることながら、聖霊の賜物だと考えたい。

マリアのように主の御前に頭をたれ、御言葉がその通りになりますようにという信仰を子どもたちに共に分かち合いたい。それは、「恵まれた」ことであり、主が共にいてくださるということである。聖霊に生かされるということは、まさに、御言葉に従いながら、日々を生きることである。

(小宮山裕一)

テキスト ルカによる福音書 1章26～38節
子どもカテキズム 問22

〔単元のねらい〕

クリスマスを前にして、イエス・キリストの母であるマリアに告げられた告知とマリアの信仰に目を向けたい。ガブリエルから与えられたメッセージの中身を深く探れば、イエス・キリストがこの地上に来てくださったことの意味を深く探るクリスマスメッセージとなる。それと共に、マリアの信仰に目を向けるならば、神の御言葉に謙虚に信頼する信仰者としての決心を促すことになる。このどちらかに特化することも可能であるし、特にクリスマスのメッセージなので前者に焦点を当てても良い。しかしながらこの両方がマリアの身におこっていることなので、この両方について考える時としたい。イエス・キリストがこの地上に来てくださったということを知ることは御言葉を信頼するということにつながる。

イエスさま誕生の予告

もうすぐクリスマスです。街はすっかりクリスマスにむけて彩られています。でも、クリスマスはイエス様の御誕生をお祝いする日であるということを、この礼拝を通して思い出したいと思います。

今日はイエス様のお母さんであるマリアが登場してきます。マリアは神様を熱心に信じていました。それでも特別な人ではありません。田舎にあるナザレという街にすんでいる、ごくごく普通の女性でした。マリアにはヨセフという婚約者がいました。そんなマリアさんにとって驚くべき出来事が起きたのです。それはある日、いつもと変わらない生活を送っていたマリアさんのところに、ガブリエルという天使が訪れたのです。天使とは、神様の使いです。神様からのメッセージ、伝言を運ぶ人のことです。ガブリエルは神様からの特別なメッセージを預かってマリアのところに來たのです。「マリア、おめでとう。あなたは神様から祝福されています」。天使はこうにマリアに告げました。さらに天使は続けます。あなたは「男の子を産みますよ」とマリアに対して語ったのです。さらにマリアが産む男の子はただの男の子ではありません。それは旧約聖書の時代から人々が楽しみに待っていた人物だということです。当時の

人々は神様の代わりに人々を導いて、助けてくれる救い主の存在を心待ちにしていました。マリアが産むこどもはまさにこうした救い主だと天使はいったのです。人々を罪から救い、人々をずっと治め、守ってくださる。こうした王様が、マリアを通してあたえられるのですよ。天使はこうにマリアに告げたのです。

マリアさんはこのメッセージを聞いて驚きました。マリアはこどもを産む予定はなかったからです。マリアはヨセフとまだ一緒にすんでいなかったのです。こどもができるわけではありません。ですから、マリアは天使にむかって「そんなことはありませんよ」と告げたのです。

ところが、天使はさらにマリアに話しかけます。マリアは驚きました。なぜならば、マリアが子どもを産むということは人間の常識をこえたあり得ない方法によるのです。それは聖霊なる神様の力だと天使はいいました。神様の不思議な力につつまれて、マリアは子どもを産むのです。マリアは確かに子どもを産むのです。しかしそれはヨセフとの間にできる子どもではなくて、神様の力によって誕生する特別な子どもです。その子どもは特別に聖められていて、罪のない仕方でお生まれになるのです。このお方こそ、イエス・キリスト

です。

クリスマスはイエスさまの誕生をお祝いするときですね。そして今、イエス様のお誕生が天使によって予告されたことを学びました。ところでみなさんイエス様の名前の意味を知っていますか。イエス様のイエスってね、「主は救い」という意味なんです。主なる神様は私たちを救ってくださるということなんです。まさに、イエスさまにぴったりの名前だと思いませんか。イエス様は私たちを罪から救ってくださり、そして王様として導いてくださるお方です。そのイエス様の御誕生は最初から最後まで、神様の力で守られていたんですよ。

イエスさまを産むことになると告げられたマリヤは戸惑いながらも、天使の言葉を神様の言葉として受け入れました。「神様の言葉どおりになりますように。私の身に何が起こっても、神様のこ

とを信頼します」マリヤはこのようにいったんです。

マリヤは神様の御言葉を心の底から信じました。そして、信頼しました。そのようなマリヤを神様は最後までお守りくださり、マリヤは無事に男の子を産みました。それが、イエス・キリストですね。

なんで神様がマリヤを選んだのか、わかりません。でも、一つ確かなことはマリヤは神様の言葉を信頼する人でした。このようなマリヤを神様は祝福してくださったのです。今を生きる私たちは、マリヤのように救い主を産むことはできません。しかし、マリヤのように御言葉を信じることはできます。これはいつの時代にも変わらない祝福です。この祝福を握りしめて、クリスマスまで歩みましょう。

(小宮山裕一)

[今週の暗唱聖句] ルカによる福音書 1章38節

マリヤは言った。「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように。」

そこで、天使は去って行った。



〈ねらい〉

今週、来週はイエスキリストの誕生を、ルカ独自の聖書記事（マリアへの受胎告知、羊飼いの登場）によって学ぶ。貧しい者が高められ、大きな役割を与えられることは、ルカの救いの神学の中心でもある。我々は現代の頭でみ言葉に触れている。人権も生まれながら当然のごとく与えられていて、それ以外の状況を知らない。当時の時代背景を説明されてもなかなか理解できないのである。少しずつでも聖書の時代を学んで、より深く聖書を読むことができるようにしていきたい。特に今週は受胎告知をされるマリアを中心に、ザカリアと比較をしながらマリアの信仰に注目しつつ考察したい。

～天使からそれぞれ告知されたマリアとザカリアについて～

子供たちと対話形式で話を進行させていきたい。

1. マリアとザカリア両者の当時の身分の違い

* マリア＝「一介の田舎の小娘」(榊原康夫、1972聖書講解ルカの福音書 P30)

無学、社会立場も当然低い。

* ザカリア＝祭司（聖職者）

当時、祭司はユダヤの指導的階級。王家は廃れていた。⇒マタイ1:18～25参照、ダビデの子孫が田舎のナザレで大工であった。

この様に両者の間にはこの世的には、大きな隔たりがあったのである。

2. 天使から告知を受けた内容はそれぞれどんなことであったか？ また両者はどう対応したか？

天使の告知

* マリア＝1:26～33

* ザカリア＝1:13～17

両者の対応と結果

* マリア＝1:34、1:38

理解ができないので、聞き返したが、素直に信じ身を献げた。

* ザカリア＝1:18

しるしを求めた。口が閉けなくなる。

⇒この両者の違いはどこにあったのかを、子供たちと考えたい。

(例えば)

① どうして、立派な祭司で当時のユダヤ人の指導的階級であったザカリアより、マリアのほうが天使の言葉を素直に受け入れたのか？

② 初代教会の人たちはどういう気持ちで読んだのだろうか？

③ 信仰ってなんだろうか？（ヘブライ11:1）

等々。

対話の手掛かりとして……

①イエス・キリストの母となったマリアは、聖書の登場人物の中でも、特別な存在として、カトリックなどでは、礼拝の対象にもなっています。プロテスタントでは、そのようなことはいたしません。しかし、マリアの信仰の姿に倣うことはできるでしょう。そして、マリアだけが特別美しい存在だというのではなくて、私たちもまたマリアのような美しい信仰に生きることへと招かれているのではないのでしょうか。

②大人ではなく、「少女」と言った方が相応しいマリアに、天使が告げたことは、驚くべき内容でした。戸惑いと恐れ、そして不安が彼女の心に一気に襲いかかります。決して、自分は神の子を宿すような立派な人間ではありません。まだ結婚していないにもかかわらず、赤ちゃんを身ごもるというあってはならないことが、自分の身に起こっているというのです。当時の掟にしたがえば、このことは死に値しました。そんなマリアを支えたのは、ただ神様の言葉だけでした。他には何も無いのです。「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身になりますように」(ルカ1:38)。ここにマリアの美しさの一つがあるのではないのでしょうか。私たちが頼るべきもの、それは神様の言葉だけです。マリアは学識高い聖書学者でもありません。周りから尊敬されるような立派さに生きていたわけでもないでしょう。豊かな財産も高い地位も彼女には無縁でした。しかし、そうであるがゆえに、神様の言葉に自分を委ねたのです。

③神様の言葉が、自分の中に実現していくことの中に、私の幸いがあると信じていたマリアは、「わたしは主のはしためです」と告白しています。「はしため」というのは、「女奴隷」という意味です。奴隷が主人に仕えるように、私も主

にお仕えしていきますと信仰を言い表わしています。自分が主人になるのではなく、奴隷(しもべ)として主に仕えていく姿に、人間の本当の美しさがあるのです。また、46節以下には、「マリアの賛歌」と呼ばれる歌が記されています。マリアは、「わたしの魂は主をあがめ……」と歌い始めます。「あがめる」という言葉は、ラテン語で「マグニヒカート」、日本語で「大きくする」という意味です。自分を大きくするのではなく、神様を大きくしていくのです。たとえ、ちっぽけな私であっても、神様の名があがめられるとき、神様の憐れみが注がれていること、それほどに神様の目に尊い存在であることを知ることができるのです。

④「しかし、マリアはこれらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らせていた。」(ルカ2:19) 羊飼いたちは、自分たちの身に起こったことを幼子イエスの周りにいた人たちに話します。他の人たちは、いったい何のことかさっぱりわかりません。しかしその中で、マリアだけが、クリスマスの出来事を心に納めて、思い巡らせていたのです。受胎告知から始まり、ベツレヘムまでの長い道のり、そして最後には家畜小屋でイエス様を産むことになります。恐れ、不安、疲れ、悲しみ、痛みなど、イエス様を産むまでに、本当に心揺らぐ日々だったに違いありません。しかし、その中に、「主が共にいてくださる」(ルカ1:28)ということが確かであることを知りました。神様の言葉は必ず実現する。「神にできないことは何一つない」(ルカ1:37)ということ、マリアは経験しました。クリスマスの時、私たちもそれぞれに、主がしてくださったことを、心に納め、静かに思い巡らす時を過ごしたいと思います。そこに生まれてくる御言葉の実り期待しましょう(詩編1、イザヤ55:10～11)。

テキスト ルカによる福音書 2章8～20節
 参照教理問答 子どもカテキズム 問22
 ウェストミンスター小教理問答 問22

〈聖書テキストの解説と黙想〉

8節 その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。

ベツレヘムの郊外で、羊飼いたちが見守っていた羊たちは、神殿のいけにえ用と言われています。しかし、そのように神さまに献げる羊たちを見守っていた羊飼いたち——特に世界で最初のクリスマスの夜に、徹夜で、羊の群れの番をしていた羊飼いたちは、律法学者やファリサイ派の人々から見下げられていたことでしょう。なぜならば、彼らはその仕事上、安息日の律法をはじめ、当時の律法、規則を守ることが難しかったからです。しかし、神さまは、そんな羊飼いたちを選ばれ、世界で最初のクリスマス（キリスト礼拝）へと招かれました。

9節 すると、主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。

主の天使には、主なる神さまの栄光が反映しています。夜なのに突然明るくなりました。羊飼いたちは恐れて当然ですが、何よりも、神さまの栄光に触れて、彼らは永遠の滅びをおぼえて恐れたのでしょうか。イザヤが預言者の働きに召し出された時のことを思い出します。「災いだ。わたしは滅ぼされる。わたしは汚れた唇の者。汚れた唇の民の中に住む者。しかも、わたしの目は／王なる万軍の主を仰ぎ見た」（イザヤ6:5）。

10節 天使は言った。「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。

このベツレヘム郊外にいる羊飼いたちは、社会的に見下げられていましたが、神さまは、彼らを見捨てられず、彼らをご自分の民のメンバーとし

ておられました。そして、主の栄光に照らされても、決して、永遠の滅びを恐れることのない理由が告げられました。

11節 今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。

「救い主」は、この当時、ローマ皇帝に対する尊称と言われています。つまり、ローマ帝国臣民にとって、皇帝アウグストゥスこそが「救い主」だったのです。しかし、主の天使は告げました。この日ダビデの町ベツレヘムでお生まれになったお方こそ「救い主」であると。そのお方こそ、主なる神さまであり、メシア、キリストなのです。この当時、ヘブライ世界では、王こそメシア、「油注がれた者」でしたから、その主なる神さまにして、王なるメシアこそ「救い主」だということなのです。

12節 あなたがたは、布にくるまって飼う葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」

ローマ皇帝に匹敵するような主メシアであるならば、エルサレムの王宮で誕生しても良さそうです。しかし、実際にそのお方がお生まれになった地は、偉大なダビデ王の故郷ですが、この当時は「忘れられていた地」ベツレヘムでした。しかも、そのお方が寝かせられたのは、立派なお屋敷のベビーベッドでなく、飼う葉桶でした。さらに王子が着るような立派な産着でなく、布にくるまれたただけでした。このお方が、布にくるまれて飼う葉桶に寝かせられた。これは、栄光の天におられたお方が、この地上へと徹底してへりくだられたことの目に見えるしるしでした。

13節 すると、突然、この天使に天の大軍が加わり、神を賛美して言った。

突然、一人の天使に天の大軍が加わりました。主なる神さまの栄光の輝きは一段と増したことでしょう。天の大軍は讃美歌を大合唱したのです。このクリスマスの時期、よく演奏されるヘンデルの『メサイア』「ハレルヤ・コーラス」も私たちの心に響きますが、この時ばかりは、羊飼いたちの心ばかりでなく、天地にも響いたことでしょう。

14節 「いと高きところには栄光、神にあれ、／地には平和、御心に適う人にあれ。」

救い主なるメシアのご降誕によって、神さまに栄光が帰され、人々に平和がもたらされる。神さまの御心に従って昔からヘブライ人に約束されていた救い主なるメシアを信じるならば、神さまとの歪んだ関係ばかりか、隣人との歪んだ関係も、回復へと導かれることが、この大合唱を通して示されました。このお方は、何から救ってくださる救い主なのか。神さまの御心に従って救い主なるメシアを信じるならば、神さまと隣人との関係をねじ曲げる罪の力、そして、永遠の滅びから救ってくださる救い主です。

15節 天使たちが離れて天に去ったとき、羊飼いたちは、「さあ、ベツレヘムへ行こう。主が知らせてくださったその出来事を見ようではないか」と話し合った。

羊飼いたちは、神さまの御心に従って、救い主なるメシアの到来を待ち望んでいたことでしょう。そんな羊飼いたちは、主の天使のお告げを受けるや、早速、その出来事を見に行きました。

16節 そして急いで行って、マリアとヨセフ、また飼い葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てた。

急いで見に行く姿に、ずっと待ちに待っていたことが実現したことへの喜び、ワクワク感をおぼえます。ベツレヘムに行くと、天使が告げた通りでした。

17節 その光景を見て、羊飼いたちは、この幼子について天使が話してくれたことを人々に知らせた。

この「人々」とは、マリアとヨセフのことでしょうか。それとも、マリアとヨセフの他にも、その場に人々が集まっていたのでしょうか。文脈を素直に読むと、飼い葉桶の救い主を中心に何人かの人々がいたのではないのでしょうか。その人々に羊飼いたちは、天使の告知を知らせました。つまり、この飼い葉桶の乳飲み子に関する神さまの御心を伝えたのです。世界で最初のクリスマス（キリスト礼拝）は、キリスト伝道でもありました。

18,19節 聞いた者は皆、羊飼いたちの話をも不思議に思った。しかし、マリアはこれらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた。

ルカは、マリアを黙想する人として描いています。私たちも、マリアと共に、キリスト降誕の出来事を思い巡らして、罪からの救い主なるキリスト降誕によるさまざまな恵みを味わいたいと願います。

20節 羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて天使の話したとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。

永遠の昔からの御心の実現として降誕なされた罪からの救い主キリスト・イエスを羊飼いたちと共に礼拝しましょう。それが私たちの神礼拝です。
(長谷川潤)

テキスト ルカによる福音書 2章8～20節
子どもカテキズム 問22

〔単元のねらい〕

小学校高学年を意識して説教展開例を作りました。前半、聖書のクリスマス物語、後半、クリスマスの教理の適用となっています。幼稚園児や小学校低学年に対しては、教理の適用は省略して、クリスマス物語で十分かも知れません。それは、クリスマスの教理を無視して良いということではなく、説教者がクリスマスの教理を十二分に咀嚼しているならば、クリスマスを物語ることでクリスマスの教理も語ることになるということです。しかし、言うに易く、行うに難し。幼稚園児の魂にも届くイメージ豊かな言葉の獲得に、世間的にも有名なクリスマスだからこそ励みたいと願います。

主イエスさまのお誕生

愛するお友だち、メリー・クリスマス！クリスマス、おめでとうございます。

毎年、12月25日はクリスマス。今年は来週の木曜日です。まだ、ちょっと早いけれど、こどもの教会（日曜学校）のお友だちは、もう、クリスマスが何の日か、よく知っているよね。

さっき、読んでくださった聖書には、実は、世界で最初のクリスマスをお祝いした人たちのことが書いてあったの。ユダヤのベツレヘムの町外れで、羊飼いたちがいつものように夜も寝ないで、羊の番つきをしている時のことでした。突然、ピカッて、雷が落ちたかと思うぐらいに周りが明るくなって、一人の天使が現れました。そして、天使は羊飼いたちに知らせました。

「今日、みんなの救い主がお生まれになりました」。

そうしたら、今度は、天使がいっぱい現れて、神さまを賛美して言いました。

「天の神さまの栄光が現されますように。地の人々が平和でありますように」。

このようにたくさんの天使たちが神さまを賛美した後、消えていなくなりましたが、羊飼いたちは、すぐにユダヤのベツレヘムの町に行って、飼い葉桶に寝かせられている赤ちゃんを見つけました。そう、この赤ちゃんこそ、みんなの救い主としてお生まれになったイエスさまです。実は、こ

の羊飼いたちはね、神さまが、ずっとずっと昔から、みんなの救い主をプレゼントしてくださるというお約束を知っていて、そのお約束が本当になるのをまだかまだかと待っていた人たちなんです。それで、神さまが、昔からのお約束の通りに、みんなの救い主をプレゼントしてくださったので、神さまにありがとうございます、の礼拝をしたのです。実は、クリスマスは、天の父なる神さまが、イエスさまという、とてもすばらしいプレゼントをしてくださったことを思って、神さまを礼拝して、みんなの救い主のお誕生をお祝いする日ですね。

それなら、イエスさまはどんな救い主なんでしょう？

私たち、ぼくたちは、神さまのおっしゃることを全部守ることができません。守るところか、いつも、神さまがおっしゃることに逆らっているの。たとえば、神さまは、全ての人を愛しなさいとおっしゃいました。お父さん、お母さんの言うことを聞きなさい！ 兄弟と仲良くしなさい！ お友だちを大事にしなさい！とおっしゃいました。けれども、お父さんやお母さんに「うるさい！」と言って、我がまま言ったり、兄弟げんかをしたり、友だちの悪口言ったり、いじめたりしてしまいます。神さまのおっしゃることを全部守らないならば、実は、天の父なる神さまの所には行けないの。そ

んな私たち、ぼくたちですが、神さまは、そんな私たち、ぼくたちがお嫌いではありません。神さまのおっしゃることを守れない私たち、ぼくたちでも愛してくださいます。ですから、神さまのところに來ることができるようにって、この地上にイエスさまをお送りくださったの。そして、そのイエスさまを信じるならば、神さまは、私たち、

ぼくたちの罪をお赦しくださって、神さまのところにいくことができるようにしてくださいます。そういうイエスさま、そう、罪からの救い主のお誕生をお祝いしながら、イエスさまという、とてもすばらしいプレゼントをしてくださった神さまへのありがたい気持ちで、今年のクリスマスも過ごしましょうね。
(長谷川潤)

〔今週の暗唱聖句〕 ルカによる福音書 2章 11節

今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。

この方こそ主メシアである。



〈ねらい〉

イエス様がこの世に来られた時、イエス様を救い主として真っ先に拝みに来たのは、羊飼いたちでした。羊飼いは、ユダヤの社会においては、その生活形態から、安息日を守れないなど律法の枠から外れ、差別された人々でした。イエス様の誕生の知らせは、まずそのような弱く差別された人々にもたらされたことを知り、それゆえにイエス様の救いはあらゆる人に与えられるものであったことを覚えましょう。

〈展開例〉

確認と話し合い

- ・羊飼いさんたちは、どこで、そしていつ、仕事（羊の群れの番）をしていましたか。
- 野宿をしながら。夜通し。
- ・そのような羊飼いさんたちは、ユダヤの人々からどう思われていたでしょう。
- 安息日の律法と差別について考えましょう。
- ・天使たちが現れた時、羊飼いさんたちはどうしましたか。そして、それは何故だったでしょう。
- 非常に恐れた。
- ・天使たちは、羊飼いさんたちにどのようなことを告げたでしょう。
- 10～13節をもう一度みんなで読みましょう。
- ・「民全体」の「民」とは誰でしょう。
- 直接的にはユダヤの民ですが、実は全世界の民であることを考えましょう。
- ・ダビデの町とはどこでしょう。また、何故、救い主は飼う葉桶の中に寝かされているのでしょうか。

→クリスマスの物語の復習をしましょう。

- ・天の大軍は、何と言って神様を賛美したでしょう。
- 14節をもう一度みんなで読みましょう。
- ・天使たちがいなくなったあと、羊飼いさんたちはどうしたでしょう。
- 羊飼いさんたちは、すぐにその場を発って、ベツレヘムのイエス様のもとに向かいました。羊飼いさんたちは、普段なら、命の次に大切な財産である羊たちをはったらかしにして出かけることなんてしなかったはずです。それだけ、天使たちの告げたことが喜びに満ちあふれたメッセージであったこと、そして、羊飼いさんたちがそれを素直に受け入れる信仰を持っていたことを考えましょう。
- ・羊飼いさんたちは、イエス様に会ったあと、どうしたでしょう。
- 羊飼いさんたちはそのことを人々に話して回りました。差別された羊飼いさんたちが、福音（良き知らせ）の語り手とされた、神様の御業について考えましょう。

〈祈り〉

天の父神様、尊いお名前を賛美致します。今日は、イエス様の誕生日を祝うクリスマスです。お生まれになったイエス様のもとには、まず羊飼いさんたちが呼ばれました。イエス様の救いは全ての人に与えられたものであることを感謝します。そして、私たちも、羊飼いさんたちのように、イエス様を救い主と信じ、その嬉しい出来事を多くの人に伝えることが出来ますように。イエス様の御名によってお祈りします。アーメン。

対話の手掛かりとして……

①クリスマスは、「神の冒険」と言われます。

ある人がこんなことを言っています。「この救い主は、誰もがこの方こそ救い主だとすぐにわかるような、光輝く肉体を持っておられたわけでもない。飼葉桶の中に寝かせてある小さな赤ちゃんでしかない。神さまはたいへんな冒険をなさった。すべての民に与えられる大きな喜びを、この小さな赤ん坊の肉体にお委ねになった。」幼子の肉体、それは大人の片手に乗ってしまうような小さな肉体です。誰かがぎゅーっと力を入れれば、すぐに息耐えてしまう弱い命です。しかしそのような小さな命に、神様は救いの御計画をお委ねになったのです。「あなたがたは、布にくるまっている飼葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」(ルカ2:12)

クリスマスに与えられた「しるし」——それは誰もが簡単に見つけることができるものではないと思います。キリストの十字架に、多くの人々が躓き、愚かだとあざ笑ったように(Ⅰコリ1:18)、人間の赤ちゃんとしてお生まれになり、飼葉桶に寝かされている幼子イエスを、私の救い主として受け入れて、信じることができないという人もいることでしょう。

②しかし、泊まる場所もなく(ルカ2:7)、家畜小屋で生れなければいけなかったということの中に、また私たちと同じ肉体をもった人間としてお生まれくださったという出来事自体の中に(ヨハネ1:14)、既に喜びの知らせがあるので

す。今、自分が居る場所は、家畜小屋のように真っ暗で、臭くて、汚い場所かもしれません。誰からも受け入れてもらえず、隅っこに追いやられている自分が、惨めに映っているかもしれません。そのような人間として生まれたこと、そしてここに居ることを否定したいかもしれません。しかし、神様はそのようなところに喜びを告知らせてくださいました。それがクリスマスの出来事です。人間が到底生きような場所でないところを、主イエスは御自分の居場所としてくださいました。自分なんかなくなってしまうばいいのにとと思うほどに惨めな人間を、なお愛し、私と同じ人間としてこの世界に生まれてくださいました。なぜなら、神様は私たち人間を愛しておられるからです。神様は、あなたがここに居ることを、存在することを心から喜んでおられるからです。

③「さあ、ベツレヘムに行こう。主が知らせてくださったその出来事を見ようではないか」(ルカ2:15) 天使が告げたキリスト降誕の知らせを聞いた羊飼いたちは、ベツレヘムに行くことを、決意し、ついに、幼子イエスにお会いすることができました。神様は、今年のクリスマスにおいても、主イエスとの出会いを用意してくださっています。私たちに求められていることは、その招きに応えることです。ぐずぐずしている暇はありません。「急いで行って」(ルカ2:16)とあるように、主に会いに行きましょう。もちろんクリスマスだけではありません。いつでも主はあなたの名を呼び、招いておられます。その声に応えて歩み出す時、あなたの人生は賛美に満ち溢れるものとなるのです(ルカ2:20)。

テキスト
参照教理問答

出エジプト記 24章1～18節
子どもカテキズム 問24,65
ウェストミンスター信仰告白 第7章 人間との神の契約について
ウェストミンスター信仰告白 第8章 仲保者キリストについて

〈聖書テキストの解説〉

今日の御言葉は出エジプト記の24章である。エジプトを脱出したイスラエルの民は、19章でシナイ山に到着し、20章で十の言葉（十戒）を、21章から23章で法を与えられる。神は十の言葉を直接イスラエルの民に語られるが、法は、モーセに対して語られる。法は、モーセに示され、モーセをとおしてイスラエルの民に示されるのである。

今日の御言葉である24章は、新共同訳聖書の小見出しにあるように「契約の締結」の場面が記されている。この契約はシナイ山で結ばれた契約であることからシナイ契約と言われる。以下、節を区切って解説していく。

1,2節。主が語られたモーセの言葉。主は、モーセにアロン、ナダブ、アヒフ、およびイスラエルの70人の長老と一緒に主のもとに登るように言われる。しかし、それはシナイ山のふもとまでのようである。彼らは遠くに離れてひれ伏すことを命じられる。しかし、モーセだけは主に近づくことが許される。モーセは他の者とは区別される、聖別された契約の仲介者である。

3～8節。モーセを仲介として神とイスラエルとの間に契約が締結される。「モーセが戻って」とあるが、これは20:21の「民は遠く離れて立ち、モーセだけが神のおられる密雲に近づいて行った」から続いていると思われる。神のおられる密雲から戻ってきたモーセは、「主のすべての言葉とすべての法を民に読み聞かせ」た。「すべての言葉」は20章に記されている十の言葉である十戒を、「すべての法」は21章から23章に記されている法を指しているのであろう。モーセはそれをすべて心の板に記しており（暗記しており）、民に読み聞かせた。すると民は皆、声を一つにして、「わたしたちは、主が語られた言葉をすべて行い

ます」と答えた。これによって、イスラエルの民の契約締結の意志が表明されたのである。そのイスラエルの意志を確認した後で、モーセは主の言葉をすべて書き記した。「主の言葉をすべて」とあるが、これは3節の「主のすべての言葉とすべての法」であろう。モーセは朝早く起きて、山のふもとに祭壇を築き、十二の柱をイスラエルの十二部族のために建てた。これはイスラエルの十二部族すべてが主と契約を結ぶことの象徴である。モーセはイスラエルの若者を遣わし、焼き尽くす献げ物をささげさせ、和解の献げ物として主に雄牛をささげさせた。モーセが若者を遣わしたのは、まだレビ人が祭司職に任命されていなかったためである。焼き尽くす献げ物は完全な献身を表わす。モーセは和解の献げ物である雄牛の血の半分を取って鉢に入れて、残りの半분을祭壇に振りかけた。「祭壇」は主が臨まれる場であり、主なる神を表わしている（20:24参照）。それから、モーセは契約の書を取り、民に読んで聞かせた。「契約の書」とは、4節でモーセが書き記したものである。つまり、3節でモーセが民に読み聞かせたすべての言葉とすべての法である。具体的には、20章から23章に記されているものである。民が「わたしたちは主が語られたことをすべて行い、守ります」と言うのと、モーセは血を取り、民に振りかけてこう言った。「見よ、これは主がこれらの言葉に基づいてあなたたちと結ばれた契約の血である」。契約を締結する儀式として、契約の当事者である主なる神を表わす祭壇と、イスラエルの民に和解の献げ物である雄牛の血がかけられる。このことは、何を意味しているのだろうか？ それは、契約を破ることがあれば、血を流すことになっておかまわないという誓いではないだろうか。創世記の15章に、神がアブラムと契約を結ぶ場面が記されている。そこでは、二つに裂かれ

た動物の間を、契約を結んだ当事者が通り過ぎるという儀式が行われた。ここで、二つに裂かれた動物の間を通り過ぎたのは神だけであったが、この儀式は、もし契約を破ったならば、このような動物と同じようになってかまわないという意志を確認するものであった（エレミヤ34:18参照）。よって、シナイ契約において、祭壇とイスラエルに和解の献げ物である雄牛の血がかけられたことの意味は重いのである。動物犠牲の血はこの観点からも理解することができるのではないだろうか。

9～11節。ここには契約の締結を保証するイスラエルの神とイスラエルの代表者であるモーセ、アロン、ナダブ、アビフおよびイスラエルの七十人の長老たちとの 식사가語られる。ここでの食事は和解の献げ物であったかも知れない。もちろん、ここで飲み食いするのは、モーセたちだけである。しかし、その食事には神が御臨在される。イスラエルにおいて、罪に汚れた人間は聖なる神を見ることができず、神を見た者は滅びると考えられていた（33:20、士師13:22、イザヤ6:5参照）。ここでは微妙な言い回しがなされている。つまり、彼らはイスラエルの神を見たのだが、御足の下にあるサファイアの敷石のようなもののことしか語られないのである。それは大空のように澄んでいたとあるが、このことは主が大空の上の天におられることを暗示しているのかもしれない。ともかく、彼らが神を見ずに死ぬことがなかったのは、神がイスラエルの代表者たちに向かって、「手を伸ばされなかった」からである（9:15参照）。「彼らは神を見て、食べ、また飲んだ」と言われる神とイスラエルの民の代表者たちの食事は、契約が結ばれたことの確かなしりしである（創世26:30参照）。

12節以下は、今回は取り上げない。聖書テキストとして24章全体は長いので、1節から11節までとしても良いのではないかと個人的には思う。

〈説教作成に向けての黙想〉

今回の説教の主題は「契約のしるし」であり、単元の目標は、「契約の恵みに応答することへと招かれていることを改めて確認しよう」である。このことを覚えるとき、私たちは、イエス・キリストの言葉を思い起こさずにはおれない。主イエスは、主の晩餐の席において、杯を弟子たちに与えてこう言われた。「皆、この杯から飲みなさい。これは、罪が赦されるように、多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である」（マタイ26:27,28）。モーセは「契約の血」について語ったが、主イエスも「契約の血」について語る。しかも、それは十字架の上で流されるご自分の血なのである。主イエスは、十字架の上で、私たち律法違反者の身代わりとして、血を流された。そのようにして、私たちに神との真の和解をもたらしてくださるのである。そして、その保証として、私たちは主の晩餐にあずかる。しかし、子どもたちは、まだ信仰告白をしておらず、主の晩餐にあずかることができないことが想定される。そのことを配慮しながら、説教することが求められるであろう。

私たちは今日の御言葉をどのように読み、語ることができるだろうか。やはり、主イエスの血による契約とその保証である主の晩餐を指し示すものとして読み、話すのがふさわしいと思われる。私たちが神と契約を結び神の民となることができたのは、イエス・キリストによることである。神は、私たちの罪を赦し、私たちをご自分の民となさるために、御子イエスを遣わしてください、十字架に引き渡された。イエス・キリストは、私たちに代わって、十字架で血を流すことにより、私たちが神と共に生きることができるようになってくださったのである。使徒パウロはガラテヤの信徒への手紙3章20節で次のように記している。「仲介者というものは、一人で事を行う場合には要りません。約束の場合、神はひとりで事を運ばれたのです」。（村田寿和）

テキスト 出エジプト記 24章1～18節
子どもカテキズム 問24,65

〔単元のねらい〕

出エジプト記24章は、神とイスラエルの民の契約締結について記している。神はモーセを立て、イスラエルの民と契約を結び、イスラエルをご自分の民としてくださった。同じように、神はイエス・キリストを立て、イエス・キリストにあって私たちと契約を結び、私たちをご自分の民としてくださったのである。そのことを子どもたちと一緒に分かち合いたい。

神の契約に生がされている恵みを覚えよう

今日は、2014年最後の主の日です。今年も、子どもの礼拝に出席して、神様をご一緒に礼拝できましたことを感謝したいと思います。

さて、今日は、旧約聖書の出エジプト記の24章を読んでいただきました。小見出しに「契約の締結」とありますように、このところには、神様とイスラエルの民が契約を結んだことが記されています。「契約」という言葉を国語辞典で引くとこう記されています。「当事者の間に約束を取りかわすこと。また、その約束」（『新明解国語辞典第三版』）。神様とイスラエルの民が契約を結んだということは、言い換えると、神様とイスラエルの民が約束を結んだということです。神様は、イスラエルの神となることを約束してくださり、イスラエルの民は、自分たちをエジプトの地から導き出してくださった神様だけを神様とすることを約束したのです。そのようにして、神様は、イスラエルの神となり、イスラエルは神の民となったのです。その約束、契約の様子が4節から8節に記されています。このところをもう一度読みますので、聞いていてください。

モーセは主の言葉をすべて書き記し、朝早く起きて、山のふもとに祭壇を築き、十二の石の柱をイスラエルの十二部族のために建てた。彼はイスラエルの人々の若者を遣わし、焼き尽くす献げ物をささげさせ、更に和解の献げ物として主に雄牛をささげさせた。モーセは血の半分を取って鉢に入れて、残りの半분을祭壇に振りかけると、契約

の書を取り、民に読んで聞かせた。彼らが、「わたしたちは主が語られたことをすべて行い、守ります」と言うとき、モーセは血を取り、民に振りかけて言った。「見よ、これは主がこれらの言葉に基づいてあなたたちと結ばれた契約の血である」。

ここで、モーセは神様とイスラエルの民の間を取り持つ仲介者の役割を果たしています。神様とイスラエルの民が契約を結ぶに当たって、モーセは何をしたのでしょうか？ 先ず、モーセは主の言葉をすべて書き記し、契約の書を作成しました。これは具体的に言うと、20章に記されていた「十の言葉」である「十戒」と21章から23章に渡って記されているもろもろの法を指しています。難しければ、十戒だけを思い浮かべていただければと思います。神様は、イスラエルの民に十の言葉である十戒を与えられましたが、モーセはそれらを書き記して契約の書を作成したのです。また、モーセは山のふもとに祭壇を築き、イスラエルの十二部族のために十二の石の柱を立てました。そして、その祭壇で、焼き尽くす献げ物をささげ、さらに和解の献げ物として雄牛をささげさせたのです。モーセは雄牛の血の半분을神様が臨在される祭壇に振りかけました。また、契約の書を読み上げ、イスラエルの民が「わたしたちは主が語られたことをすべて行い、守ります」と言うとき、残りの半분을民に振りかけたのです。そして、モーセは、「見よ、これは主がこれらの言葉に基づいてあなたたちと結ばれた契約の血である」と言っ

たのです。神様とイスラエルが結んだ契約の内容、それはモーセが読みあげた契約の書であり、イスラエルの民が「すべて行い、守ります」と誓ったことでありました。皆さんも大人になると、契約を結ぶということがあると思います。そのときに、大切なことは契約の内容をよく読んで確認することです。モーセは、イスラエルの民が神様と契約を結ぶにあたって、ちゃんとそれをしているのです。3節にありますように、神様のもとから戻ってきたモーセは、主のすべての言葉とすべての法をイスラエルの民に読み聞かせました。それを聞いて、民は、「わたしたちは、主が語られた言葉をすべて行います」と答えました。その民の意志を確認したうえで、モーセは主の言葉をすべて書きうつし、契約の書を作成するのです。そして、それを、契約を結ぶ際に、もう一度読み聞かせ、民の「わたしたちは主が語られたことをすべて行い、守ります」という言葉を聞いた上で、残りの血を振りかけて、契約を締結するのです。ですから、イスラエルの民は、後から、自分が何を約束したのか知らなかったとか、よく説明を受けなかったとか言い訳することはできないわけです。神様とイスラエルは、モーセを通して語られた主の言葉に基づいて、契約を結んだのです。しかし、なぜ、ここで、モーセは神様が臨在される祭壇とイスラエルの民に、和解のささげものである雄牛の血を振りかけて、「契約の血である」と言ったのでしょうか？それは、「もし契約を破るようなことがあれば、血を流してもかまわない」ということを表わすためであります。「見よ、これは主がこれらの言葉に基づいてあなたたちと結ばれた契約の血である」。このモーセの言葉は、神様とイスラエルの民の契約がまさに命がけの契約であることを教えているのです。

9節以下に、神様とイスラエルの民の代表者であるモーセたちが一緒に食事をしたことが記されています。もちろん、ここで食べたのは、モーセたちだけでありますが、その食卓に、神様が共にいてくださったのです。この食事は、神様とイス

ラエルの民の間に契約が結ばれたことのできなしいるしであります。このようにして、神様はイスラエルの神となり、イスラエルは神の民となったのです。

教会では、月に一度、礼拝の中で、イエス様が聖定された主の晩餐を祝います。皆さんも、見たことがあるでしょう？パンとぶどうジュースが出て来るあれです。イエス様は、主の晩餐の席で、杯を弟子たちに与えてこう言われました。「皆、この杯から飲みなさい。これは、罪が赦されるように、多くの人のために流される、わたしの血、契約の血である」(マタイ26:27)。イエスさまも、ここで「契約の血」についてお語りになりました。しかし、それは雄牛の血のことではありません。十字架の上で流されるご自分の血のことです。イエス様は、イエス様を信じる私たちの代表者として、十字架の上で血を流し、神様との契約を結んで、私たちを神の民としてくださったのです。それゆえ、私たちは自分で血を流すことなく、また自分の代わりに動物の血を流すこともなく、神様の民としていただいたのです。神様は、イエス・キリストにあって、いつも私たちと共に歩んでくださいます(マタイ28:20、ヨハネ14:20参照)。私たちが神様の言葉を守れず、従うことができなくても、イエス様の十字架の血のゆえに、私たちの罪を赦してくださって、私たちと共に歩んでくださるのです(ヨハネ1:7、マタイ1:23参照)。そのことを私たちはこれからも信じ続けたいと願います。お祈りをささげます。

天の父なる神様。

イエス様にあって、私たちと契約を結び、私たちをあなたの民としてくださった恵みを感謝します。どうぞ、私たちが、イエス様の十字架の血によって結ばれた契約が確かであることを固く信じることができるよう。

イエス様の御名前によってお祈りします。

アーメン。

(村田寿和)

〔今週の暗唱聖句〕 出エジプト記 24章8節b

「見よ、これは主がこれらの言葉に基づいてあなたたちと結ばれた契約の血である。」

〈ねらい〉

旧約の時代、神様はイスラエルの民に十戒を与え、モーセを通してイスラエルの人々をご自分の民としてくださいました。同じように、新約の時代、神様はイエス様によって、全ての人々をご自分の民としてくださっています。1年の終わりにこのことを覚え、新しい年も光の子どもとして歩んでいけるようにしましょう。

〈展開例〉

確認と話し合い

- ・この聖書の箇所タイトルは「契約の締結」となっていますが、「契約」とはなんですか。
- 家の契約、会社の契約など、様々な契約について話し合った上で、ここでは、神様がイスラエルの民と私たちにくださった約束であることを確認しましょう。
- ・神様はモーセにどのようにしなさいと命じていますか。
- モーセと代表者だけがシナイ山に登るように、そして、モーセだけが神様に近づくように命じておられます。モーセが契約の仲介者として立てられていることを確認します。
- ・モーセが立てられているのと同じように、今の私たちはどなたが立てられているか、話し合いましょう。
- イスラエルの民に結ばれた神様の契約は、今はイエス様によって、私たちにももたらされていることを確認しましょう。
- ・モーセがシナイ山のふもとに戻ると、民は何と言いましたか。
- 3節をもう一度読みましょう。民は、主の言

葉を守り行うと言っています。私たちが神様に聞き従うことが、契約の大前提であることを確認しましょう。

- ・民が献げ物をすると、モーセはどうしましたか。
- 献げられた動物の血を民に振りかけました。
- ・そのことにはどんな意味がありますか。
- 契約の血。そして、それはイエス様が十字架で流される血にもつながることを話し合いましょう。「イスラエルの民には動物の血が振りかけられましたが、私たちのために血を流されたのはどなたでしょうか」という聞き方をしてみましょう。
- ・モーセと民の代表者たちは、神様の前で何をしましたか。
- 食事をしました。本当は、聖書には神を見たものは死ぬと書いてあるのに、彼らは死にませんでした（出19:21、33:20等）。神様がイスラエルの民を自分の民としたように、今も私たちは神様の民としていただいているのです。

〈祈り〉

天の父なる神様、尊いお名前を賛美致します。神様は、昔モーセによってイスラエルの民をご自分のものとしてくださったように、イエス様を地上に送ってくださって、その血によって、今も私たちをご自分のものとしてくださいました。ありがとうございます。どうか、私たちも新しい年を迎えて、光のこどもとして、ますます神様に従うことが出来ますように。イエス様の御名によってお祈りします。アーメン。

対話の手掛かりとして……

①今日は今年最後の日曜日です。年末になると、この1年の間に起こった様々な出来事を振り返る特集がテレビなどで取り上げられています。皆さんにとって、今年はどのような1年だったのでしょうか。この世において、ある節目を迎えるとき、どうも過去を振り返る傾向があるようです。後ろを振り返って何をするかという、自分自身の歩みを評価するのです。あるいは、誰かから評価されるということもあるでしょう。学期が終わると、必ずもらうのは成績表です。この一学期間、どういうことが上手くできたか、できなかったかを評価されるのです。では、信仰生活においてはどうでしょうか。成績表が渡されるわけではありませんが、今年はちゃんと教会に行くことができたでしょうか？ちゃんと聖書を読んで、お祈りすることができたでしょうか？イエス様が教えてくださる愛をちゃんと実践できたでしょうか？そのように、信仰という物差しにおいて、今年の自分の歩みを測る人もいることでしょう。でも、覚えていただきたいことがあります、自分や他人が測るその評価によってだけで、本当の自分の価値は分からないのだということです。学校や部活の成績の良し悪しがあなたのすべてではありません。信仰生活をちゃんと実践できたかどうか、あなたの評価をすべて決めるのでもないのです。

②イスラエルの民は、「わたしたちは、主が語られた言葉をすべて行います」（出エ24:3,7）と主の前で誓い、神様との契約が締結されました。契約を結んでくださる神様は、「今、もしわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るならば、あなたたちはすべての民の間にあってわたしの宝になる」（出エ19:5）とおっしゃってくださいます。「わたしの宝」と呼んでくださるほどに、私たちの存在は尊く美しいのです。しかし、私

たち人間は、「主が語られた言葉をすべて行います」と約束しながら、そのとおりにすることができません。出エジプト記を読み進めていくと分かるのですが、イスラエルの民はこの後、「金の子牛」を造り、偶像礼拝をささげるのです（出エ32）。それほどに人間は神様の恵みを忘れやすいのです。「わたしの宝」と言ってくださる神様に対して、「神様の代わりなど、他にいくらでもいるのだ」と言って、自分中心に生きようとするのが人間なのです。ここで言われている「血による契約」に基づくならば、私たちは血を流して自分たちの罪を償わなければいけないのです。でも人間は、神様との契約に生きることを、真剣に考えてはいません。なぜ自分の命や全存在を懸けてまでも、神様と共に生きなければいけないのだと思っているのです。

③しかし、神様はいつも私たちと結ばれた契約を心に留め、それを最後まで守り抜いてくださるお方です。「わたしのことを何とも思っていない人間のために、命を捨てるなどという馬鹿げたことなどできるか」などとは決しておっしゃいません。私たちを罪から救い出すために、父なる神様のもとから遣わされた主イエスは、十字架につけられる前の夜、弟子たちにこうおっしゃいました。「これは、罪が赦されるように、多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である。」（マタイ26:28）。私たちは先日、クリスマスをお祝いしたばかりです。一年の終わろうとしている今、私たちは自らの歩みを振り返ります。そして、それを評価したり、評価されたりしながら、新しい年の歩みを始めようとしています。でもそのような歩みの中、主イエスが来てくださいました。主イエスの十字架によって示された神様の愛と救いの中に置かれている自分を見つめながら、新しい年の歩みを始めていきましょう。

2015年1～3月カリキュラム（第56号）

— 『子どもカテキズム』に基づく二年サイクル第2年—

月 日 教会暦・行事	主 題	子どもカテキズム	参照教理問答
		聖 書 箇 所	暗 唱 聖 句
	単 元 の 目 標		
1月4日	約束の地	問26, 33	—
		ヨシュア3章	ヘブライ13:8
	今年も、ただ主により頼み、信仰に支えられ、確かな歩みを始められる喜びを		
11日	ダビデとゴリアト	問13	ウ告白5:5
		サムエル上17:41～54	詩編18:36
	自分の勝利ではなく神の勝利を信じ、神のためにこの世との戦いに勇気を出そう		
18日	ダビデ契約	問23, 24	ウ小20
		サムエル下7:1～17	サムエル下7:9
	主イエスを証しする預言の確かさ、神の約束の真実さを覚え、感謝しよう		
25日	ソロモン王		
		列王上3章	箴言9:10
	神から受けた祝福を、神と人とのために用いる祝福されて生活を送ろう		
2月1日	ユダの滅亡		
		エレミヤ18:1～17	エレミヤ18:6b
	神の見えない御手の創造と滅ぼす真実のみわざを畏れよう		
8日	回復の預言		
		エゼキエル34:11～31	ヨハネ10:14
	真の牧者なる神の羊の群れとされている幸いを感謝しよう		
15日	捕囚からの解放		ウ小7, 10, 20, 46、ハイデ94
		イザヤ45:1～13	ローマ13:1
	異邦の王キュロスさえ用いて救う神の力と恵みを讃美しよう		
22日	礼拝の再建	問29	
		ネヘミヤ8:1～12	ルカ7:12～13
	礼拝がどれほど大きな恵みであり務めであるかを覚えよう		
3月1日	異邦人の救い	問21	
		イザヤ56:1～8	イザヤ1:7
	血筋によらずアブラハムの信仰に連なる者の救いを実現する神を賛美しよう		
8日 受難節	新しい契約	問24, 25	
		エレミヤ31:31～34	エレミヤ31:33b
	キリストにおける契約の成就を指し示し、旧約を福音として受け止めよう		
15日 受難節	苦難の僕		ウ小19, 20, 25, 27, 33
		イザヤ53章	イザヤ53:11
	キリストの苦しみの実りとされた自分じしんと主を誇りにしよう		
22日 受難節	受難のキリスト		ウ大49, 52、ハイデ16～19
		ヨハネ18:1～11	ヨハネ18:6
	私たちの救いのために、ひとり、戦い勝利された主イエスに感謝しよう		
29日 受難週	十字架のキリスト	問22～24, 26, 31	ウ小25, 84～86
		ヨハネ19:17～30	イザヤ53:12
	救いを成し遂げられた十字架の勝利者イエスさまを仰ぎ見よう		

2015年度 年間カリキュラム（第57～60号）

— 『子どもと親のカテキズム』に基づく二年サイクル—

（2015年4月～2016年3月）

	月 日	教会暦・行事	主題	子どもカテキズム
2015年 第57号	4月5日	復活祭	復活されたキリスト	
	4月12日		神と共に歩む	問1
	4月19日		神の子とされて	問1
	4月26日		神を知る喜びに生きる	問2
	5月3日		神と人に仕えて歩む	問2
	5月10日		イエスさまを信じる	問3
	5月17日		神の子とされた喜び	問3
	5月24日		呼び出されて生きる	問4
	5月31日		派遣されて生きる	問4
	6月7日	聖霊降臨祭	キリストの教会のはじめ	
	6月14日		愛に生きる	問5
	6月21日		祈りに生きる	問5
	6月28日		神の御言葉	問6
第58号	7月5日		人生の光	問6
	7月12日		聖書の内容	問7
	7月19日		人格としての神	問8
	7月26日		神の属性	問8
	8月2日		唯一の神	問9
	8月9日		偶像礼拝の空しさ	問10
	8月16日		三位一体・神の本質	問11
	8月23日		三位一体・神の経緯	問12
	8月30日		父なる神の本質	問13
	9月6日		創造者なる神	問14
	9月13日		摂理の神	問15
	9月20日		父なる神の親心	問16
	9月27日		人間・神のかたち	問17

年・号	月 日	教会暦・行事	主題	子どもカテキズム
第59号	10月4日		人間・神と人と共に	問17
	10月11日		人間の使命	問18
	10月18日		人間・罪の起源	問19
	10月25日		罪とは何か	問20
	11月1日		罪人の悲惨	問21
	11月8日		罪人の歩み	問22
	11月15日		わたしの罪 神の怒りと裁き	問23
	11月22日		完全な堕落 キリストの贖罪	問24
	11月29日	待降節	救い主の約束	問25
	12月6日	待降節	二性一人格	問26
	12月13日	待降節	キリスト・真の神	問27
	12月20日	降誕祭	キリストの降誕	(問26)
	12月27日		キリスト・真の人	問28
2016年	1月3日	新年	教会と共に歩む一年	(問4)
第60号	1月10日		イエス・キリストとは	問29
	1月17日		キリストの高い状態と低い状態	問30
	1月24日		祭司なるキリスト	問31
	1月31日		預言者なるキリスト	問32
	2月7日		王なるキリスト	問33
	2月14日		聖霊・ただ恵みによって	問34
	2月21日		聖霊・キリストとの交わり	問35
	2月28日		救いとは何か	問36
	3月6日	レント	聖化の歩み	問37
	3月13日	レント	救いの確かさ	問38
	3月20日	受難週	十字架のキリスト	
	3月27日	復活祭	復活のキリスト	

『教会学校教案誌』発行のための 自由募金のお願い

教会のかしらなる主イエス・キリストの御名をあがめます。

中部中会日曜学校委員会（2007年4月中部中会第一回定期会で教育委員会から改組）は、日本キリスト改革派教会をはじめとする改革・長老主義諸教会の教会学校・日曜学校教育に資することを目的として、『教会学校教案誌』を発行しています。2001年4月に始まり、すでに13年目に入り、第55号まで発行して参りました。中部中会ではほとんどの教会により採用され、改革派教会全体でもおよそ70教会で採用されています。大会教育委員会もご支持を表明してくださっています。皆様のご支援に心からの感謝を申し上げます。

『教案誌』の発行は中部中会の事業として行われておりますが、中部中会日曜学校委員会では、あわせて皆様からの自由募金によってご支援いただきたいと願っています。子どもたちの信仰教育のために、ぜひ皆様からのお祈りと募金のご支援をいただきたく、よろしくお願い申し上げます。教案誌を購入していただきやすくするために、教案誌の頒布価格を印刷・製本単価ぎりぎりにおさえています。『教案誌』をご購入くださることも発行のための支援となりますので、ご購入いただくことによってもご支援くださいますよう、お願いいたします。

目標金額 30万円／年

送 金 先 郵便振替 伊藤治郎

00890-2-148183

※通信欄に「教案誌のための自由募金」と明記してください。

〈執筆・編集者よりひとこと〉

●新座志木教会CS教師が分担して執筆させていただきました。牧師として最終校正を担当しましたが、日ごろの教会学校での経験がいかされ、それぞれ「良い出来」？ と自画自賛しております。というような冗談はともかく、この展開例を下敷きに、それぞれに工夫していただきまして、展開例が良きヒントとし用いられ、皆様の教会学校の分級が豊かなものとなりますようにお祈りいたします。(杉山昌樹)

●来年度から、カテキズムが新しくなることを紹介させて頂きました。新しいぶどう酒には新しい革袋が必要です。新しい奉仕者が与えられ、教案誌がさらに活性化し、全国の教会において用いて頂けるように、願っています。(辻 幸宏)

〈あとがき〉

●第55号をお届けします。今号も多くの方々のご協力をいただきました。神様と執筆者・読者の皆様に心からの感謝を申し上げます。

●特に、『子どもと親のカテキズム』の原稿をお寄せくださった牧田吉和教師(山田教会牧師)に感謝いたします。是非、教師会で熟読して下さいますよう、お願いいたします。牧田先生は、『子どもと親のカテキズム』の主な執筆者の一人でもあり、既に、詳しい講演を6月の大会役員修養会でもしていただきました。教案誌への原稿は、2回に分けて掲載されますが、今回は、カテキズム作成に至る歴史的経緯が取り扱われ、次回は、カテキズムの内容の説明がなされます。各教会伝道所の教師会で、役員修養会の講演を聞いておられる牧師にも加わっていただいて協議して下さると有益と思われます。

●『子どもと親のカテキズム』は、長い準備期間を経て、この10月の定期大会で発行されます。私たちの教案誌も、このカテキズムに基づき、来年4月からのカテキズム教案を執筆し、皆様に提供することになります。長く用いられてきた「子どもカテキズム」に感謝しつつ、新しいカテキズムによって養われる子どもたち、また家庭礼拝を

思い、感謝にたえません。一人でも多くの皆さんが手に取り、繰り返して口ずさんでくださいますよう、お願いいたします。

●『子どもと親のカテキズム』の執筆は大会教育委員会によってなされ、販売も大会教育委員会によって継続してなされていきます。問い合わせは、大会教育委員会と教案誌編集部を兼ねている、安田直人まで。

E-mail: yasuda.naoto112@gmail.com

●教案誌編集部の体制、今後の教案誌発行の仕方などについても、大会後に報告をさせていただきます。様々に形が変わりましても、安定した教案誌の発行を継続できますよう、続けてお祈りください。

●日本キリスト改革派教会の教育機関紙『リジョイス』の「いのちのパン」についても、ご意見をお寄せください。当教案誌編集部より提供させていただきます。それぞれの祈りの場が主の祝福に満たされますように。

●教案誌のためにご奉仕くださる方を募っています。ぜひ、編集部にお気軽に声をかけてください。問い合わせは相馬伸郎まで。

E-mail: iwanoue@me.ccnw.ne.jp

〈購読の申し込み〉

●『教会学校教案誌』をぜひご購読ください。また、『子どもカテキズム』もぜひお求めください。教案誌はバックナンバーもあります。第44号までは一部500円で販売しています(品切れの号もあり)。

●教案誌購読受付と送付は大垣伝道所の辻幸宏教師が担当しています。お求めは下記までご連絡ください。『子どもカテキズム』(300円)、副読本『主は羊飼い』(800円)のお買い求めも下記までお願いします。

大垣伝道所 辻幸宏まで

〒503-0996 大垣市島町283

Tel/Fax. 0584-91-3538

E-mail: yukihiro.tsuji@nifty.ne.jp

☆ 執 筆 者 一 覧 ☆

まえがき	二宮 創 (太田伝道所宣教教師)
三川栄二 (稲毛海岸教会牧師)	相馬伸郎 (名古屋岩の上教会牧師)
巻頭説教	牧野信成 (西神教会牧師)
川杉安美 (綱島教会牧師)	宮崎契一 (奈良伝道所宣教教師)
『子どもと親のカテキズムについて』(1)	小宮山裕一 (ひたちなか教会牧師)
牧田吉和 (山田教会牧師)	長谷川潤 (四日市教会牧師)
絵本に心を耕されて—その1	村田寿和 (羽生栄光教会牧師)
望月鈴子 (浜松伝道所会員)	分級展開例
聖書黙想・説教展開例	小学科 新座志木教会・教会学校教師会
木下裕也 (名古屋教会牧師)	中学科 藤井 真 (堺みくに教会牧師)
辻 幸宏 (大垣伝道所協力牧師)	イラスト作画
安田直人 (田無教会牧師)	表紙 長谷川いのり (関キリスト教会信徒)
浅野正紀 (せんげん台教会牧師)	本文 岡野美佳 (青葉台キリスト教会信徒)
大西良嗣 (滋賀摂理教会牧師)	

☆ 編 集 部 ☆

相馬伸郎 (長)	名古屋岩の上教会牧師
木下裕也	名古屋教会牧師
辻 幸宏	大垣伝道所協力牧師
二宮 創	太田伝道所宣教教師
長谷川潤	四日市教会牧師
安田直人	田無教会牧師

日本キリスト改革派教会 中部中会『教会学校教案誌』

2014年10・11・12月号 (季刊)

第55号

2014年8月25日発行

発行	日本キリスト改革派教会 中部中会 日曜学校委員会
発行所	日本キリスト改革派教会 中部中会 教会学校教案誌編集部 名古屋岩の上教会 牧師 相馬伸郎 〒458-0021 愛知県名古屋市緑区滝の水2-2012 Tel/Fax. 052-895-6701
郵便振替口座	00890-2-148183「伊藤治郎」
編集・印刷	株式会社あるむ
頒価	900円 (本体価格)
